

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県鳥取市

MOTO DAKA YUMI NO KI  
本 高 弓 ノ 木 遺 跡

(1区～3区)

2011

鳥取県埋蔵文化財センター  
国土交通省 鳥取河川国道事務所



一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県鳥取市

MOTO DAKA YUMI NO KI  
本 高 弓 ノ 木 遺 跡

(1区～3区)

2011

鳥取県埋蔵文化財センター  
国土交通省 鳥取河川国道事務所





1 調査地遠景(南から)



2 溝9(新)、杭列・構造物群(新)検出状況(南西から)



1 溝9、杭列・構造物群出土穂摘具(保存処理後)



2 穂摘具W10(保存処理前)



3 穂摘具W53(保存処理前)

## 序

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う発掘調査には、平成20年度から着手し、同年に「松原古墳群」及び「本高弓ノ木遺跡」の発掘調査を鳥取県埋蔵文化財センターが実施しました。

このうち、鳥取市に所在する「本高弓ノ木遺跡」では古墳時代の水田耕作に関連したと考えられる溝状遺構や同時代の鉄刃を差し込んだ木製の穂摘み具が出土し、当時の稲作のようすや農具が鉄器化していく過程を知る上で貴重な発見となりました。これらは、当地域の農業史を解明する上で欠くことのできない調査成果となりました。

本書はその調査成果を報告書としてまとめたものです。この報告書が、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財が郷土の誇りとなることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省鳥取河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

鳥取県埋蔵文化財センター  
所 長 久保 穰二郎

## 序 文

一般国道9号は山陰地方を東西に結ぶ主要幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。このうち、国土交通省鳥取河川国道事務所は、岩美郡岩美町(鳥取-兵庫県境)から鳥取市までを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

鳥取西道路は、鳥取市本高から同市青谷町青谷にかけての、一般国道9号の交通渋滞の緩和、災害時や緊急時における緊急輸送の代替路線としての機能分担などを目的とし、さらに、山陰の地方都市間の連携を強化するとともに、環日本海交流の基幹軸の一翼を担う高規格幹道路(自動車専用道路)として整備を行っています。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、平成20年度は「松原古墳群」、「本高弓ノ木遺跡」などについて鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第94条の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に記録保存のための発掘調査を実施することとなり、鳥取県埋蔵文化財センターと発掘調査の委託契約を締結し、発掘調査が行われました。

本書は、「本高弓ノ木遺跡」の発掘調査の成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深め、さらに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省においても文化財保護に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた鳥取県埋蔵文化財センターの皆さまに、心から感謝申し上げます。

平成23年3月

国土交通省 鳥取河川国道事務所  
所 長 田 中 衛



# 例 言

- 1 本報告書は、国土交通省鳥取河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査として平成20年度に行った、本高弓ノ木遺跡1区～3区の発掘調査報告書である。
- 2 本報告書に記載した本高弓ノ木遺跡の所在地は、鳥取県鳥取市本高97番地外である。調査面積は2,463㎡である。
- 3 本報告書で示す標高は、2級基準点TK - 31を基点とする標高値を使用した。方位は、公共座標北を示す。なお、磁北は座標北に対し6°3′23″西偏、真北は約4′43″東偏する。X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。
- 4 本報告書に記載の地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「鳥取北部」・「鳥取南部」・「浜村」・「鹿野」、鳥取市発行の「鳥取市都市計画図」の一部を使用した。
- 5 本報告にあたり、基準杭・方眼杭打設、調査後航空写真撮影を業者委託した。
- 6 本報告書に記載した遺物の実測・浄書は鳥取県埋蔵文化財センターで行った。
- 7 本報告書で使用した遺構・遺物写真は調査担当職員が撮影した。
- 8 本報告書の編集・執筆は北・岩垣が行った。
- 9 発掘調査によって得られた図面、写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターに保管している。
- 10 報告書作成に当たって、下記の方々及び機関に指導、助言、御協力いただいた。  
魚津知克、工楽善通、山田昌久(50音順、敬称略)、鳥取市教育委員会

## 凡 例

- 1 遺物の注記における遺跡名には「弓ノキ」を略号とし、合わせて「遺構名、遺物番号、日付」を記入した。
- 2 本報告書では遺構名に略号を用いていないが、以下のものは調査時に遺構略号を用いた。  
溝状遺構：SD
- 3 本報告書における遺構番号は発掘調査時から変更したものがあり、両者の対応は下の対照表に示した。

調査区	報告遺構名	調査時名称	調査区	報告遺構名	調査時名称
1区	溝 1	SD 1	3区	溝 7	SD 3
2区	溝 2	SD 7		溝 8	SD 8
	溝 3	SD 4 (中央)		溝 9 (新)	SD 4 (上部)
	溝 4 (西)	SD 4 (西)		溝 9 (古)	SD 4 (下部)
	溝 4 (東)	SD 4 (東)		溝10	SD 2
	溝 5	SD 6		杭列・構造物群(新)	SD 4 西杭列・東杭列(上部)
	溝 6	SD 5		杭列・構造物群(古)	SD 4 東杭列(下部)

- 4 本報告書における実測図は、基本的に下記の縮尺で掲載したが、特殊なものについては、その都度縮尺を変更している。
  - (1) 遺構図：1/40・1/80
  - (2) 遺物実測図 - 土器：1/4、木製品：1/2・1/4・1/10、玉：1/2
- 5 遺構図・遺物実測図に用いたトーンおよび記号は、特に説明がない限り以下のとおりである。
 

土層断面図中の記号 D：攪乱、■：基盤層、▨：石、■：木製品

W：木製品、S：石製品、■：赤色塗彩範囲

遺物出土ポイント：●(土器類)・○(木製品)
- 6 遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、それ以外のものは白抜きで示した。
- 7 遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。
- 8 本報告書で用いた土壌・土器の色名は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』によっている。また、土壌色名に続く( )内にはマンセル記号を併記した。
- 9 本報告書における遺構・遺物の時期決定は下記参考文献に基づいている。

### 【参考文献】

- 1 清水真一 1992「因幡・伯耆地域」正岡陸夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社
- 2 谷口恭子・前田均1991「第4章まとめ 第2節遺物について」『岩吉遺跡Ⅲ』鳥取市文化財報告書30
- 3 牧本哲雄 1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ 園第6遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書61
- 4 田辺昭三 1981『須恵器大成』 角川書店
- 5 八峠興1998「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究』XⅢ 日本中世土器研究会
- 6 中森 祥 2006「鳥取県における中世後期土師器の展開」『調査研究紀要』1 鳥取県埋蔵文化財センター

# 目 次

卷頭図版	
序	
序文	
例言	
凡例	
<b>第1章 調査の経緯</b>	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と方法	1
第3節 調査体制	2
<b>第2章 遺跡の位置と環境</b>	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
<b>第3章 調査の成果</b>	
第1節 調査成果の概要	7
第2節 1区の調査	9
第3節 2区の調査	15
第4節 3区の調査	22
<b>第4章 自然科学分析の成果</b>	
第1節 本高弓ノ木遺跡における放射性炭素年代測定	57
第2節 本高弓ノ木遺跡における樹種同定	59
第3節 本高弓ノ木遺跡3区における珪藻分析	62
第4節 本高弓ノ木遺跡3区における植物珪酸体分析	74
<b>第5章 総括</b>	81
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第10図 2区遺構配置図	15
第2図 周辺遺跡分布図	5	第11図 2区土層断面図	16
第3図 調査地の位置	8	第12図 溝2	17
第4図 調査地全体図	9	第13図 溝3	18
第5図 1区遺構配置図	10	第14図 溝3出土土器	18
第6図 1区土層断面図	11	第15図 溝4(1)	19
第7図 溝1	12	第16図 溝4(2)	20
第8図 1区包含層出土遺物(1)	13	第17図 溝4出土土器	20
第9図 1区包含層出土遺物(2)	14	第18図 溝5	21

第19図	溝 6	21	第43図	杭列・構造物群(新)構造物 1、杭列 1・2 木製品	41
第20図	2 区包含層出土土器	21	第44図	杭列・構造物群(新)構造物 2、杭列 3・4 木製品	42
第21図	2 区包含層出土木製品	21	第45図	溝 9 (古)、杭列・構造物群(古)平面図	43
第22図	3 区遺構配置図	22	第46図	杭列・構造物群(古)断面図・立面図	44
第23図	3 区北壁土層断面図(1)	23	第47図	溝 9 (古)出土土器	45
第24図	3 区北壁土層断面図(2)	24	第48図	溝 9 (古)最下層出土土器	45
第25図	溝 7	25	第49図	溝 9 (古)出土木製品(1)	46
第26図	溝 7 出土遺物	25	第50図	溝 9 (古)出土木製品(2)	47
第27図	溝 8・9、杭列・構造物群平面図	26	第51図	杭列・構造物群(古)木製品(1)	48
第28図	溝 8・9、杭列・構造物群土層断面図	27	第52図	杭列・構造物群(古)木製品(2)	49
第29図	溝 8・9、杭列・構造物群最上層遺物出土状況	28	第53図	溝 10	50
第30図	溝 8・9、杭列・構造物群最上層出土土器	29	第54図	溝 10 出土遺物	51
第31図	溝 8・9、杭列・構造物群最上層出土木製品(1)	30	第55図	3 区包含層出土土器	51
第32図	溝 8・9、杭列・構造物群最上層出土木製品(2)	31	第56図	3 区包含層出土木製品	52
第33図	溝 8・9、杭列・構造物群最上層出土木製品(3)	31	第57図	本高弓ノ木遺跡 3 区における主要珪藻ダイアグラム(1)	70
第34図	溝 8 出土土器	32	第58図	本高弓ノ木遺跡 3 区における主要珪藻ダイアグラム(2)	71
第35図	溝 8 出土木製品	32	第59図	本高弓ノ木遺跡 3 区における主要珪藻ダイアグラム(3)	72
第36図	杭列・構造物群(新)の遺構名称	33	第60図	本高弓ノ木遺跡 3 区における主要珪藻ダイアグラム(4)	73
第37図	溝 9 (新)、杭列・構造物群(新)平面図	35・36	第61図	本高弓ノ木遺跡 3 区基本層序(北壁)における植物珪酸体分析結果	78
第38図	杭列・構造物群(新)断面図・立面図	37	第62図	本高弓ノ木遺跡 3 区基本層序(自然河道)における植物珪酸体分析結果	79
第39図	溝 9 (新)出土土器	38	第63図	本高弓ノ木遺跡溝 9 における植物珪酸体分析結果	80
第40図	構造物 1 出土土器	38			
第41図	杭列・構造物群(新)構造物 1 木製品(1)	39			
第42図	杭列・構造物群(新)構造物 1 木製品(2)	40			

## 挿表目次

表 1	出土土器観察表(1)	53	表 8	本高弓ノ木遺跡における樹種同定結果	60
表 2	出土土器観察表(2)	54	表 9	本高弓ノ木遺跡 3 区における珪藻分析結果(1)	68
表 3	出土木製品観察表(1)	55	表 10	本高弓ノ木遺跡 3 区における珪藻分析結果(2)	69
表 4	出土木製品観察表(2)	56	表 11	本高弓ノ木遺跡 3 区における植物珪酸体分析結果	75
表 5	出土玉類観察表	56			
表 6	測定試料及び処理	57			
表 7	測定結果	57			

# 巻頭図版目次

## 巻頭図版 1

- 1 調査地遠景(南から)
- 2 溝9(新)、杭列・構造物群(新)検出状況(南西から)

## 巻頭図版 2

- 1 溝9、杭列・構造物群出土穂摘具(保存処理後)
- 2 穂摘具W10(保存処理前)
- 3 穂摘具W53(保存処理前)

# 図版目次

- |       |    |                               |  |  |  |
|-------|----|-------------------------------|--|--|--|
| PL. 1 | 1  | 調査後航空写真(北から)                  |  |  |  |
|       | 2  | 調査後航空写真(俯瞰)                   |  |  |  |
| PL. 2 | 1  | 調査前風景(北から)                    |  |  |  |
|       | 2  | 調査前風景(南東から)                   |  |  |  |
|       | 3  | 調査前風景(北東から)                   |  |  |  |
| PL. 3 | 1  | 1区完掘状況(北から)                   |  |  |  |
|       | 2  | 1区完掘状況(南西から)                  |  |  |  |
|       | 3  | 1区完掘状況(東から)                   |  |  |  |
|       | 4  | 1区西壁土層断面(北東から)                |  |  |  |
|       | 5  | 1区北壁土層断面(南東から)                |  |  |  |
| PL. 4 | 1  | 溝1完掘状況(北から)                   |  |  |  |
|       | 2  | 溝1土層断面(南から)                   |  |  |  |
|       | 3  | 1区包含層田下駄出土状況                  |  |  |  |
|       | 4  | 2区完掘状況(南西から)                  |  |  |  |
| PL. 5 | 1  | 2区完掘状況(北東から)                  |  |  |  |
|       | 2  | 2区完掘状況(北西から)                  |  |  |  |
| PL. 6 | 1  | 2区北壁土層断面(南東から)                |  |  |  |
|       | 2  | 溝2土層断面(南から)                   |  |  |  |
|       | 3  | 溝3・溝4土層断面(南から)                |  |  |  |
|       | 4  | 溝3土層断面(南から)                   |  |  |  |
|       | 5  | 溝4(西)土層断面(南から)                |  |  |  |
|       | 6  | 溝4(東)土層断面(南から)                |  |  |  |
| PL. 7 | 1  | 溝4杭列検出状況(南から)                 |  |  |  |
|       | 2  | 溝4杭列検出状況(南西から)                |  |  |  |
|       | 3  | 溝4木製品出土状況(北から)                |  |  |  |
|       | 4  | 溝5土層断面(南西から)                  |  |  |  |
|       | 5  | 溝6土層断面(南西から)                  |  |  |  |
| PL. 8 | 1  | 3区北壁(西端部)土層断面(東から)            |  |  |  |
|       | 2  | 3区北壁(F7グリッド周辺)土層断面(南西から)      |  |  |  |
|       | 3  | 3区北壁(J7グリッド周辺)土層断面(南東から)      |  |  |  |
| PL. 9 | 1  | 溝7遺物出土状況(南西から)                |  |  |  |
|       | 2  | 溝7遺物出土状況(北東から)                |  |  |  |
|       | 3  | 溝8・9、杭列・構造物群検出状況(西から)         |  |  |  |
| PL.10 | 1  | 溝9(新)、杭列・構造物群(新)検出状況(西から)     |  |  |  |
|       | 2  | 溝9(新)、杭列・構造物群(新)検出状況(南西から)    |  |  |  |
|       | 3  | 溝9(新)、小溝、杭列・構造物群(新)完掘状況(西から)  |  |  |  |
|       | 4  | 溝9(新)、小溝、杭列・構造物群(新)完掘状況(南西から) |  |  |  |
|       | 5  | 溝9(新)、小溝、杭列・構造物群(新)完掘状況(北から)  |  |  |  |
|       | 6  | 小溝、構造物1、杭列1・2完掘状況(北から)        |  |  |  |
|       | 7  | 小溝、構造物1、杭列1・2完掘状況(西から)        |  |  |  |
|       | 8  | 溝9(新)土層断面(北から)                |  |  |  |
|       | 9  | 小溝土層断面(北から)                   |  |  |  |
|       | 10 | 杭列1完掘状況(北から)                  |  |  |  |
|       | 11 | 杭列2完掘状況(北東から)                 |  |  |  |
|       | 12 | 杭列1・2、構造物1完掘状況(北から)           |  |  |  |
|       | 13 | 杭列1完掘状況(北西から)                 |  |  |  |
|       | 14 | 杭列2完掘状況(東から)                  |  |  |  |
|       | 15 | 杭列3・4完掘状況(北西から)               |  |  |  |
|       | 16 | 杭列3完掘状況(南東から)                 |  |  |  |
|       | 17 | 杭列4完掘状況(北西から)                 |  |  |  |
|       | 18 | 溝9(古)・杭列4・構造物3完掘状況(北東から)      |  |  |  |
|       | 19 | 杭列4・構造物3完掘状況(東から)             |  |  |  |
|       | 20 | 構造物3完掘状況(東から)                 |  |  |  |
|       | 21 | 構造物4完掘状況(北西から)                |  |  |  |
|       | 22 | 溝9(古)完掘状況(北から)                |  |  |  |
|       | 23 | 溝9土層断面(南から)                   |  |  |  |
|       | 24 | 溝9(古)、杭列・構造物群(古)完掘状況(俯瞰)      |  |  |  |
|       | 25 | 溝10完掘状況(北から)                  |  |  |  |
|       | 26 | 溝10土層断面(北から)                  |  |  |  |
|       | 27 | 溝10土層断面(南西から)                 |  |  |  |
|       | 28 | 1区包含層出土土器(1)                  |  |  |  |

	2	1区包含層出土土器(2)		2	杭列・構造物群(新)出土木製品(6)
	3	1区包含層出土土器(3)	PL.31	1	杭列・構造物群(新)出土木製品(7)
	4	1区包含層出土木製品(1)		2	溝9(古)出土土器(1)
	5	1区包含層出土木製品(2)		3	溝9(古)出土土器(2)
PL.22	1	溝3出土土器		4	溝9(古)出土石製玉
	2	溝4出土土器(1)	PL.32		溝9(古)出土土器(3)
	3	溝4出土土器(2)	PL.33	1	溝9(古)出土土器(4)
	4	溝7出土土器		2	溝9(古)出土土器(5)
	5	溝3、2区包含層出土土器		3	溝9(古)出土穂摘具 W53
PL.23	1	2区包含層出土木製品		4	溝9(古)出土穂摘具 W54
	2	溝8出土木製品	PL.34	1	溝9(古)出土木製品(1)
PL.24		溝8・9、杭列・構造物群出土土器		2	溝9(古)出土木製品(2)
PL.25	1	溝8・9、杭列・構造物群最上層出土土器	PL.35	1	杭列・構造物群(古)木製品(1)
	2	溝8・9、杭列・構造物群最上層出土穂摘具 W10(1)		2	杭列・構造物群(古)木製品(2)
PL.26	1	溝8・9、杭列・構造物群最上層出土穂摘具 W10(2)	PL.36	1	構造物4木製品(1)
	2	溝8・9、杭列・構造物群最上層出土一木平鋤 W11		2	構造物4木製品(2)
	3	溝8・9、杭列・構造物群最上層出土木製品(1)	PL.37	1	溝10出土土器(1)
PL.27	1	溝8・9、杭列・構造物群最上層出土木製品(2)		2	溝10出土土器(2)
	2	溝8・9、杭列・構造物群最上層出土木製品(3)	PL.38	1	溝10出土木製品
PL.28	1	杭列・構造物群(新)出土木製品(1)		2	3区包含層ほか出土土器
	2	杭列・構造物群(新)出土木製品(2)	PL.39	1	3区包含層出土木製品(1)
PL.29	1	杭列・構造物群(新)出土木製品(3)		2	3区包含層出土木製品(2)
	2	杭列・構造物群(新)出土木製品(4)	PL.40		出土木製品の樹種1
PL.30	1	杭列・構造物群(新)出土木製品(5)	PL.41		出土木製品の樹種2
			PL.42		出土木製品の樹種3
			PL.43		出土木製品の樹種4
			PL.44		出土木製品の樹種5
			PL.45		出土木製品の樹種6
			PL.46		珪藻分析1
			PL.47		珪藻分析2
			PL.48		植物珪酸体分析

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

本調査は、一般国道9号鳥取西道路の改築工事に伴い、鳥取市本高地内の工事予定地内に所在する本高弓ノ木遺跡の記録作成を目的として、平成20年度に行ったものである。

山陰地方では、国道9号線の交通混雑緩和、荒天時の交通障害解消、災害時の緊急輸送の代替路線確保及び将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められている。

鳥取西道路の計画地内および隣接地には、多数の周知の遺跡があり、建設に先立って計画地内の遺跡並びに遺跡の範囲を確認する必要性が生じた。このため、平成19年度から鳥取市教育委員会によって、国庫補助事業として逐次試掘・確認調査が行われた。その結果を受け、文化財保護法に基づく手続きを踏まえて、平成20年度に、鳥取県埋蔵文化財センターが国土交通省鳥取河川国道事務所の委託を受けて調査主体となり、本高弓ノ木遺跡の発掘調査を実施した。

## 第2節 調査の経過と方法

### 1 調査地の名称と調査方法（第3・4図）

本高弓ノ木遺跡は、千代川西岸の標高約8mの沖積地に立地する。調査地は、橋脚工事部分2箇所と、トレンチャー工法部分1箇所の3箇所に分かれていた。そこで、北から順に1区、2区、3区と名称をつけて調査を行った。1区は一辺約20mの正方形、2区は約16m×20mの長方形、3区は弧を描く南北幅約10m、東西約90mのトレンチ状の調査区を設定した。いずれの地区も地目は水田であった。

各地区とも、世界測地系に準拠する公共座標第V系に載るように10m方眼の基準杭を設定した。方眼南北ライン(X軸並行ライン)には西から昇順にアルファベットで名称を付し、方眼東西ライン(Y軸並行ライン)には北から昇順にアラビア数字で名称を付した。方眼杭の名称はそれぞれのライン名を組み合わせて、「H2杭」(X:-57150m、Y:-12300m)などと呼称した。方眼に載った10m平方を示すグリッド名には、北西の方眼杭名を採って、「H2グリッド」(=H2杭・I2杭・I3杭・H3杭で囲まれた範囲)などと呼称した。標高値は、2級基準点TK-31の12.773mを使用している。

排水溝を兼ねた土層観察用のトレンチ掘削はスコップ、包含層および遺構掘削は移植ゴテ・ガリまたはクワ・ジョレンを用いて行い、遺物の集中する箇所については移植ゴテと竹ベラを用いて掘削を行った。地盤が極めて軟弱で、常に帯水する条件のため、掘り下げは非常に困難であった。

検出した遺構・遺物の記録には、光波トランシットおよび自動レベルを用い、簡易遣り方測量および光波トランシットによる座標測量を行った。現地での写真撮影は35mm判、ブローニー(6×7)判により地上又は写真用足場上から行った。また、調査前状況及び遺跡の完掘状況写真については、ラジコンヘリコプターからの空中写真撮影(ブローニー判カメラ使用)も併せて行った。遺物写真撮影は、ブローニー(6×7)判および4×5判カメラを用いた。いずれも白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用し、適宜デジタルカメラも使用した。

### 2 調査の経過

9月24日から9月30日にかけて重機を用いて表土掘削を行った。その後、10月1日に発掘調査に着手した。ただし、鳥取県埋蔵文化財センター調査担当(美和事務所)では、鳥取西道路改築に伴う発掘

## 第1章 調査の経緯

調査として別件の調査(松原古墳群)を行っていたため、同日からは本高弓ノ木遺跡の調査を大規模に行うことができなかった。そのため、調査員1名と作業員8名程度の、わずかな人員で調査に着手せざるを得なかった。作業は各調査区の外周などに排水溝を兼ねた約60cm幅のトレンチを掘削することから始めた。このトレンチによって各調査区の遺構・遺物包含層の確認を行った。10月14日には松原古墳群の調査が終了し、すべての調査員、作業員が本高弓ノ木遺跡に合流し、本格的な調査が始まった。本格的な掘り下げは1区から着手し、1区の調査終了後、3区、続いて2区の調査を開始した。

1区の面的な掘り下げは10月14日に着手した。10月17日に溝1を検出して掘り下げを開始し、10月20日に完掘した。1区の調査は10月22日に終了した。2区の調査は11月11日に着手した。2区は、排土搬出の都合上、表土除去を行っていなかったため、11月11日から12日にかけて重機による表土掘削を行った。その後、排水溝を兼ねたトレンチの掘削と、面的な掘り下げを開始した。11月14日に遺構を検出して掘り下げを開始し、11月27日にすべての遺構を完掘、12月2日に2区の調査は終了した。

3区の面的な掘り下げは10月20日に着手した。10月29日には木製品を多く含む溝9などの遺構群を検出したほか、調査地東部では溝10を検出した。溝9とその周辺からは木製品が多量に出土しただけでなく、杭や矢板、木造構造物が多数検出されたため、調査に最も多くの作業量を費やした。溝9周辺の遺構群は12月9日に完掘した。発掘作業員の稼働は12月9日に終了し、12月10日に航空写真撮影を行ってすべての作業を終了した。調査面積は2,463㎡である。

## 第3節 調査体制

下記の体制で発掘調査を行った。

### 鳥取県埋蔵文化財センター

所 長	久保 穰二郎
次 長	田村 隆志(兼総務係長 平成20年6月30日異動・転出)
総 務 係	
係 長	梅山 昭美(平成20年7月1日異動)
副 主 幹	福島 良
主 事	浜辺 奈都美

### 発掘事業室

室 長	山柁 雅美(兼調整係長)
調 整 係	
文化財主事	濱 隆造

### 調査担当(美和調査事務所)

文化財主事	小口 英一郎(調査担当責任者)、野田 真弓、北 浩明
発掘調査員	岩垣 命



## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

本高弓ノ木遺跡が所在する鳥取市は、鳥取県東部に位置し、東は岩美町・若桜町、西は湯梨浜町、南は智頭町と接する。総面積765.66km<sup>2</sup>、人口約20万人を擁する県庁所在地である(第1図)。

地勢は、東、西、南の三方を山に囲まれ、北方には鳥取砂丘、日本海が広がっている。平野中央部には中国山地の沖ノ山(標高1,319m)に源を発する総延長56.8kmの千代川せんだいがわが平野を二分して貫流し、野坂川、袋川等の支流を集めて日本海へと注いでいる。

鳥取平野は、更新世～完新世初期には鳥取湾(鳥取潟)と称される入海あるいは潟湖であったものが、縄文時代前期以降の海退による沼沢地化と、古墳時代以後に千代川が運ぶ膨大な土砂の堆積により形成された沖積低地である。平野の西端には県下最大の潟湖である湖山池こやまいけがある。湖山池は周囲18km、面積7.25 km<sup>2</sup>を測り、かつては入海だったものが砂州で湾口部が閉塞され潟湖化したものである。湖山池周辺の山地は、南西方向に聳える高山(標高1,053m)などの1,000mクラスの山から北方に向かって段階的に高度を下げており、海拔400m以下の山地では起伏が小さくなっている。これらの山間を、湖山川、野坂川などの中小河川がぬうように流れている。

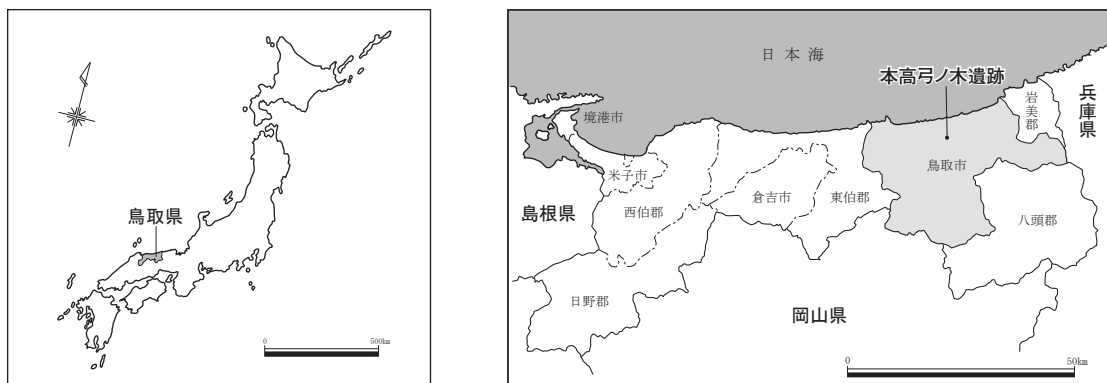
本高弓ノ木遺跡は、高山から派生する本高丘陵と釣山丘陵に挟まれた狭い谷底平野に立地している。平野南縁を有富川が北東に向かって流れ、遺跡の約1 km東で千代川と合流している。

### 第2節 歴史的環境 (第2図)

#### 1 縄文時代

鳥取市周辺では、縄文時代前半期の遺跡はあまり多くは知られていない。白兔海岸から1 km余り内陸の内海中所在遺跡(第2図:148)で前期中頃の磯ノ森式が採集されているほか、前期末の大歳山式土器が千代川東岸の美和古墳群(43)、湖山池南東岸の桂見遺跡(107)から少量出土している。中期の遺跡には、栃木山遺跡(8)、追後遺跡(2)、天神山遺跡(100)などがあげられる。

後期になると湖山池南東岸などで遺跡数が増加し、桂見遺跡、東桂見遺跡(106)、布勢第1遺跡(103)、青島遺跡(113)などが形成される。桂見遺跡は、丸木舟2艘をはじめとする大量の遺物が出土した当地域最大の縄文遺跡の1つである。千代川左岸の釣山北西に位置する山ヶ鼻遺跡(62)では、後期後葉から晩期前葉の土器が出土している。晩期には、千代川左岸の有富川流域に本高円ノ前遺跡(58)が、



第1図 遺跡位置図

## 第2章 遺跡の位置と環境

千代川の自然堤防上に古海遺跡(63)が形成され、まとまった量の突帯文土器が出土している。このほか湖山池東岸の岩本第2遺跡(128)、帆城遺跡(102)、湖山第2遺跡(97)、岩吉遺跡(92)、大桝遺跡(88)などで土器片が出土している。千代川右岸には、後期から晩期の貯蔵穴が検出された大路川遺跡(33)、西大路土居遺跡(29)、古市遺跡(25)がある。これらの鳥取平野の縄文遺跡は、集落像を明らかにしうる調査例は少ないものの、後期から遺跡数が増加し、後期後半から晩期にかけて自然堤防上や平野中心部の微高地へと進出する状況がうかがえる。

### 2 弥生時代

弥生開始期の具体的様相は明らかではない。前期の遺物が出土した遺跡として、千代川左岸では青島遺跡、岩吉遺跡、湖山第2遺跡(97)、布勢第1遺跡、桂見遺跡、帆城遺跡、天神山遺跡、身干山遺跡(146)、同右岸では西大路土居遺跡などがあげられる。なかでも岩吉遺跡は最も古い要素をもつ弥生土器が出土した遺跡であり、弥生時代全般にわたって営まれた大規模集落である。中期中葉には古海遺跡、菖蒲遺跡(60)、山ヶ鼻遺跡、服部遺跡(57)、秋里遺跡(20)などが千代川の自然堤防上に出現する。中期後葉には、帆城遺跡、湖山第2遺跡、布勢第2遺跡(104)、大桝遺跡、北村恵儀谷遺跡(70)などの遺跡が微高地上に展開する。後期になると、松原谷田遺跡(116)、桂見遺跡、北村恵儀谷遺跡、釣山古墳群(59)、山ヶ鼻遺跡、菖蒲遺跡などで集落が形成され、古墳時代まで継続する集落が急増する様子が見られる。

墳墓では、西大路土居遺跡で前期末～中期初頭の土壙墓が検出されている。下味野古墳群(55)では中期の土壙墓・木棺墓が見つかるほか、旧郡家町万代寺遺跡で溝を伴う中期中葉の土壙墓群が検出されているが、鳥取平野における中期の墓制の様相は不明な部分が多い。後期初頭には、土壙墓が六部山古墳群(37)、甕棺墓が釣山古墳群で築かれる。後期前葉には、千代川右岸で滝山猿懸平2号墓、紙子谷門上谷1・2号墓、旧郡家町下坂1号墓が築造される。このうち紙子谷門上谷1号墓は長辺24mの墳丘、26基の埋葬施設を有し、ガラス製管玉や鉄刀などが出土している。千代川左岸では、湖山池南東岸地域の湖山池を望む丘陵上に墳丘墓が相次いで築造される。後期中葉の布勢鶴指奥1号墳丘墓(105)に始まり、四隅突出型墳丘墓である西桂見墳丘墓(109)、墳丘墓の可能性が指摘される桂見土壙墓群(108)と続く。桂見土壙墓群は丘陵頂部に石列と地山の浅い掘削によって12mの方形の墓域を区画しており、中心主体と想定される第1土壙墓からはガラス製勾玉、水銀朱などが出土している。このように弥生時代後期には、湖山池南東岸地域に系譜を追える首長墓がいくつも築かれ、この地域の集団が台頭する様子が見られる。

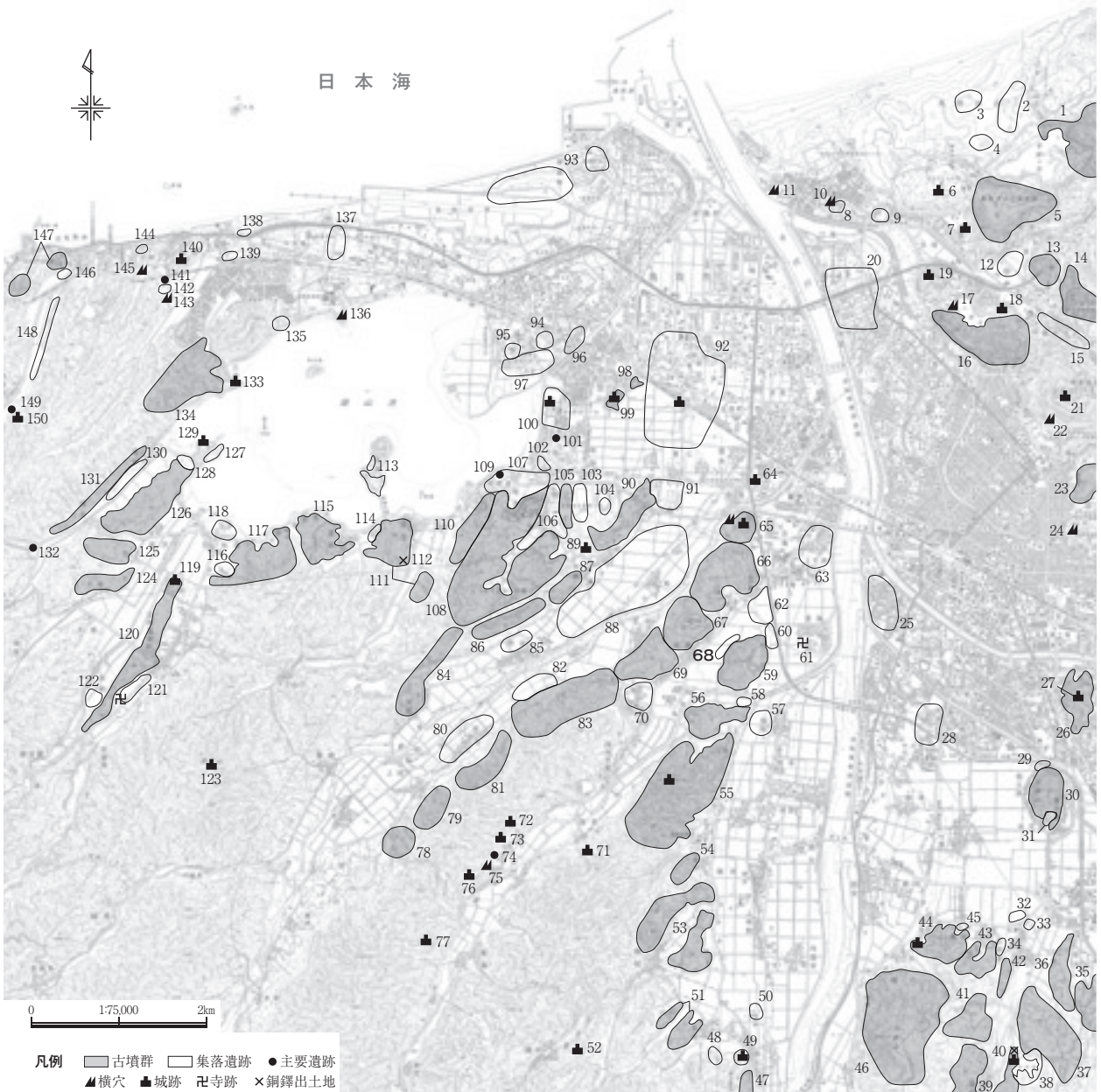
### 3 古墳時代

古墳時代になると、鳥取平野周辺の丘陵上には多数の古墳が築かれる。前期前半の古墳には、弥生時代からの系譜を引く湖山池東南岸の桂見古墳群(108)、倉見古墳群(110)がある。本高弓ノ木遺跡(68)の北西丘陵上に展開する本高古墳群(67)では、中期中葉から中期にかけての古墳が調査されている。そのうち、本高14号墳は中期中葉の前方後円墳であることが確認され、前方後円墳としては鳥取県内最古のものと判明した(鳥取県教育委員会2010)。本高弓ノ木遺跡の継続期間内に本高古墳群が形成されているので、両者は強い関連性を持って展開していたと考えられる。そのほか、徳尾古墳群(65)、横枕古墳群(53)、倭文古墳群(48)、松原古墳群(117)など、小規模な方墳または円墳を中心に構成される前期古墳群が形成される。

中期には、前方後円墳では里仁29号墳(90、全長85m)に続いて桝間1号墳(87、全長92m)が、前方

後方墳では古海36号墳(全長67m)が築かれる。こうした大型墳以外に、小規模な円墳または方墳で構成される古墳群が多数形成されている。湖山池周辺の松原古墳群(117)、倉見古墳群、里仁古墳群(90)、鳥取平野南部の千代川左岸の下味野古墳群(55)、横枕古墳群、千代川右岸の六部山古墳群(37)、広岡古墳群(35)、面影山古墳群(27)などが、小規模古墳からなる中期古墳群としてあげられる。

後期の湖山池周辺の前方後円墳としては、布勢1号墳(101、全長59m)、大熊段1号墳(94、全長46.5m)、三浦1号墳(95、全長36m)、桂見6号墳(全長24.5m)、釣山2号墳(全長26.4m)などがあげられる。横穴式石室をもつ古墳は湖山池周辺では少なく、6世紀中葉の葦岡長者古墳(吉岡1号墳)、



- 1 湯山古墳群 2 追後遺跡 3 長者ヶ庭第1遺跡 4 長者ヶ庭第2遺跡 5 開地谷古墳群 6 浜坂台場跡 7 ヒル山磐跡 8 栃木山遺跡 9 浜坂遺跡・浜坂1号墳 10 浜坂横穴 11 荒神山横穴群 12 覚寺遺跡 13 覚寺古墳群 14 門護寺古墳群 15 門護寺坂ノ下遺跡 16 雁金山古墳群 17 雁金山横穴 18 雁金山城跡 19 丸山城跡 20 秋里遺跡・秋里城跡 21 鳥取城跡 22 東町第1横穴 23 馬場古墳群 24 上町所在横穴 25 古市遺跡 26 面影山古墳群 27 面影山城跡 28 宮長竹ヶ鼻遺跡 29 西大路土居遺跡 30 大路山古墳群 31 大路山遺跡 32 久末・古郡家遺跡 33 大路川遺跡 34 伊勢谷遺跡 35 古岡古墳群 36 船木古墳群 37 六部山遺跡・六部山古墳群 38 七谷池須志器窯跡群 39 越路古墳群 40 越路銅鐸出土地・恋路城 41 園原古墳群 42 古郡家古墳群 43 美和古墳群 44 橋本古墳群・橋本城 45 橋本遺跡 46 八坂古墳群 47 長谷古墳群 48 倭文古墳群 49 倭文所在城跡 50 倭文遺跡 51 玉津古墳群 52 猪子所在城跡 53 横枕古墳群 54 篠田古墳群 55 下味野古墳群・八頂山城 56 服部古墳群 57 服部遺跡 58 本高円ノ前遺跡 59 釣山古墳群 60 菖蒲遺跡 61 菖蒲寺 62 山ヶ鼻遺跡 63 古海遺跡 64 徳吉城跡 65 徳尾古墳群・新山城跡 66 古海古墳群 67 本高古墳群 68 本高弓ノ木遺跡 69 宮谷古墳群 70 北村恵儀谷遺跡 71 篠坂所在城跡 72 中村所在城跡1 73 中村所在城跡2 74 中村須志器窯跡群 75 中村横穴群 76 中村所在城跡3 77 有富所在城跡 78 上原古墳群 79 上段古墳群 80 下段遺跡 81 下段古墳群 82 小森山遺跡 83 小森山古墳群 84 大塚古墳群 85 野坂遺跡 86 野坂古墳群 87 橋間古墳群 88 大柳遺跡 89 鶴山城跡 90 里仁古墳群 91 里仁遺跡 92 吉遺跡・吉山城 93 賀露第1・第2遺跡 94 大熊段古墳群・大熊段遺跡 95 三浦古墳群 96 湖山第1・第3遺跡 97 湖山第2遺跡 98 湯場山古墳群 99 足山古墳群 100 天神山遺跡・天神山城 101 布勢1号墳 102 帆城遺跡 103 布勢第1遺跡 104 布勢第2遺跡 105 布勢第3遺跡 106 東桂見遺跡 107 桂見遺跡 108 桂見古墳群 109 西桂見墳丘墓 110 倉見古墳群 111 倉見遺跡 112 高住古墳群 113 青島遺跡 114 塞ノ谷遺跡 115 良田古墳群 116 松原谷遺跡 117 松原古墳群 118 松原所在遺跡 119 丸山城 120 吉岡古墳群 121 吉岡遺跡・吉岡大海庭寺跡 122 尾山遺跡 123 鞍上山城跡 124 大畑古墳群 125 大谷古墳群 126 岩本古墳群 127 岩本第1遺跡 128 岩本第2遺跡 129 防己尾城跡 130 福井遺跡 131 福井古墳群 132 熊田古墳 133 崎本陣山城跡 134 三津古墳群 135 中ノ茶屋古墳群 136 三津所在横穴 137 長者石遺跡 138 瀧川遺跡 139 末恒遺跡 140 伏野所在城跡 141 伏野所在五輪塔群 142 伏野所在第1遺跡 143 伏野所在横穴群 144 金崎遺跡 145 伏野神社の南横穴群 146 身干山遺跡 147 白兔古墳群 148 内海中所在遺跡 149 内海中所在古墳 150 内海中所在城跡

第2図 周辺遺跡分布図

## 第2章 遺跡の位置と環境

後葉の倉見9号墳、熊田古墳(132)、松原28号墳(117)などがある。野坂川右岸の丘陵東斜面に立地する山ヶ鼻古墳(古海13号墳)は巨石を削りぬいた石棺式石室をもつ終末期古墳である。そのほか、後期には、それまで以上に小規模古墳の築造が盛んになり、尾根上に多数の古墳群・支群が形成される。

集落の様相は不明な部分が多いが、弥生時代から続くものとして、湖山池周辺の布勢第2遺跡、桂見遺跡、帆城遺跡、湖山第1遺跡などがあげられる。千代川左岸では岩吉遺跡、菖蒲遺跡、山ヶ鼻遺跡、大柵遺跡がある。中期から後期にかけての集落としては、実態は明らかではないが秋里遺跡、塞ノ谷遺跡をあげることができる。

### 4 古代

千代川右岸の古市遺跡では、7世紀後半から平安時代にかけての掘立柱建物跡と奈良三彩小壺、墨書土器などが出土している。千代川左岸の菖蒲廃寺(61)では塔の心礎とみられる礎石が残り、この付近で土師百井式軒丸瓦が出土している。菖蒲廃寺の西、本高弓ノ木遺跡と同じ谷に立地する菖蒲遺跡では8世紀後半の総柱建物跡が、菖蒲遺跡のすぐ北に位置する山ヶ鼻遺跡では7世紀後半から平安時代にかけての掘立柱建物跡などが検出されている。いずれの遺跡も菖蒲廃寺との関連が考えられている。8世紀半ばのこの地域は、高草郡に帰属し、高庭庄として東大寺によって荘園開発・経営がなされていたことが、『東大寺東南院文書』『東大寺因幡国高草郡高庭庄坪付注進状案』からうかがわれる。ただし、高庭庄は10世紀後半までには没落し、国衙領として再編されていたものと考えられている。この付近は古代山陰道の通過地と推定されているほか、駅衙、郡衙の存在も推定されており、高草郡の主要な地であったと考えられる。そのほか、同じ谷筋を南西に上った北村恵儀谷遺跡では大型の掘立柱建物跡が検出されている。

### 5 中世

菖蒲遺跡では、平安時代後期から鎌倉時代にかけても遺跡が形成されており、区画溝の可能性のあるものを含む溝状遺構が検出されたほか、白磁・青磁が出土している。また、山ヶ鼻遺跡では平安時代末から鎌倉時代にかけての大形土坑や掘立柱建物跡、井戸、溝状遺構が検出されており、大形土坑内からは鍋や釜などの遺物が大量に出土している。そのほか、有富川南岸に位置する本高円ノ前遺跡でも平安時代末から室町時代前半にかけての掘立柱建物跡などが確認されている。

貞治3年(1364年)、因幡守護に山名氏が任じられる。山名氏は15世紀に入って守護所を布勢に移して布勢天神山城を築き、鳥取城へ移るまでの100年の間、この地が因幡支配の拠点となった。その一部が調査され、内堀、土塁、井戸、焼け落ちた建物跡などが検出されている。17世紀後半の古地図で「葬地」とされた布勢鶴指奥墳墓群では、84基もの土壙墓が検出され、桂見墳墓群、西桂見遺跡、大熊段遺跡、三浦遺跡、里仁古墳群、徳尾古墳群、釣山古墳群でも多数の中世墓が確認されていることから、湖山周辺に大規模な墓域が構えられていたことがうかがえる。

#### 【参考文献】

- 鳥取県教育委員会編・発行 2010『本高古墳群』鳥取県文化財調査報告 21
- 鳥取県埋蔵文化財センター編・発行 1986『鳥取県の古墳』鳥取県埋蔵文化財シリーズ 1
- 鳥取県埋蔵文化財センター編・発行 1987『弥生時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財シリーズ 2
- 鳥取県埋蔵文化財センター編・発行 1989『歴史時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財シリーズ 4
- 鳥取県埋蔵文化財センター編・発行 2008『古墳時代 I 古墳』鳥取県の考古学 第4巻
- 鳥取市編・発行 1983『新修鳥取市史』第1巻古代・中世篇

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査成果の概要

#### 1 本高弓ノ木遺跡の位置（第3図）

本高弓ノ木遺跡は、千代川左岸の独立丘陵、釣山の西側裾に沿った沖積地に立地している。釣山の北西には南西から北東に向けて延びる本高丘陵があり、遺跡の立地する沖積地はこれらの丘陵に挟まれた谷底平野である。この平野の南縁を有富川が北東に向かって流れているが、遺跡の南で釣山の南裾に沿って東流し、約1km東で千代川と合流している。

本高弓ノ木遺跡周辺の丘陵上には多数の古墳が築かれている。遺跡の東に位置する釣山の尾根上には、前方後円墳も含む古墳時代前期から後期にかけての古墳群である釣山古墳群が形成されており、遺跡北西の本高丘陵上にも古墳時代前期を中心とした本高古墳群が形成されている。そのほか、釣山の南の丘陵上に服部古墳群、本高古墳群の北に古海古墳群、西に宮谷古墳群など、多数の古墳群が展開している。古墳時代を中心に形成された本高弓ノ木遺跡は、こうした古墳群と密接な関係を持っていたことが推測される。

#### 2 平成20年度調査の概要（第4図）

平成20年度の調査地は、1区、2区、3区の3つの調査区に分かれている。いずれの調査区とも、遺物包含層と遺構を確認した。

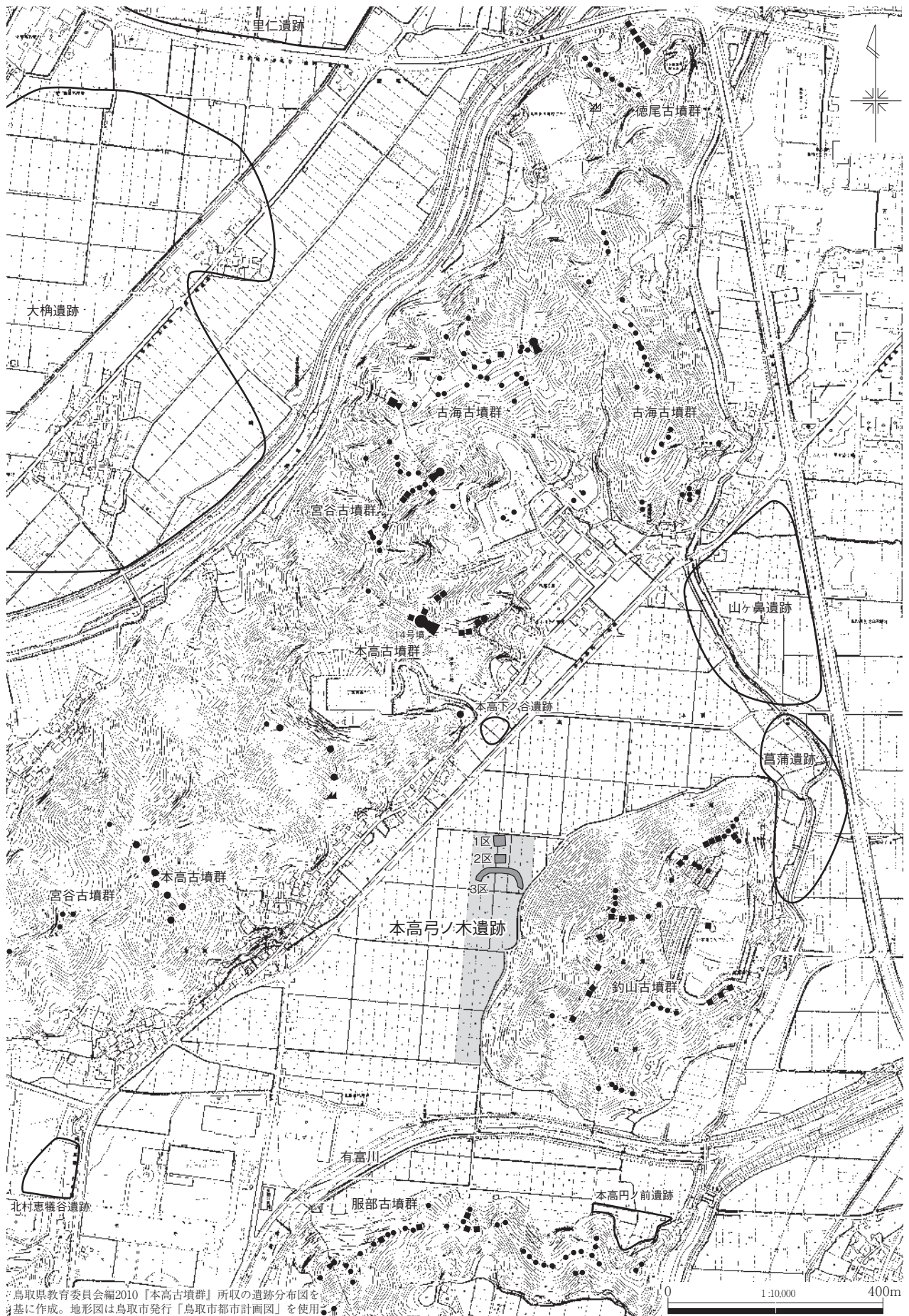
1～3区で確認した遺構はすべてあわせて、溝10条である。そのほか、溝に付随する杭列や構造物群を確認している。各調査地で確認した溝は、複数地区にまたがって延びているものが含まれる可能性があるものの、確実に複数地区間に連続することが分かった遺構はない。各地区、いずれの遺構とも同一の遺構検出面で確認している。遺構検出面となる基盤層（いわゆる地山）は、基本的には各地区とも共通しており、遺構面上で確認した1層の遺物包含層もおおむね各地区とも共通していた。ただし、その上部の旧耕作土は地区間で堆積が異なっており、また、包含層や基盤層も地区によって部分的に堆積が異なっていたことなどから、各調査区を統一した層名は設定していない。

1区では、時期不明の溝1条と、古墳時代の土器・木製品を含む遺物包含層を確認している。

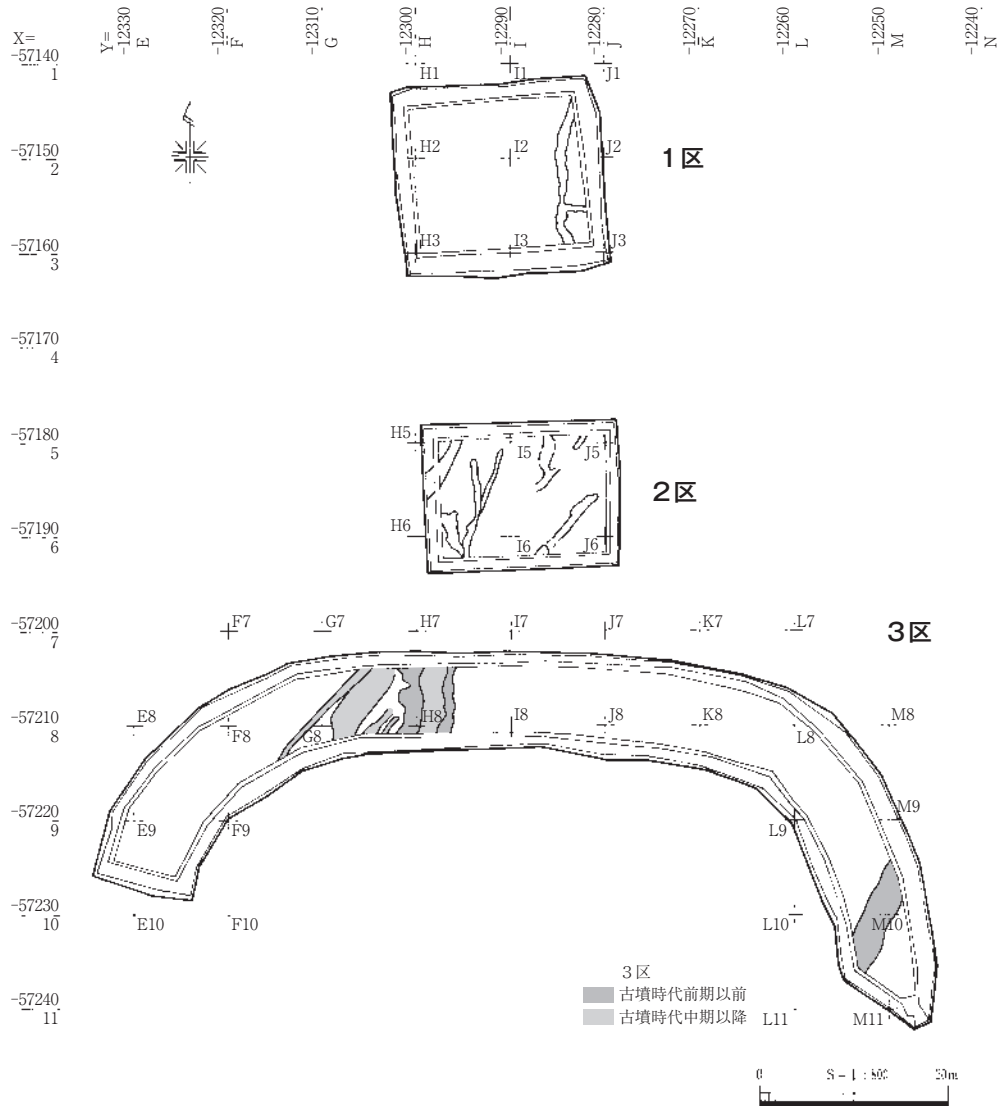
2区では、古代の溝2条と時期不明の溝3条、弥生時代から古代にかけての遺物包含層を確認している。

3区では、弥生時代から古墳時代中期にかけての溝1条とそれに付随する杭列・構造物群、古墳時代前期の溝1条、古墳時代のものの可能性が考えられる溝2条、古墳時代から中世にかけての遺物包含層を確認している。

以上のように、古墳時代を中心とした遺構が確認されており、出土遺物も大半が古墳時代のものであった。



第3図 調査地の位置



第4図 調査地全体図

第2節 1区の調査

1 概要 (第5図、PL. 3)

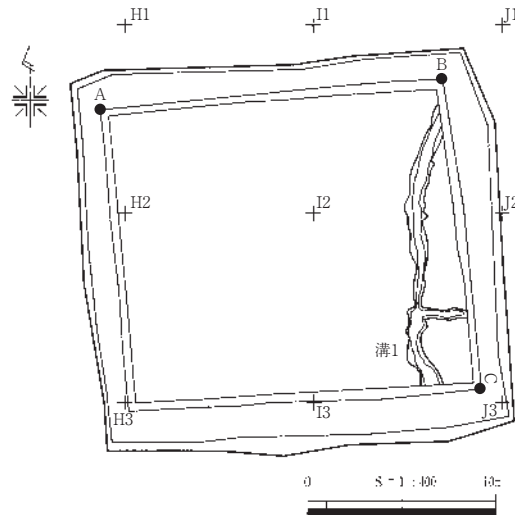
調査区の平面形は東西約20m、南北約20mのほぼ正方形である。1区では地表下約80cmの位置で1面の遺構検出面を確認した。検出した遺構は溝1条のみである。また、遺構面上にはシルト質粘土層または砂層の遺物包含層が堆積しており、古墳時代の遺物を含んでいた。

2 基本層序 (第6図、PL. 3)

調査区内の堆積は、シルト質粘土などの水成堆積層が主体となって形成されている。

地表下約20cmまでは現耕作土で、その下に近世以降の旧耕作土が約30cmの厚さで見られる。耕作土の下には、主にシルト質粘土からなる遺物包含層が約30cm堆積しており、遺物包含層の下に、基盤層であるグライ化の進行した灰色の軟弱な粘土層が堆積している。

以下に1区の基本層序の特徴を示した。



第5図 1区遺構配置図

- I層：黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土 しまり弱、粘性強。細砂含む。鉄分沈着。 表土・耕作土
- II層：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粘土 しまり弱、粘性強。細砂含む。鉄分沈着顕著。 旧耕作土
- III層：黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土 しまり弱、粘性強。細砂含む。鉄分沈着。 旧耕作土
- IV層：暗灰黄色(2.5Y5/2)砂 しまり・粘性なし。細砂をベースに粗砂が混じる。 包含層
- V層：黒色(10YR2/1)シルト質粘土 しまり弱、粘性強。細砂多く含む。 包含層
- VI層：暗灰黄色(2.5Y5/2)砂 しまり・粘性なし。細砂・粗砂。部分的に粗砂主体 包含層
- VII層：黒褐色土(10YR3/1)シルト質粘土 しまり弱、粘性強。細砂含む。 包含層
- VIII層：黄灰色(2.5Y4/1)粘土 しまり非常に弱、粘性強。鉄分沈着。 基盤層

I～III層が現・旧耕作土、IV～VII層が遺物包含層で、最新の遺物は古墳時代後期である。VIII層は遺物を含まなかったことから基盤層と判断した。遺物包含層のうち調査区全面に堆積するのはV層のみで、IV層とVI層は局所的に堆積し、VII層も調査区北西側にのみ堆積していた。このうち、IV層とVI層に遺物が多く含まれていた。

遺構検出面はVIII層上面である。

### 3 遺構

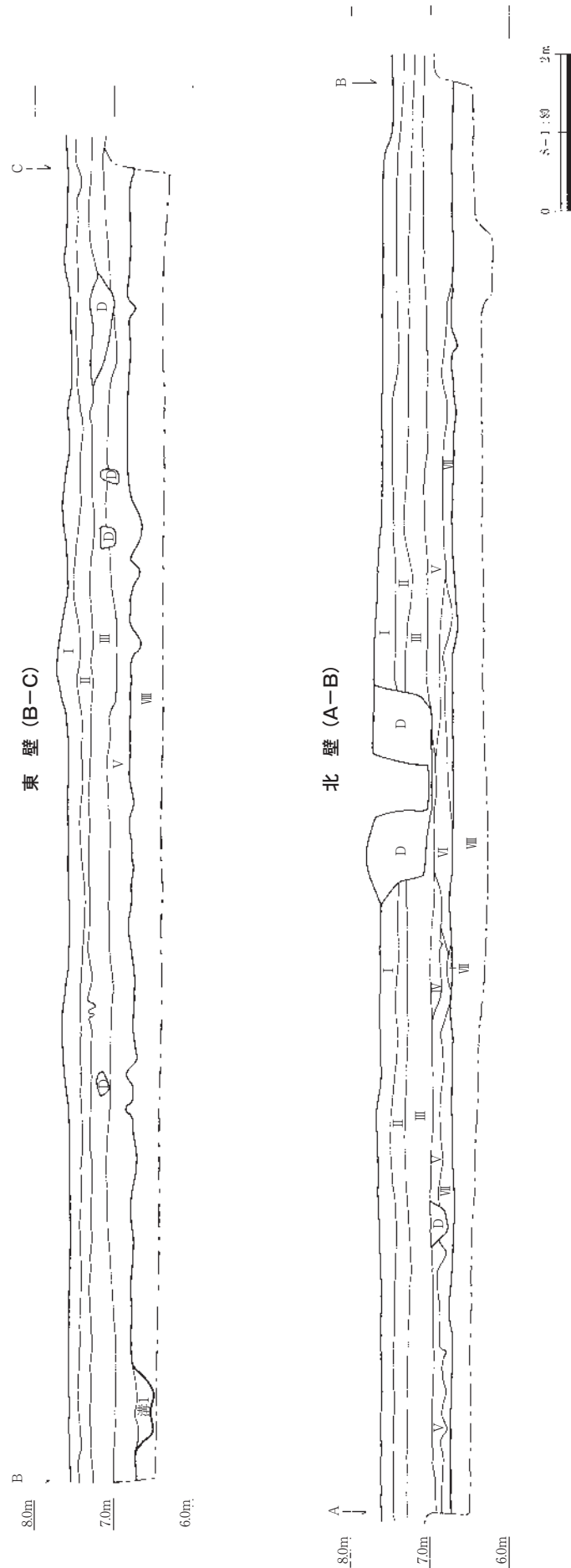
#### (1) 溝1 (第7図、PL.4)

1区の東端部付近の、I1グリッドからI3グリッドにかけて、VIII層上面で検出した。

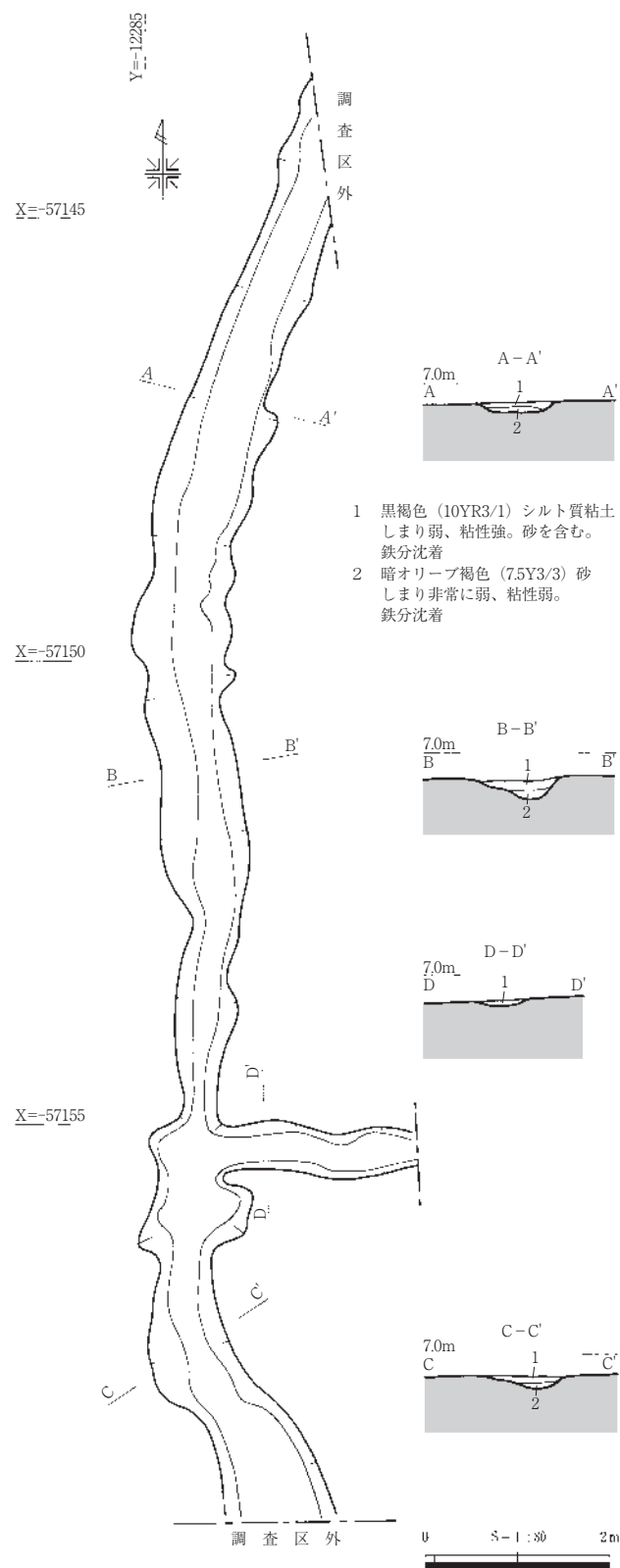
南北方向に小さく蛇行しながら延び、調査区南際から北に5mの地点で、東側に向かって延びる溝が分岐している。溝の南端、北端、分岐した溝の東端は、それぞれ調査区外へと続いている。調査区内での長さは約16m、幅は1.0m、深さ0.15mを測る。断面形はU字形である。底面レベルは、標高6.60m～6.58mで南側が北側よりも2cm程度高い。埋土は上層が包含層VII層類似の黒褐色シルト、下部が細砂層である。細砂が堆積していたことから、機能時には流水を伴っていたと考えられる。

埋土中からは木製品が少量出土している。しかし、時期が判別できる遺物はなく、遺構の時期は不明である。ただし、溝1を被覆する包含層が、主に古墳時代後期の遺物を含んでいたことから、それに近い時期のものである可能性が考えられる。





第6図 1区土層断面図



第7図 溝1

## 4 1区包含層出土遺物（第8・9図、PL. 4・21、表1・3）

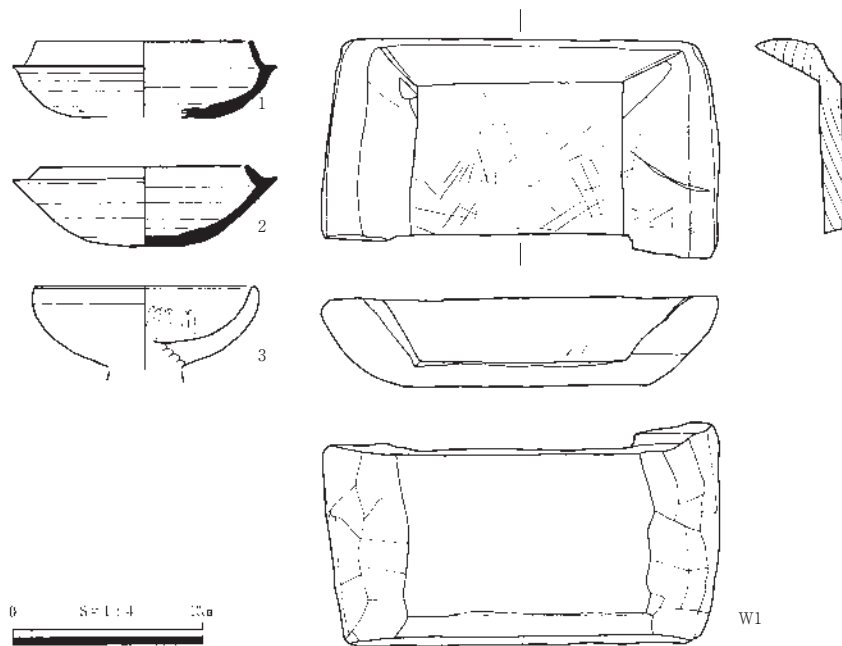
1区の遺物包含層は、基本層序Ⅳ～Ⅶ層で、先述のようにⅤ層以外は部分的な堆積である。このうち、Ⅳ層とⅥ層が砂層で、木製品を多く含んでいた。

包含層からは、土師器、須恵器、木製品が出土している。

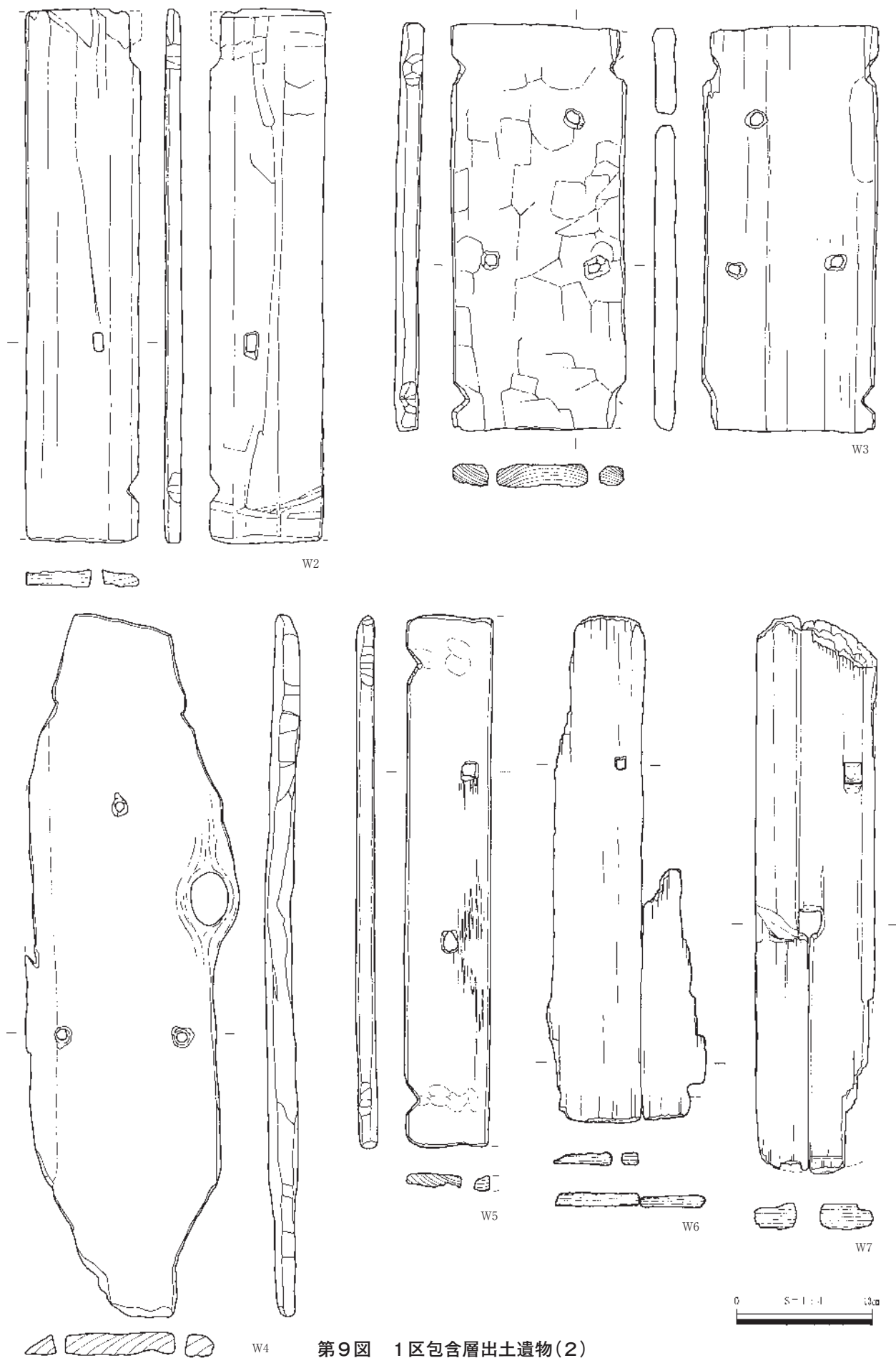
土器は、時期が判別できるものを図示した。1・2は古墳時代後期の須恵器坏身で、1は陶邑編年TK10型式期のもの、2は陶邑編年TK43型式期のものと考えられる。3は土師器脚付碗で古墳時代後期のものと考えられる。そのほか、図示していない土器も、古墳時代中期～後期のものが主体となっていると思われる。

木製品は小片も含めると多く出土しているが、ここには器種の分かるものを図示した(W1～W7)。W1は槽である。W2～W7は田下駄で、平面形、縁辺の挟りの有無などにバラエティーが見られる。これらの田下駄は調査区西部のⅥ層からまとまって出土したものである(PL4 - 3)。砂層に含まれていたことから見て、流水によって運搬されてきたものであろう。

木製品も土器と同様、古墳時代のものが主体と考えられる。



第8図 1区包含層出土遺物(1)



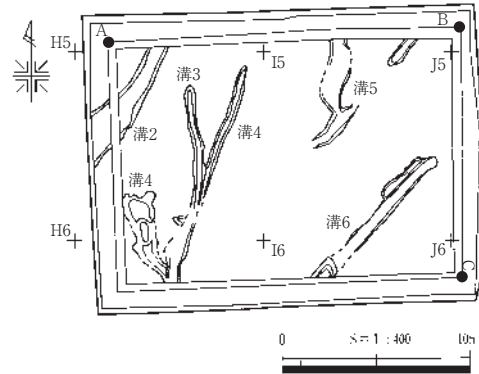
第9図 1区包含層出土遺物(2)

### 第3節 2区の調査

#### 1 概要 (第10図、PL. 4・5)

調査区は1区の約15m南に位置し、平面形は東西約20m、南北約16mの方形である。2区では地表下約80cmの位置で1面の遺構検出面を確認した。検出した遺構は溝5条である。そのうち2条からは時期の判別できる遺物が出土しており、古代以降に埋没した溝と考えられる。なお、これらの溝は、すべて調査地外へ延びているが、1区、3区で検出した溝に連続する可能性は低いと考えられる。

また、遺構面上には遺物包含層が堆積していた。包含層からは、弥生時代から古代にかけての土器が出土した。



第10図 2区遺構配置図

#### 2 基本層序 (第11図、PL. 6)

調査区内の堆積は、1区と同じく、シルト質粘土などの水成堆積層が主体となって形成されている。

地表下約30cmまでは現耕作土で、その下に近世以降の旧耕作土が約30cmの厚さで見られる。耕作土の下には、主にシルト質粘土からなる遺物包含層が約20cm堆積しており、遺物包含層の下に、基盤層であるグライ化の進行した灰色の軟弱な粘土層が堆積している。遺物包含層のⅨ・Ⅹ層から出土した最新の遺物は古代の土器である。この層は1区の遺物包含層Ⅴ・Ⅶ層に類似しており、おおむね同一の堆積と見てよいと思われる。基盤層のⅩⅠ層も、鉄分の沈着度によって若干色調が異なるものの、土質から見て1区の基盤層Ⅷ層と同一の堆積と考えられる。

以下に、2区の基本層序を示した。

Ⅰ層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粘土 しまりやや弱、粘性やや強。細砂含む。 表土・耕作土

Ⅱ層：黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土 しまりやや弱、粘性やや強。 耕作土

Ⅲ層：暗黄灰色(2.5Y5/2)砂質シルト しまり・粘性やや強。鉄分沈着顕著。 旧耕作土

Ⅳ層：黄褐色(2.5Y5/3)シルト しまり・粘性やや強。鉄分沈着顕著、マンガン粒含む。 旧耕作土

Ⅴ層：黄灰色(2.5Y4/1)シルト しまり弱、粘性強。鉄分沈着顕著、マンガン粒含む。 旧耕作土

Ⅵ層：黄灰色(2.5Y4/1)粘土 しまり弱、粘性強。 旧耕作土

Ⅶ層：黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粘土 しまり弱、粘性強。 旧耕作土

Ⅷ層：暗灰褐色(2.5Y4/2)粘土 しまり弱、粘性強。 旧耕作土

Ⅸ層：黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト しまり弱、粘性強。 包含層

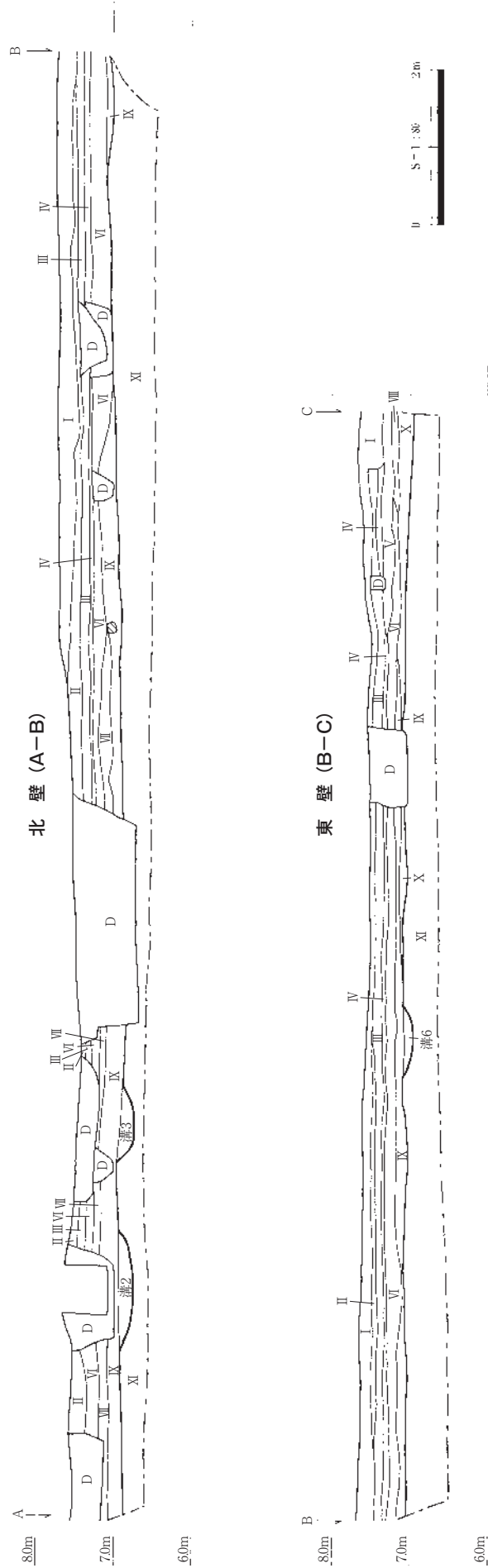
Ⅹ層：黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土 しまり弱、粘性強。 包含層

ⅩⅠ層：灰色(5Y5/1)粘土 しまり非常に弱、粘性強。 基盤層

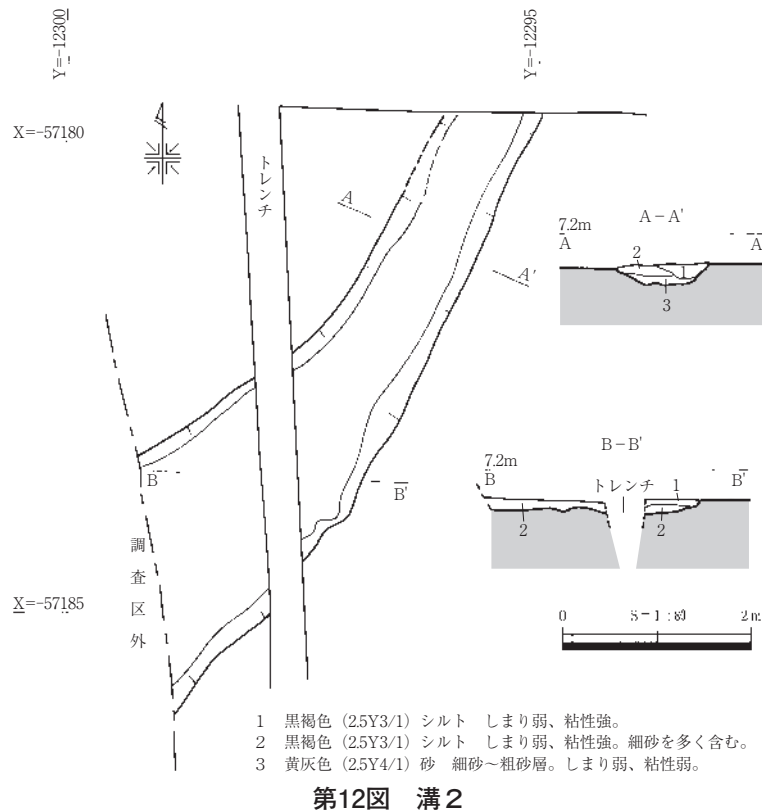
### 3 遺構

#### (1) 溝2 (第12図、PL. 4～6)

H5グリッドのⅩⅠ層上面で検出した溝である。確認した溝の長さは6.0mで、南西から北東方向に延び、調査地外へと続いている。最大幅2.1m、最深0.2mを測る。断面形は、U字状を呈する。底面



第11図 2区土層断面図



の標高は6.6m～6.7mで、北側が南側よりも10cm程度高い。遺構下部には砂が堆積していたことから、機能時には流水を伴っていた可能性が高い。埋土中からは、土師質の土器小片が出土しているが、時期は不明である。

### (2) 溝3 (第13・14図、PL.4～6・22、表1)

H5・H6グリッドのX I層上面で検出した溝で、溝4と重複関係にあり、溝4より新しい。

長さは10.2mで、南から北方向に小さく蛇行しながら延びる。南側は調査地外へと続いている。幅は最大0.7m、深さ約5cmで、断面形はU字形を呈する。底面の標高は6.87m～6.97mで、南側が北側よりも10cm程度高い。埋土は砂層であったことから、溝は流水を伴っていた可能性がある。

遺構内からは須恵器・土師器・木製品が少量出土している。4～6は須恵器坏身で、4・5が陶器編年MT15型式期、6がTK217型式期のもの。7は土師器脚付椀で、古墳時代後期のものと考えられる。

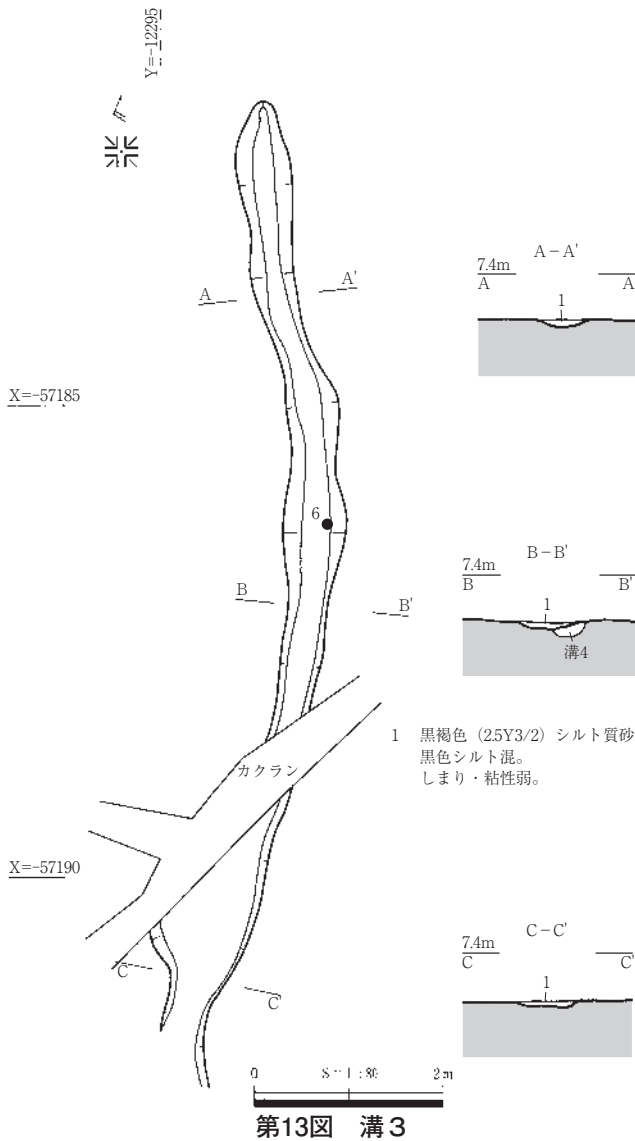
本遺構と重複関係にあつて、本遺構よりも古い溝4では、後述のように古墳時代～古代の土器が出土している。したがって、本遺構はそれ以降のものと考えられる。

### (3) 溝4 (第15～17図、PL.4～7・22、表1)

H5・H6グリッドのX I層上面で検出した溝で、溝3と重複関係にあり、溝3より古い。

溝4は、調査地南際から北東に向かう東側の溝と、北に向かう西側の溝からなる。2条の溝が重複しているとも捉えられるが、埋土に差がほとんど見られなかったことから、これらは同時に機能していた二股に分岐する溝であったと判断した。

東側の溝の長さは12.2mで、幅は最大0.5m、深さは最大10cmを測る。底面の標高は6.75m～6.79mと南側が北側よりも4cm程度高い。埋土は包含層X層類似の黒褐色シルトで、埋土中から須恵器・土



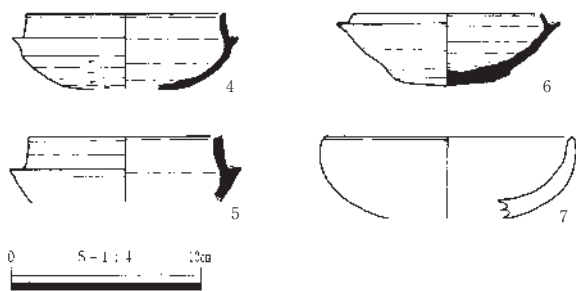
師器・木製品が少量出土している。また、溝の肩付近に、2本1対で打ち込まれている杭を検出した。

西側の溝の長さは4.0m、幅は最大1.1m、深さ最大20cmを測る。底面の標高は6.70m～6.77mと南側が北側よりも7cm程度高い。埋土は包含層X層類似の黒褐色シルトで、埋土中から須恵器・土師器・木製品が少量出土している。西側溝の北半部で、溝内に打ち込まれた杭群を確認した。杭は平面的には規則的な配列とはならない。杭の長さは60～90cmで、杭の頭や底部の標高はおおむねそろっていた。

杭以外の遺物は、東側、西側ともに少量出土しているが、小片が多く、図示したのはいずれも西側から出土した時期の判別できる土器である。8・9は須恵器蓋坏で、8はTK43型式期、9はMT15型式期のもの。10は土師器坏、11は土師器甕で、いずれも古代のもの。12は古墳時代前期の土師器器台、13は弥生時代の甕または壺の底部と考えられる。最新遺物から見て、この溝の埋没時期は古代と考えられる。

(4) 溝5 (第18図、PL.4～7)

I4・I5グリッドのX I層上面で検出した溝である。残存状態が悪いものの、本来は二股に分岐した溝であったと判断した。南西から北東方向に延びる溝と、北に分岐する2つの溝からなっており、南西 - 北東方向の溝は間が途切れている。本来はこの部分がつながっていただけでなく、南西側にも溝が延びていたことが予想されるが、包含層堆積時などに流失してしまったものと考えられる。北側は調査地外へと続いている。最大幅は約1m、深さは約5cmで、断面形はU字状を呈する。底面の標高は6.96m前後で、遺構内で差はほとんど見られない。埋土は包含層X層類似の黒褐色土であった。埋土中からの出土遺物はなく、時期は不明である。



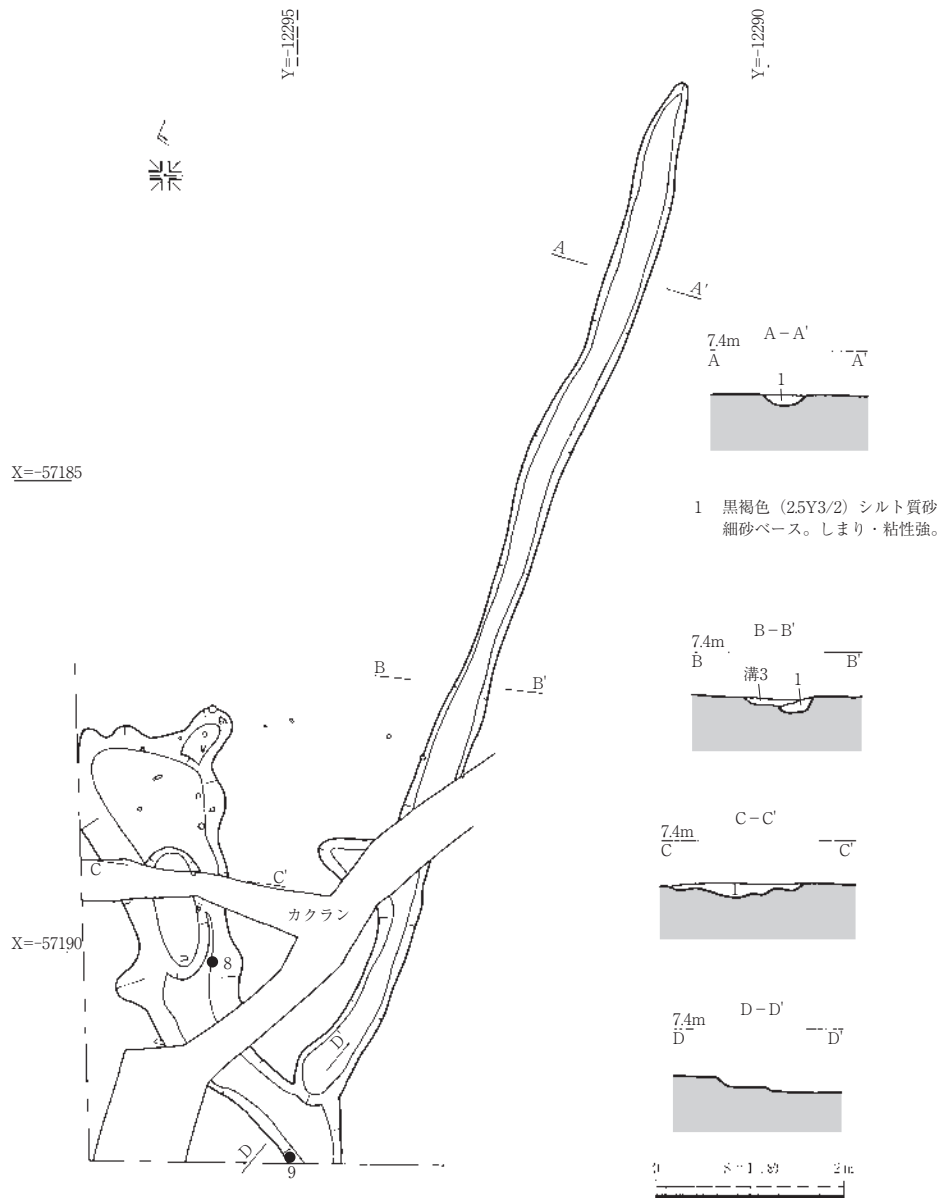


(5) 溝6 (第19図、PL.4~7)

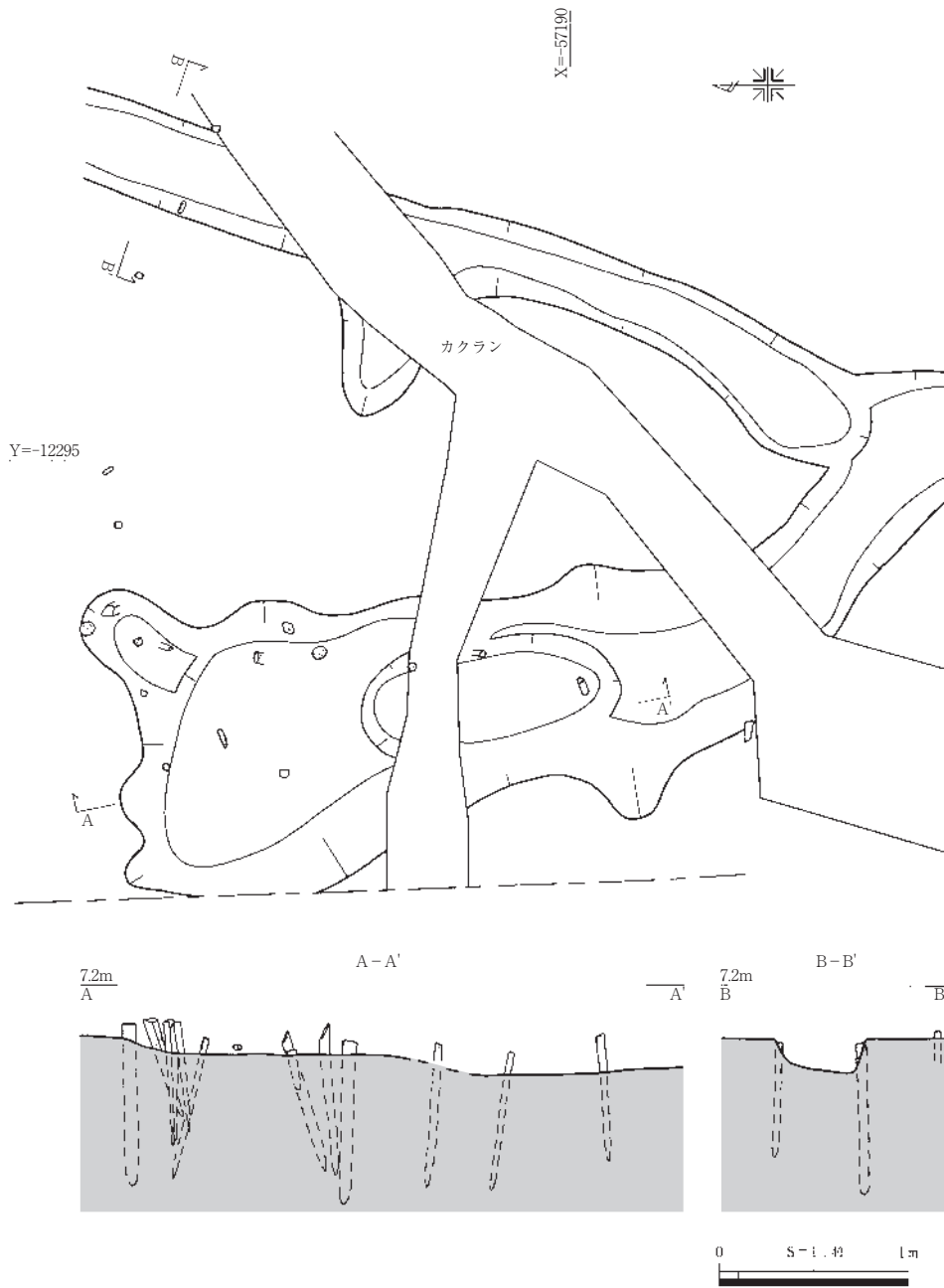
I5・I6グリッドのXI層上面で検出した溝である。確認した溝の長さは約9mで、南西から北東方向に延びる。南側は調査地外へと続くほか、北側にもさらに溝が延びていた可能性がある。幅は0.7m、深さ約3cmで、断面形はU字形を呈する。底面の標高は6.97m~7.00mで、南側が北側よりもわずかに高い。埋土は包含層X層類似の黒褐色土であった。埋土中からの出土遺物はなく、時期は不明である。

4 2区包含層出土遺物 (第20・21図、PL.22・23)

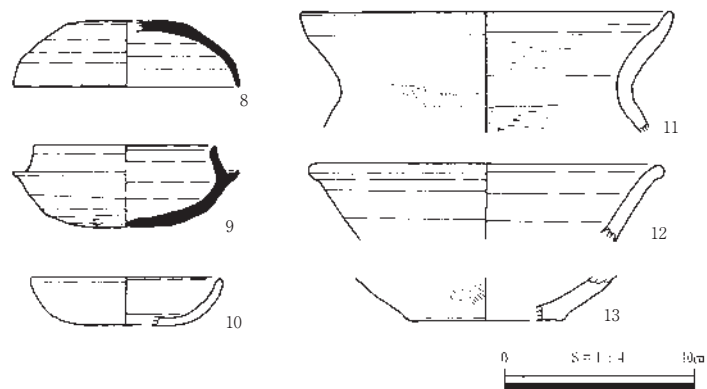
2区では、遺物包含層であるIX層またはX層が調査地全面に20cmの厚さで堆積していたものの、包含層からは少量の土器・木製品しか出土していない。出土した土器の大半は時期が明確ではないが、古墳時代のものを中心に、弥生時代から古代にかけてのものと考えられる。出土した時期が判別できる土器のうち最も古い、弥生時代中期の壺の頸部片を示した(14)。W8の木製品は田下駄である。



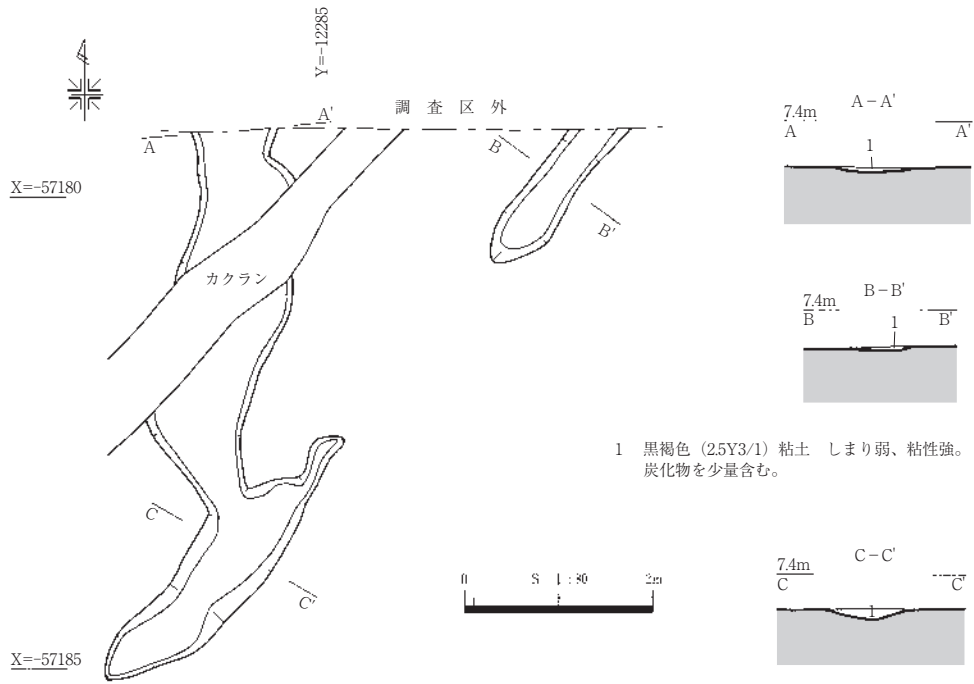
第15図 溝4(1)



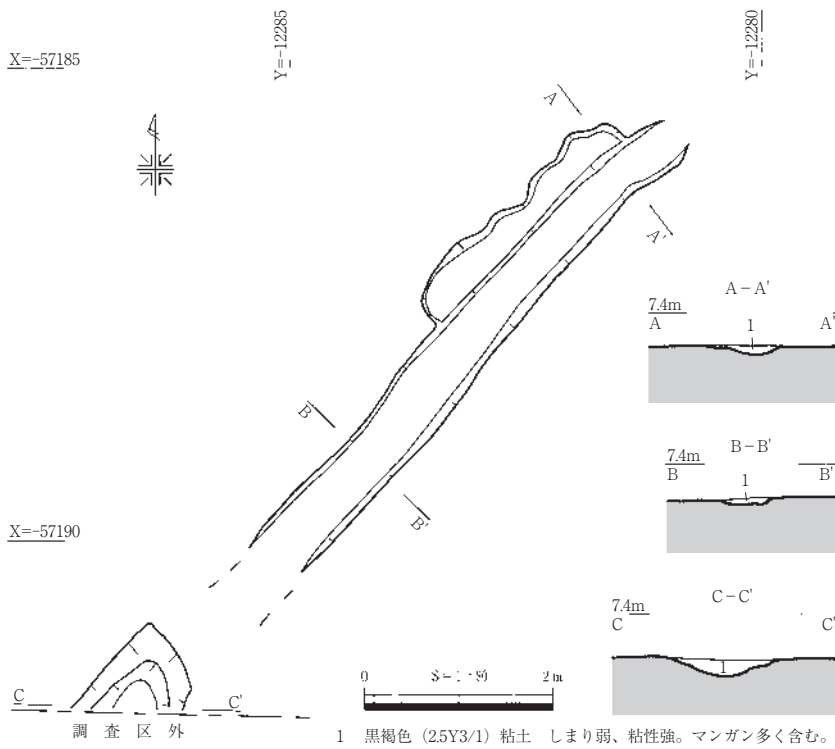
第16図 溝4(2)



第17図 溝4出土土器



第18図 溝5



第19図 溝6



第21図 2区包含層出土木製品



第20図 2区包含層出土土器

第4節 3区の調査

1 概要 (第22図)

3区は、2区の約10m南に、幅約10m、長さ100mほどの、U字形をしたトレンチ状の調査区として設定した。3区では地表下約80cmの位置で1面の遺構検出面を確認した。検出した遺構は溝4条とそれらに付随する杭列群・構造物群である。遺構の時期が明確に判断できた溝は2条で、そのうち、杭列・構造物群を伴う溝9は弥生時代から古墳時代中期にかけてのもの、溝10は古墳時代前期のものである。そのほかの遺構は、確実な時期は不明である。なお、これらの溝はすべて調査地外へ延びているが、2区の溝と連続する可能性は低いと考えられる。

また、遺構面上には、弥生時代から中世にかけての遺物を含む包含層が堆積していた。

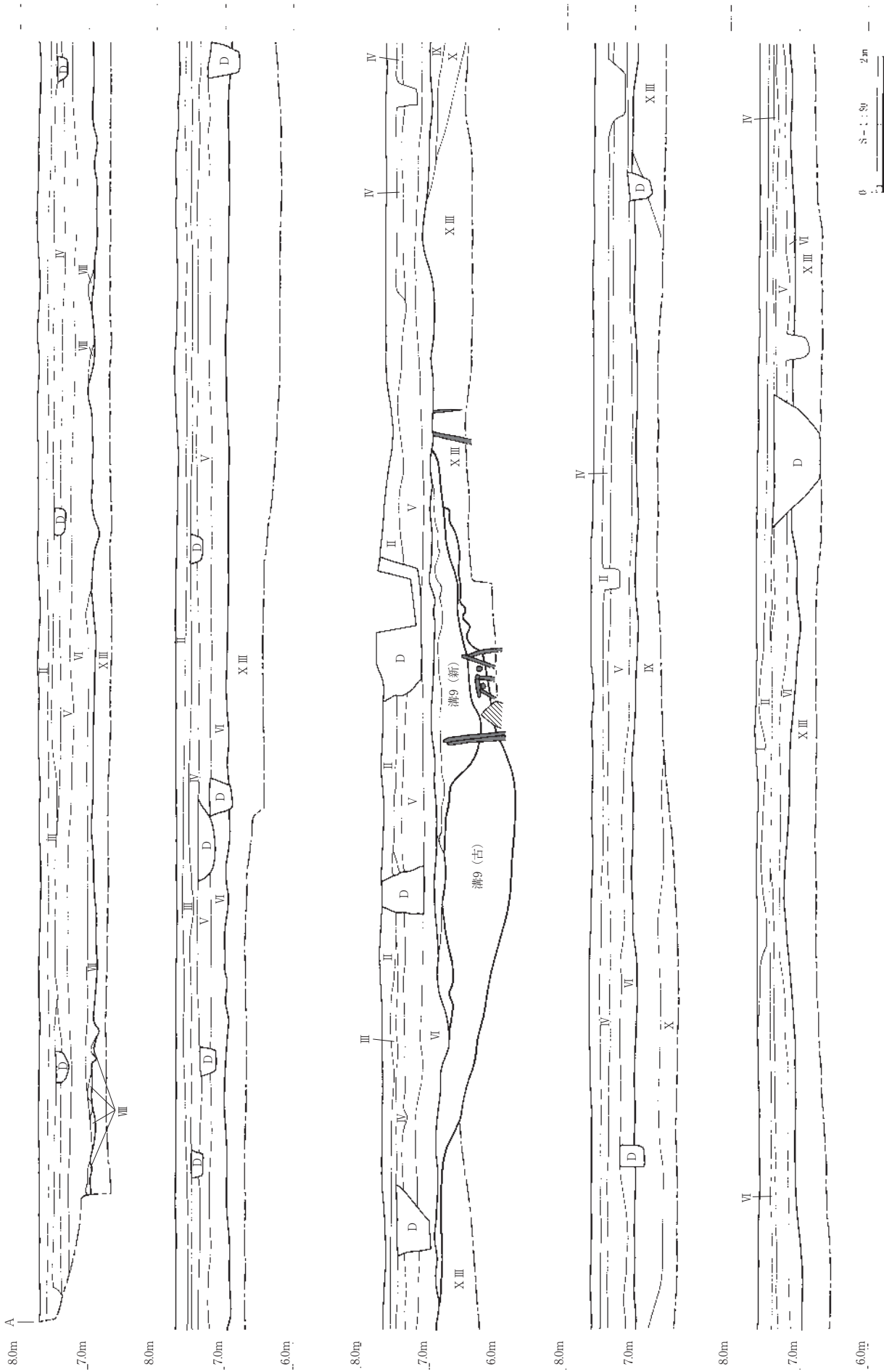
2 基本層序 (第23・24図、PL. 8)

調査区内の堆積は、1区・2区と同じく、シルト質粘土などの水成堆積層が主体となって形成されている。

地表下約50cmまでは耕作土で、その下に主にシルト質粘土からなる遺物包含層(VI~VIII層)が約20~30cm堆積しており、その下に基盤層である灰色粘土層XIII層が堆積している。なお、調査地の中央付近(H7・8~J7・8グリッド)では、XIII層を切って形成された幅約20mの大規模な自然河道



第22図 3区遺構配置図



第23図 3区北壁土層断面図(1)

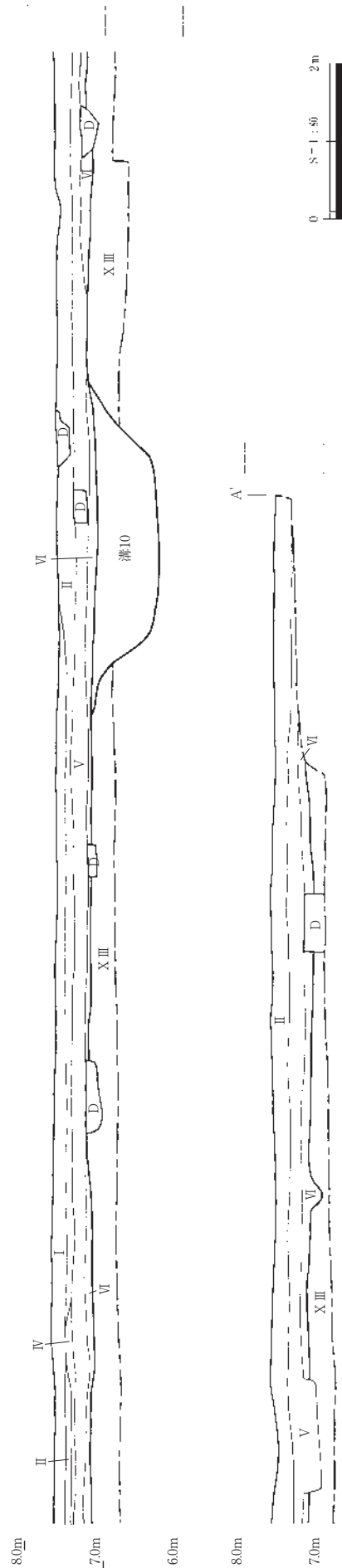
### 第3章 調査の成果

による堆積を確認している(IX~XII層)。この自然河道は、トレンチの掘削の際に遺物を確認できなかったことから、基盤を形成する堆積と捉えて面的な掘り下げは行っていない。

遺物包含層のVI・VIII層は、1区の包含層V・VII層、2区のIX・X層類似しており、おおむね同じ堆積と見てよいと思われる。ただし、3区遺物包含層VI層の最新遺物は中世のもので、1区、2区の包含層遺物に対してかなり新しい。しかし、各包含層の土質の近似性から見て、包含層堆積の最終時期が地区によって異なっていたのではなく、それぞれの地区の周辺に本来存在していた遺構・遺物の時期が異なっていたことを反映していると考えている。ただ、3区VI層に関しては、中世遺物の量が少なかったことから、VI層と本来その上位に堆積していた中世の包含層が土壌化によって識別できなくなった可能性や、後世の耕作によって本来上位層にあった遺物が移動した可能性も考えられる。また、基盤層XIII層は、土質から見て1区の基盤層VIII層、2区の基盤層XI層と同一の堆積と考えられる。

以下に、3区の基本層序を示した。

- I 灰オリーブ(5YR5/2)粘土 しまり弱、粘性やや強。  
耕作土
- II 暗灰黄色(7.5YR5/2)シルト質粘土 しまり弱、粘性やや強。細砂含む。 耕作土
- III 暗灰黄色(7.5YR5/2)粘土質シルト しまりやや弱、粘性やや強。細砂多く含む。鉄沈着顕著。 耕作土
- IV 灰黄色(2.5YR6/2)粘土質シルト しまりやや弱、粘性やや強。細砂多く含む。鉄沈着顕著。 耕作土
- V 黄灰色(2.5YR4/1)粘土質シルト しまり弱、粘性強。細砂含む。マンガン多く含む。耕作土
- VI 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト しまり弱、粘性強。細砂含む。 包含層
- VII 暗灰黄色(2.5YR4/2)細砂・粗砂ラミナ堆積 しまり弱、粘性強。 包含層
- VIII 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト しまり弱、粘性強。細砂非常に多く含む。 包含層
- IX 褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土 しまりやや弱、粘性強。 基盤層(河道堆積)
- X 黄灰色(2.5YR4/1)粘土 しまり非常に弱、粘性強。



第24図 3区北壁土層断面図(2)

基盤層(河道堆積)

X I オリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルト しまり弱、粘性強。 基盤層(河道堆積)

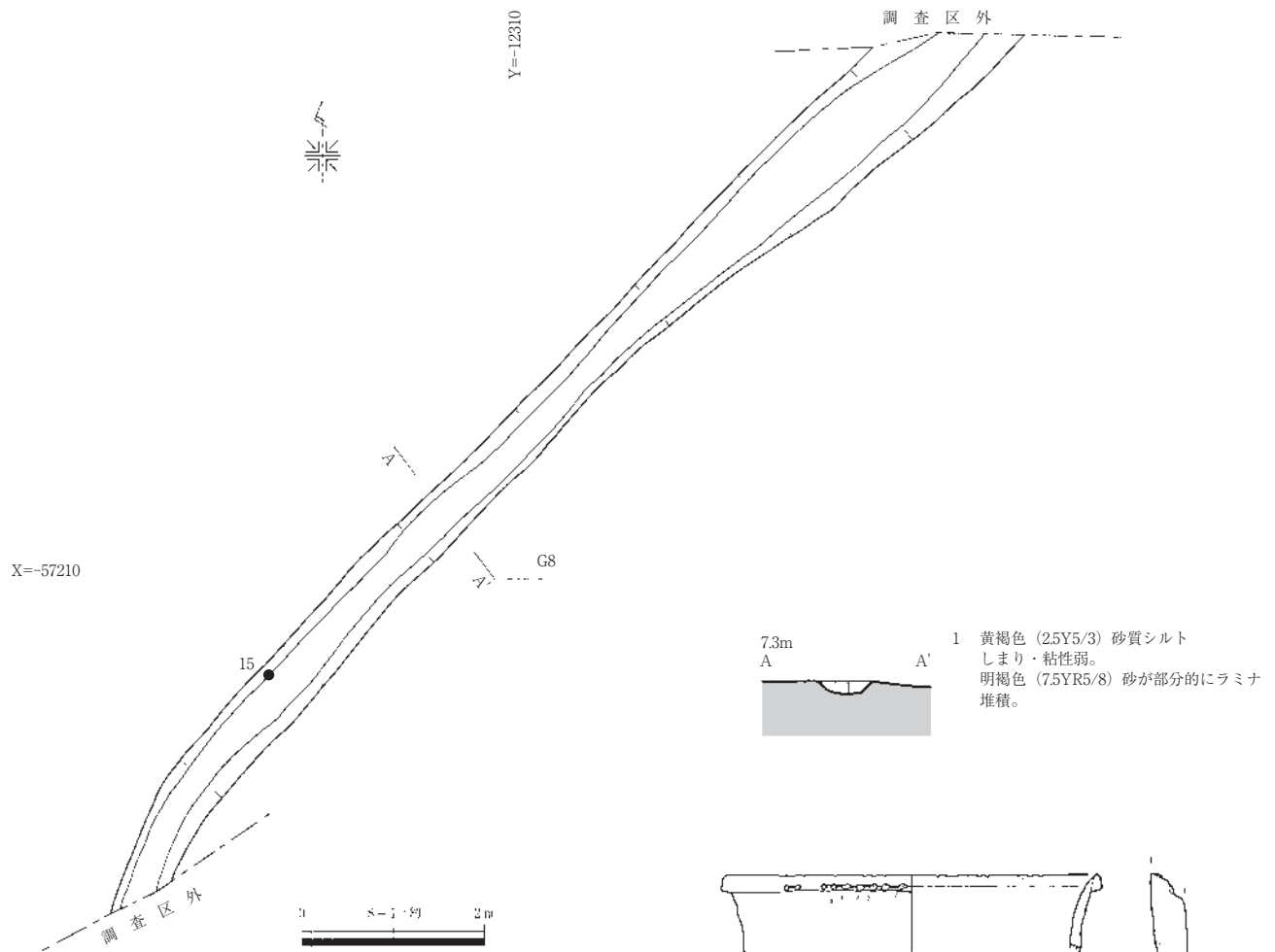
X II 黄灰色(2.5YR4/1)シルト質粘土 しまり非常に弱、粘性強。 基盤層(河道堆積)

X III 灰色(7.5YR5/1)粘土 しまり非常に弱、粘性強。 基盤層

### 3 遺構

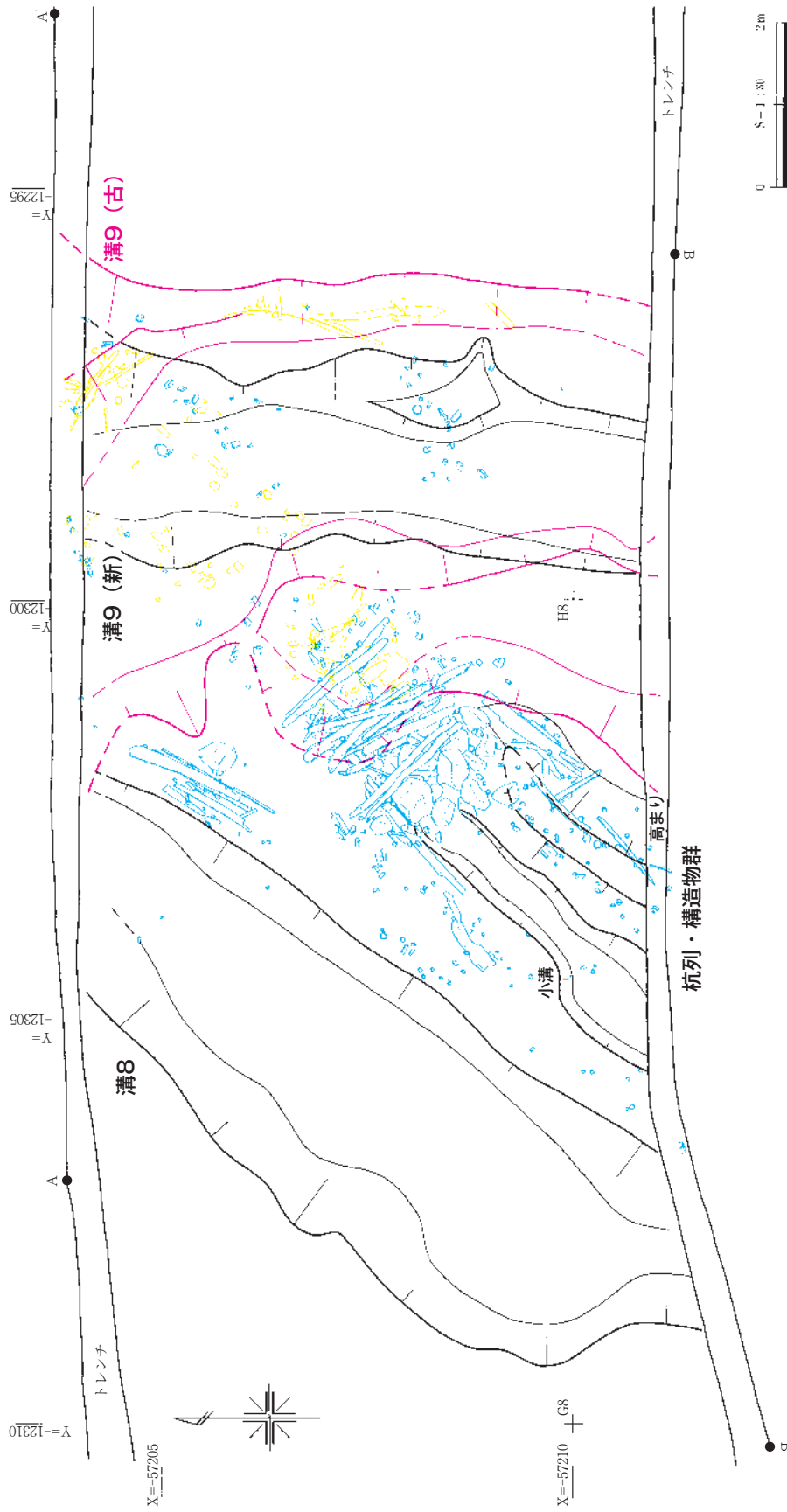
#### (1) 溝7(第25・26図、PL.9・22)

F7・8、G7グリッドのXIII層上面で検出した溝状遺構である。確認した長さは13.2m、幅は約0.6m、深さは0.2mで、断面形はU字形を呈する。南西-北東方向に延び、調査区外に続く。底面は、標高6.82m~6.75mで、南側が北側より高い。遺構内にはラミナ層を交えた黄褐色の砂質シルトが堆積しており、流水を伴っていたと推測される。埋土中からは、土器片や木製品が出土している。時期が分かる土器は少ないが、古墳時代の土師器と考えられる小片が見られるので、埋没時期は古墳時代(以降)と考えられる。15は突帯文土器の深鉢口縁部片、W9は柄と考えられる木製品である。



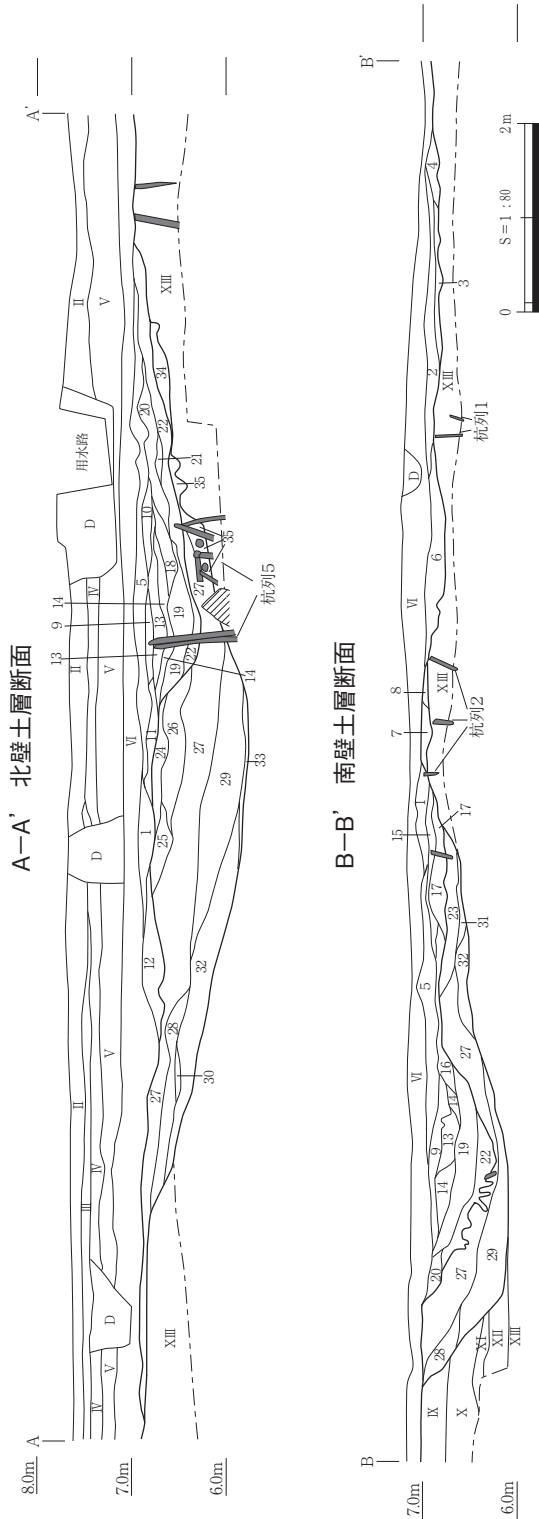
第25図 溝7

第26図 溝7出土遺物

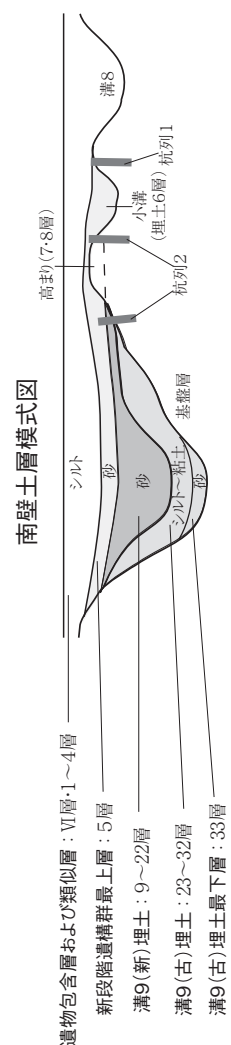


第27図 溝8・9、杭列・構造物群平面図





- |    |                      |                                      |
|----|----------------------|--------------------------------------|
| 1  | 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト    | しまりやや弱、粘性やや強、シルトをベースに細砂層を交えるラミナ堆積層   |
| 2  | 黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土   | しまりやや弱、粘性強、細砂をベースにシルト粗砂を交えるラミナ堆積層    |
| 3  | 黒褐色(2.5Y3/4)粘土       | しまり弱、粘性強、細砂を含む                       |
| 4  | 黄灰色(2.5Y4/1)粘土       | しまりやや弱、粘性強、溝8埋土                      |
| 5  | 灰黄色(2.5YR6/2)砂       | しまり弱、粘性なし、細砂をベースに粗砂層を交えるラミナ堆積層       |
| 6  | 黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土   | しまりやや弱、粘性強、細砂を含む                     |
| 7  | 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂   | しまり弱、粘性なし、細砂とシルトのラミナ堆積層              |
| 8  | 暗灰黄色(2.5Y5/4)シルト質砂   | しまり弱、粘性なし、細砂をベースに粗砂層を交えるラミナ堆積層       |
| 9  | 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質シルト | しまり弱、粘性強、細砂層を交えてラミナ堆積をなす             |
| 10 | 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト   | しまり弱、粘性強、細砂のラミナ堆積層                   |
| 11 | 灰黄色(2.5Y5/1)砂        | しまり弱、粘性なし、細砂をベースに細砂シルトを交えるラミナ堆積層     |
| 12 | 灰黄色(2.5Y6/3)シルト質砂    | しまり弱、粘性なし、粗砂をベースに細砂シルトを交えるラミナ堆積層     |
| 13 | 黄褐色(2.5Y5/4)砂        | しまり弱、粘性なし、粗砂をベースに粗砂シルトを交えるラミナ堆積層     |
| 14 | 暗灰黄色(2.5Y3/2)シルト     | しまり弱、粘性強、一部ラミナ堆積層                    |
| 15 | 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂       | しまり弱、粘性なし、細砂粗砂をベースにシルトをわずかに交えるラミナ堆積層 |
| 16 | 暗灰黄色(2.5Y5/1)砂       | しまり弱、粘性なし、細砂粗砂をベースにシルトをわずかに交えるラミナ堆積層 |
| 17 | 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質砂   | しまり弱、粘性なし、細砂のラミナ堆積層                  |
| 18 | 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土   | しまり弱、粘性強、細砂粗砂をベースにシルト粗砂を交えるラミナ堆積層    |
| 19 | 黄灰色(2.5Y5/1)シルト質砂    | しまり弱、粘性なし、細砂をベースにシルト粗砂を交えるラミナ堆積層     |
| 20 | 黒褐色(10YR3/1)粘土       | しまり非常に弱、粘性強、細砂をわずかに含む                |
| 21 | 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト    | しまり弱、粘性やや強、細砂多く含む                    |
| 22 | 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質砂    | しまり弱、粘性なし、細砂をベースにシルトを交えるラミナ堆積層       |
| 23 | 黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト   | しまり弱、粘性強、一部に細砂のラミナ層が見られる             |
| 24 | 黒褐色(2.5Y3/2)粘土       | しまり弱、粘性強                             |
| 25 | 黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土   | しまりやや弱、粘性強                           |
| 26 | 黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土   | しまり非常に弱、粘性強                          |
| 27 | 黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土   | しまり弱、粘性強                             |
| 28 | 灰白色(5YR5/2)砂         | しまり弱、粘性なし、細砂のラミナ堆積層                  |
| 29 | 黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土   | しまり弱、粘性強                             |
| 30 | 黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト    | しまり弱、粘性強、細砂多く含む                      |
| 31 | 灰色(5Y5/1)砂           | しまり弱、粘性なし、細砂層                        |
| 32 | 黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト    | しまり弱、粘性強、細砂多く含む                      |
| 33 | 灰色(5Y5/1)砂           | しまり弱、粘性なし、粗砂のラミナ堆積層                  |
| 34 | 黄灰色(2.5Y5/1)砂        | しまり弱、粘性なし、細砂のラミナ堆積層                  |
| 35 | オリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルト   | しまり弱、粘性やや強、細砂多く含む、XIII層層ブロックわずかに含む   |



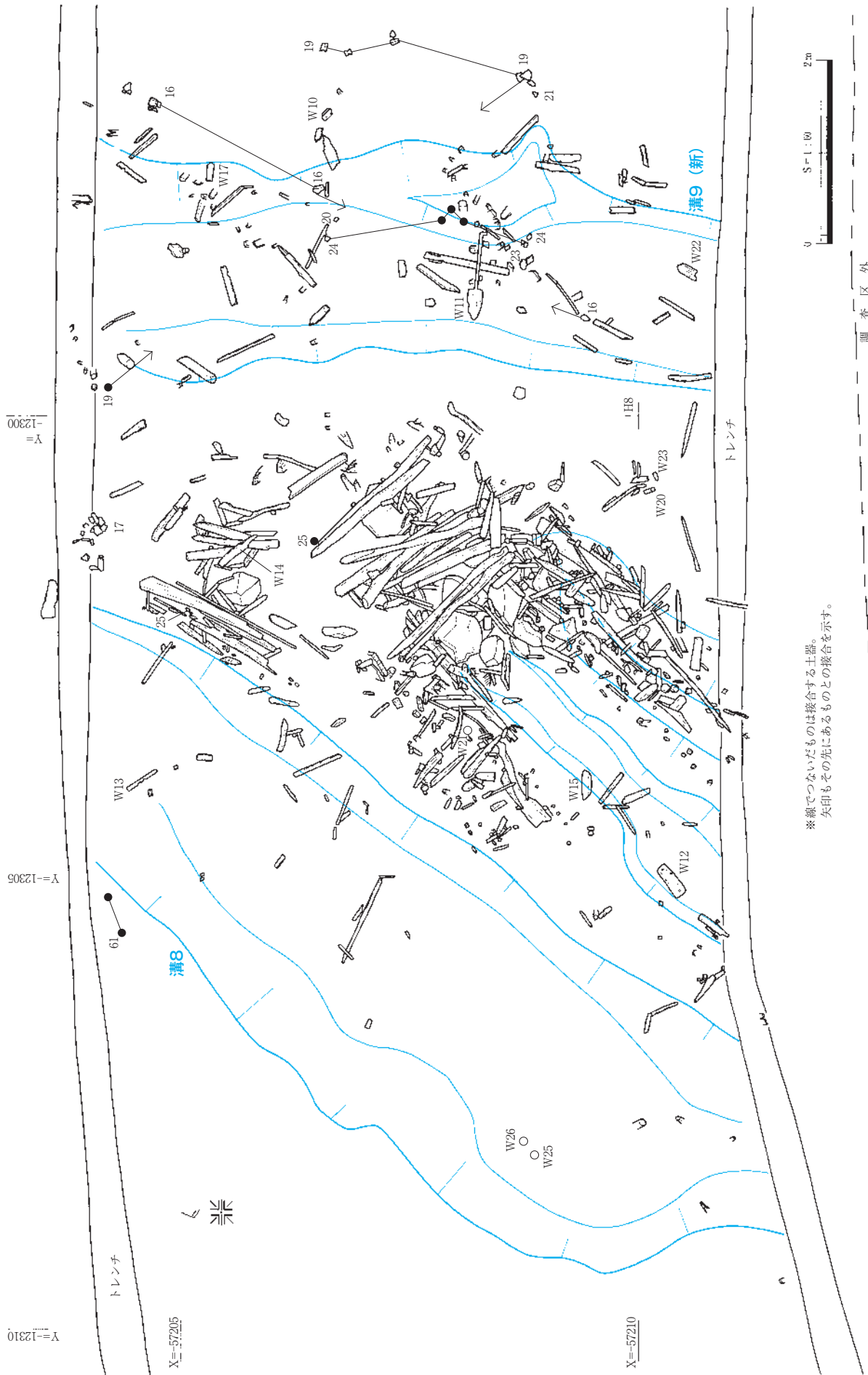
第28図 溝8・9、杭列・構造物群土層断面図

(2) 溝8・9、杭列・構造物群

ア 概要(第27・28図、PL.19・20)

調査区中央付近のG7・8、H7・8グリッドの、X III層またはIX層上面で検出した遺構群である。溝8と溝9の2つの溝と、多数の杭列といくつかの(木造)構造物が複雑に組み合わせられた「杭列・構造物群」で構成されている。このうち、溝9は少なくとも新旧2段階の遺構が重複したもので、杭列・構造物群にもおそらく溝9と対応すると考えられる新旧の2段階が認められる。

古段階の遺構群は、X III層またはIX層上面で検出した。幅約5mの南北に延びる溝9古段階(以下、



第29図 溝8・9、杭列・構造物群最上層遺物出土状況



第30図 溝8・9、杭列・構造物群最上層出土土器

「溝9(古)」と呼称)と、それを横断する杭列、溝肩部付近に設けられた矢板群・礫集積、溝の護岸施設と考えられる木造構造物(以下、「杭列・構造物群(古)」と呼称)からなる。溝9(古)の埋土は、主に黒褐色シルトからなる23～35層である。

新段階の遺構群は、基盤層(Ⅸ層・ⅩⅢ層)上面または溝9(古)の埋土上面で検出した。溝9(古)が一旦埋没した後、それを掘り直したと考えられる幅約2.4mの溝9新段階(以下、「溝9(新)」と呼称)を中心とし、その西側の畝状の高まり(以下「高まり」と呼称)と小規模な溝(以下「小溝」と呼称)、さらにその西の溝8、高まりと小溝周辺に構築された構造物群・杭列群、および溝9(新)を横断する2群の杭列から構成されている。溝9(新)は、主に黄灰色系の砂からなる9～22層が埋土となっており、小溝は包含層Ⅵ層類似の6層が、溝8も包含層Ⅵ層類似の3・4層が埋土となっている。

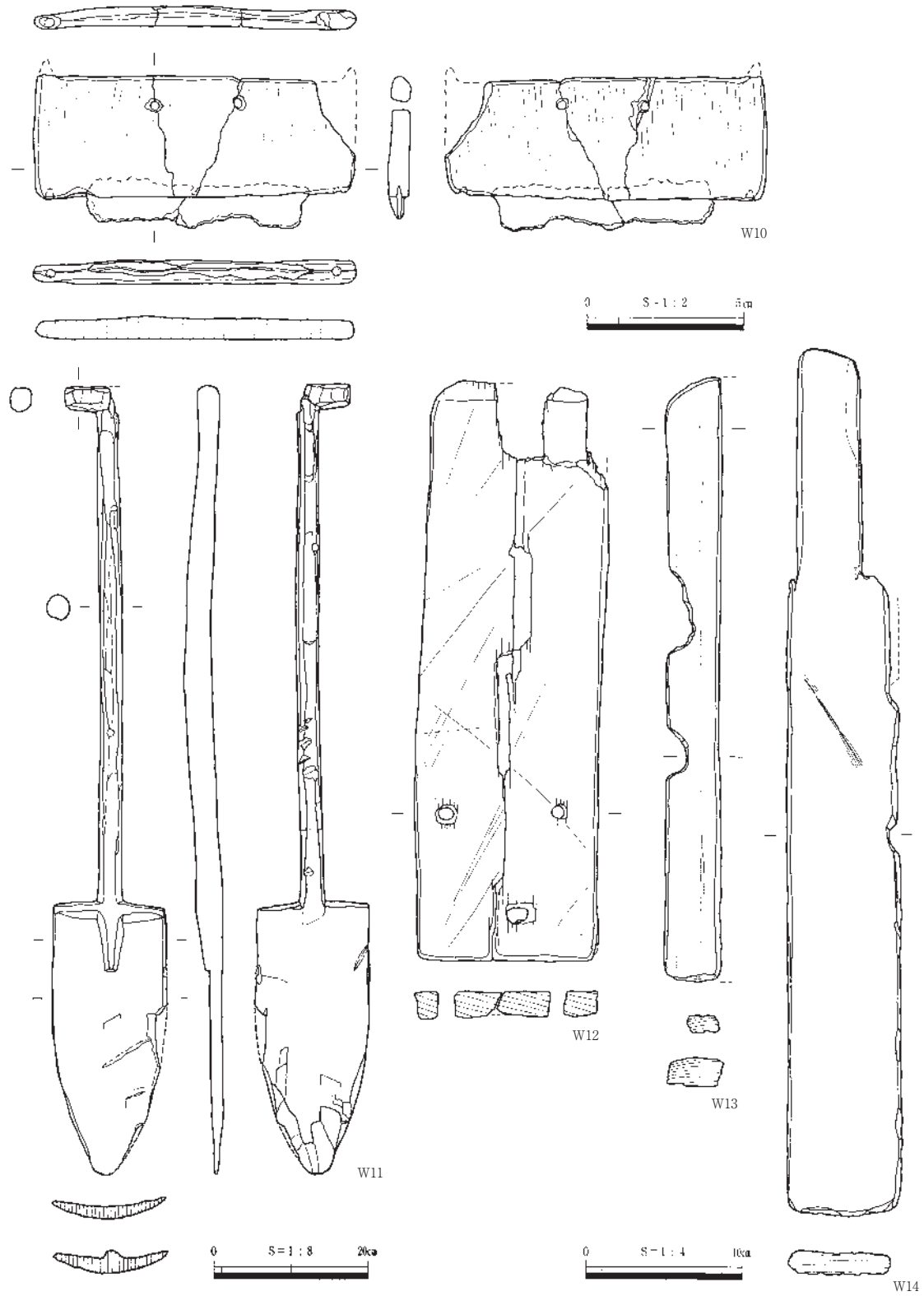
新段階の遺構群は、検出面直上付近で、木製品・土器を非常に多く含む砂層(5層)に被覆されており、さらにその上に遺物包含層Ⅵ層やそれに類似した1～4層が堆積していた。

以下、検出した順序にしたがって、「イ. 新段階遺構群遺物検出状況」、「ウ. 新段階遺構群」、「エ. 古段階遺構群」の順に報告する。

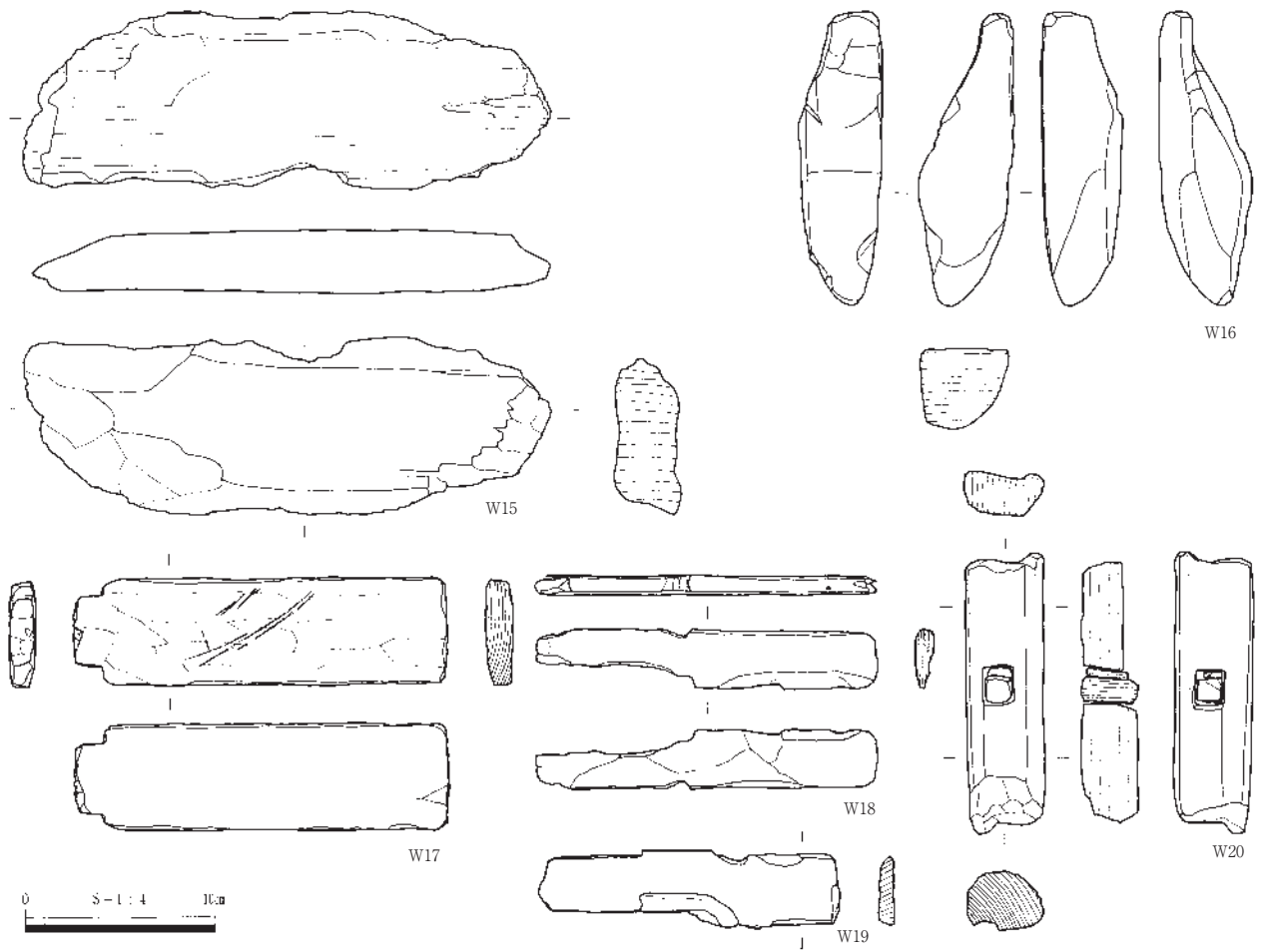
#### イ 新段階遺構群検出状況(第29～33図、PL.9～12・24～27、表1・3)

前述のように、遺構群の直上に堆積した砂層(5層)からは多数の土器、木製品が出土している。

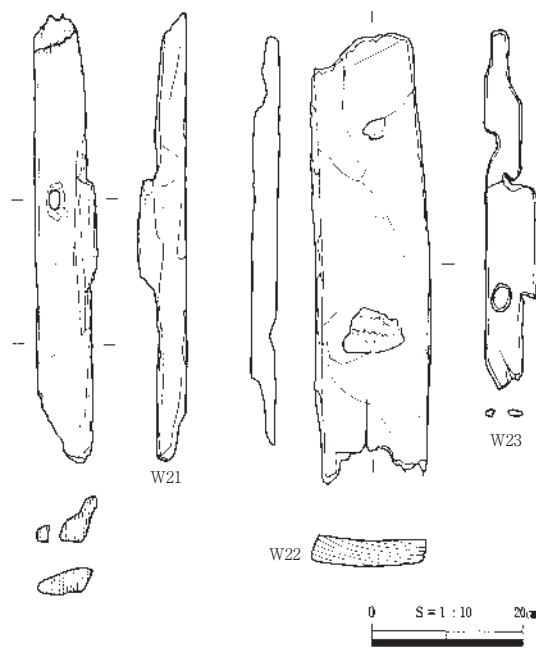
5層は細砂をベースとし、粗砂を交えたラミナ堆積が見られる層で、溝9(新)がほとんど埋没した段階に、溝9(新)の流路に沿って南方から流水を伴って堆積したものと考えられる。5層は、杭列・



第31図 溝8・9、杭列・構造物群最上層出土木製品(1)



第32図 溝8・9、杭列・構造物群最上層出土木製品(2)



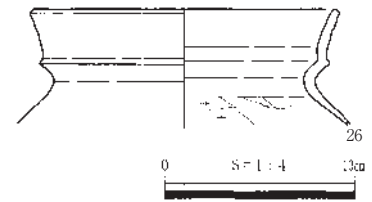
第33図 溝8・9、杭列・構造物群最上層出土木製品(3)

### 第3章 調査の成果

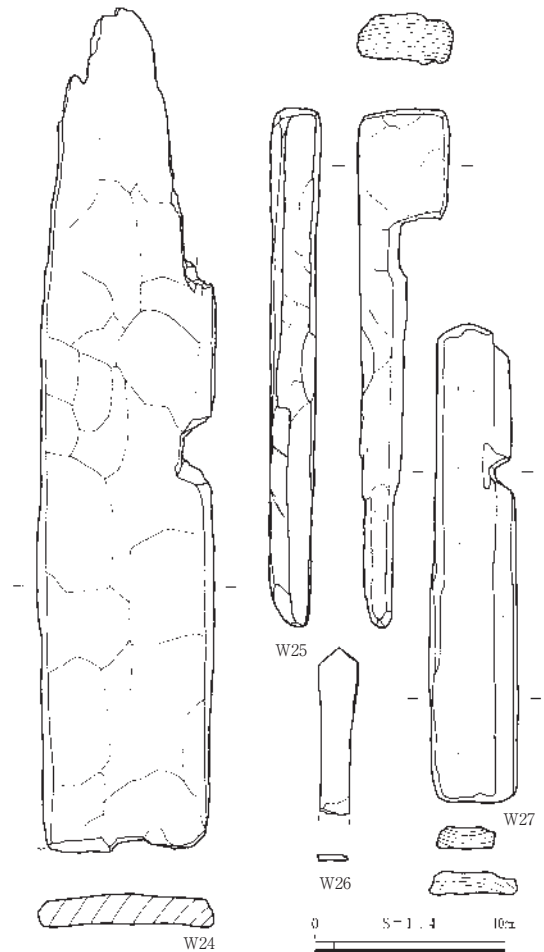
構造物群新段階(以下、「杭列・構造物群(新)」と呼称)も被覆していることから、溝9(新)内からオーバーフローして堆積したと考えられる。この堆積をもって溝9(新)や杭列・構造物群(新)は埋没し、その機能を失ったものと推測される。したがって、この層から出土した遺物には、溝9(新)および杭列・構造物群(新)の最終機能時のものが含まれていると考えられる。

土器は古墳時代の土師器が多数出土している。そのうち、残りがよく、時期が判別できるものを掲載した(16～25)。古墳時代中期のもので、最新のものが岩吉編年Ⅷ期である。

木製品も多数出土しており、大半は土器が示す時期のものと考えられる。5層から出土した木製品には農具などの道具類が多い。W10は木製の台部に鉄製の刃が組み合わされた穂摘具である。木製台の下面に溝を彫って、鉄製刃先をはめ込んでいる。木製台の形態は平面長方形で、背部両端が角状に突出している。紐孔が2つ空けられているほか、刃部側の下面両端部に穴が穿たれている。下面の鉄刃と穴の間には摩滅が見られることから、ここに紐がかけられていた可能性が考えられる。紐が木製台に巻きつけるようにつけられていたとすれば、穴には楊枝状の細い棒が差し込まれて引っかかりを作っていた可能性が考えられるかもしれない。なお、木製台の樹種はコナラ属アカガシ亜属である。W11は鉄製鋤先を装着するタイプの一木平鋤、W12～W14は田下駄、W15・W16は容器、W17は指物、W18・W19は馬形、W21は舟材を転用した杭、W22は舟材の一部、W20・W23は用途不明品である。



第34図 溝8出土土器



第35図 溝8出土木製品

#### ウ 新段階遺構群(第27・28・34～44図)

##### (ア)溝8(第27・28・34・35図、PL.9・24、表1・3)

G7・G8グリッドのⅩⅢ層上面で検出した溝状遺構である。溝8のすぐ東には杭列と構造物を伴った小溝と高まりがあり、さらにその東には溝9(新)が位置している。

確認した遺構の長さは7.7mで、南西から北東方向に直線状に延び、調査地外へと続いている。幅は最大3.2m、深さ0.1mの浅い窪地状の溝である。底面レベルは、南西側が北東端よりも6cm程度高い。遺構内には黒褐色の粘土が堆積していた。

溝の東肩部、小溝との間には溝8や小溝・高まりに平行した杭列1(後述)が見られる。遺構の方向や杭列のあり方からみて、溝8はこれらの遺構群と有機的な関係にあったものと推測できる。

遺構埋土中からは、弥生土器・土師器片、木製品が出土している。出土土器のうち、時期の分かる古墳時代前期の土師器甕(26)を図示したが、これよりも新しい時期かと思われる土師器小片も多く見られるので、26が遺構の埋没時期を示すものである可能性は低い。むしろ、先述の砂層5層堆積時(古墳時代中期)に近い時期に埋没した可能性が高いと考えている。そのほか、木製品もいくらか出土しており、W24・W27の田下駄、W25の栓、W26の用途不明品などが見られる。

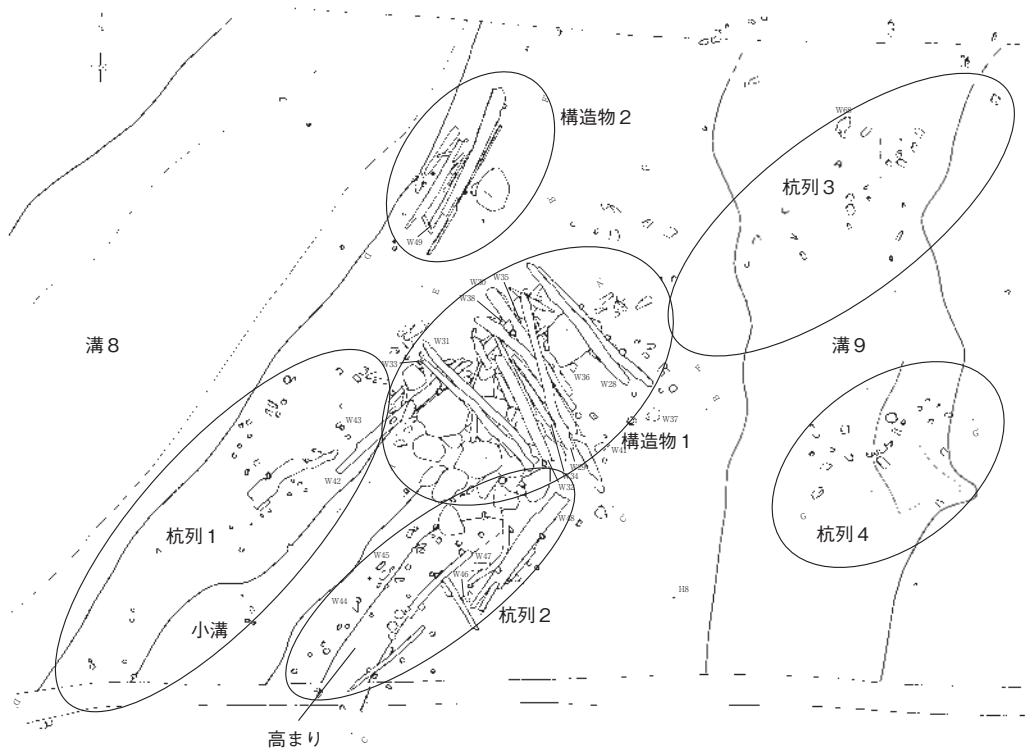
**(イ) 溝9(新)、杭列・構造物群(新) (第27・28・36～44図、PL.9～16・24・28～31、表1・3・4) 概要**

溝8の東側に展開する遺構群で、溝9(新)と杭列・構造物群(新)は一体として機能していた可能性が高い。ただし、溝9(新)は南北方向に延びるが、高まり、小溝、杭列、構造物はいずれも南西 - 北東方向に展開している。なかでも、杭列3・4は、溝9(新)と斜交して重複しているので、時期が異なる可能性も考えた。しかし、杭列3・4を構成する杭のいくつかは溝9(新)の底面に打ち込まれた可能性が高いほか、底面に達しない杭も溝9(新)が埋没する過程でその都度打ち込まれたと捉えたほうが理解しやすいものが多い。また、これらの杭列はいずれも先述の砂層5層に被覆されていたことから、溝9(新)の埋没の度合いに差はありつつも、溝9(新)が機能していた段階に構築された可能性が高いと考えられる。

以上のことから、溝9(新)と杭列・構造物(新)はほぼ同時に機能していたと判断した。

**溝9(新)**

H7・H8グリッドの溝9(古)埋土上面で検出した。溝9(新)は南北方向に延びる溝で、検出した長さは6.4m、幅1.9～2.6m、深さ0.6～0.7mで、調査区外にも続いている。溝9(古)の堆積層を切って構築されており、溝9(古)が埋没した後、その流路を踏襲して再掘削したものと考えられる。底面



第36図 杭列・構造物群(新)の遺構名称

は安定しておらず凹凸が見られるが、底面の標高は6.3m～6.5mで、おおむね南側が10～20cmほど高い。埋土はラミナ堆積を見せる砂層で、機能時には流水を伴っており、流水のもたらしした砂によって徐々に埋まっていったと考えられる。なお、後述する杭列3・4を構成する杭のいくつかは、溝9(新)がある程度埋まってから打ち込まれていることから、溝9(新)は徐々に埋まりながら機能していた可能性が考えられる。

溝9(新)の埋土からは、土師器や木製品が出土している。そのうち、時期の分かるものを図示した。27は古墳時代中期の土師器甕、28は古墳時代前期の土師器甕である。そのほかの小片も古墳時代中期のものが主体になると考えている。したがって、溝9(新)の機能および埋没した時期は、古墳時代中期と考えられる。

### 高まり

溝9(新)の西側のXⅢ層上面で検出した、畝状の高まりである。この高まりは周辺を浅く掘削し、低い盛土(7・8層)を施すことによって形成されている。高まりの幅は、下底で最大1.5m、上面で最大0.5m、高さは約20cm(盛土は5～10cm程度)である。高まりの北端には構造物1があり、南側は調査区外に続いている。高まりの上面の両肩に沿うように、杭列2が構築されている。杭列2は高まりの補強を目的としたものであろう。

### 小溝

高まりの西に平行して存在する。幅0.6～1.2m、深さ15cm程度の浅い溝である。掘り込み面はXⅢ層上面である。北端は高まりと同じく構造物1に接続して途切れており、南側は調査区外に続いている。底面の標高は6.69m～6.74mで、北端のほうが南端より約5cm高い。埋土は黒褐色のシルト質粘土であった。埋土中からは少量の土器と木製品が出土しているが、図化できるものはなかった。土器は古墳時代の土師器が中心と思われる。

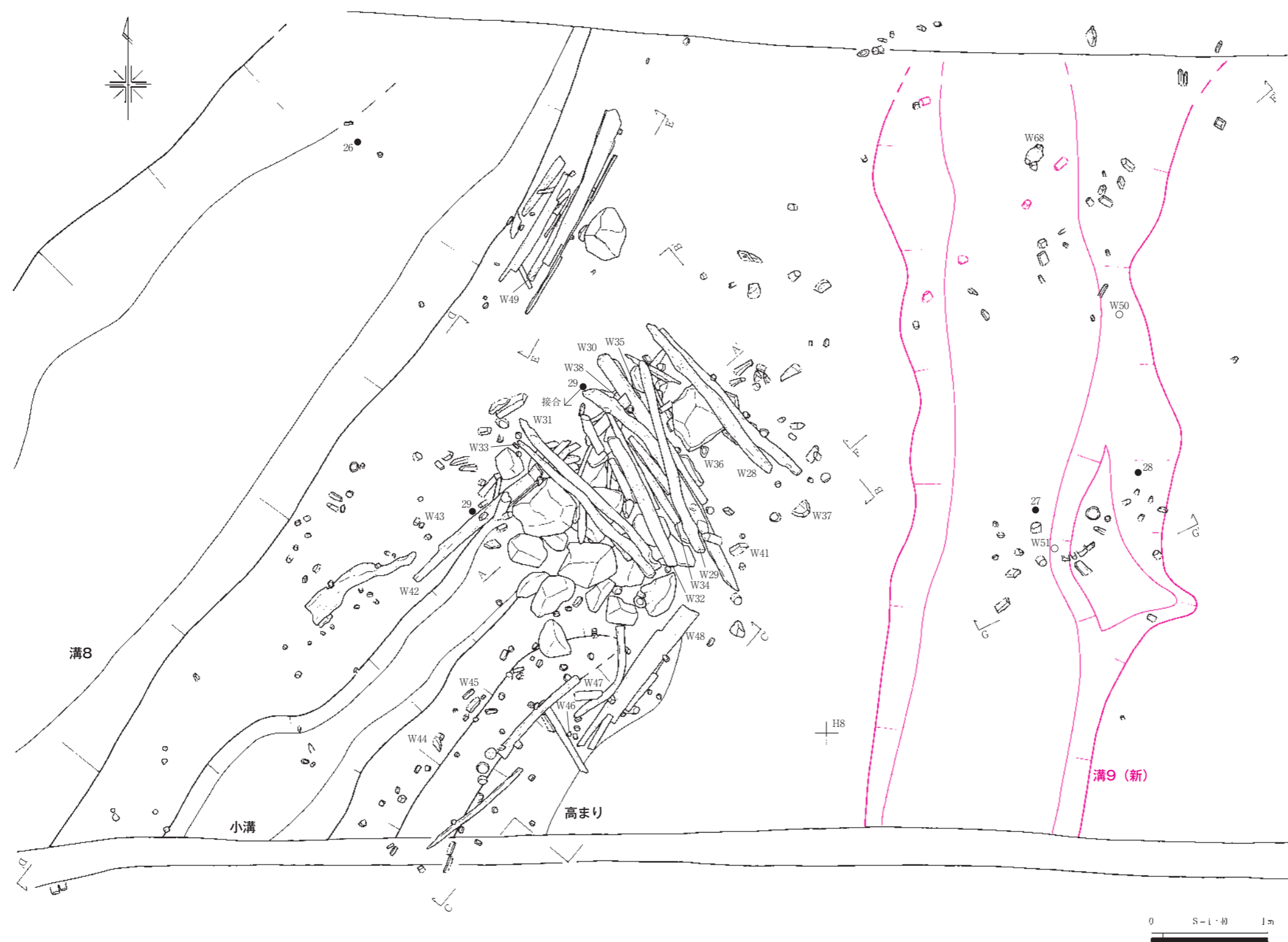
### 構造物1

高まりと小溝の北端に位置する、木製品と礫によって構築された構造物である。大部分がXⅢ層上に築かれているが、一部、溝9(古)埋土上にも築かれている。構造物1は高まり・小溝のほか、杭列1・2とも接続していて、これらと一体として機能していたことを強くうかがわせる。その構造は、径20～50cm程度の垂角礫の上に、長さ1.5m程度の建築材などの長尺の木製品を北西・南東方向に並べており、高まり・小溝、杭列1・2と直交する関係にある。また、礫や長尺の木製品の周りには、杭や矢板を溝9(古)の埋土または基盤層XⅢ層にかなり深く打ち込んでおり、礫や木製品を固定または補強しているようである。

なお、構造物1は、後述する杭列・構造物群(古)の構造物3や杭列5と平面的に重なっているため、構造物1の杭・矢板のうち基盤層XⅢ層に深く打ち込まれたものに関しては、古段階のものと厳密に区別できない。ただし、平面図・立面図に図示したものは、杭の頂部・底部の標高などから見て、古段階に打設されたとしても、新段階にも機能が継続していた可能性が高いと考えている。

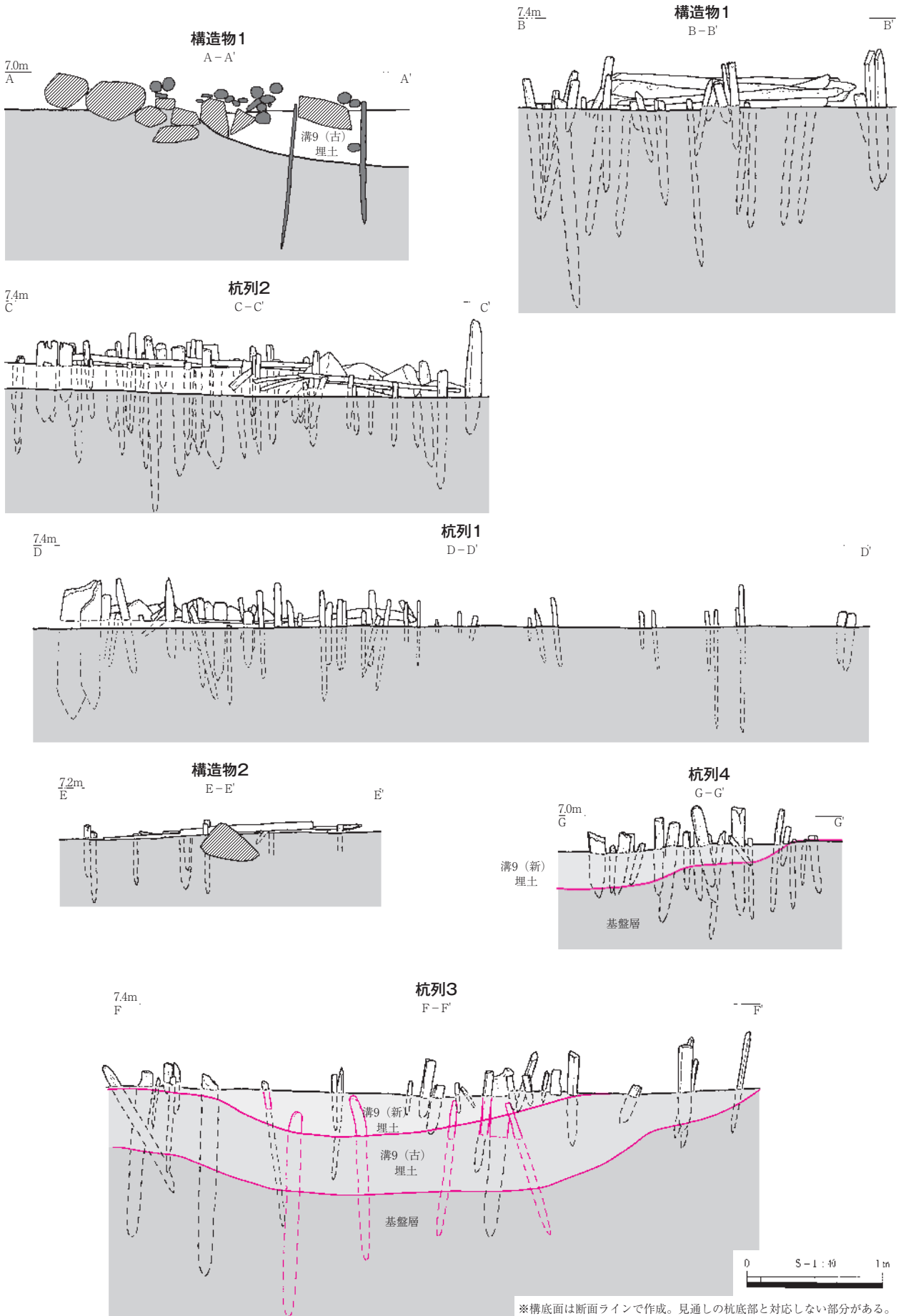
構造物1の基盤層付近からは古墳時代の土師器が出土している。そのうち、時期の判別できる29を図示した。29は古墳時代中期の土師器甕片で、岩吉編年Ⅶ期に相当するものと考えられる。また、構造物を構成する木製品のうち、建築材などの転用品や、加工の程度が大きいものを図示した(W28～W41)。W28～W34が礫の上に掛け渡されていた長尺の木製品で、いずれも垂木などの建築材である。W35～W41は杭や矢板として打ち込まれていたもので、大半が建築材の転用品である。





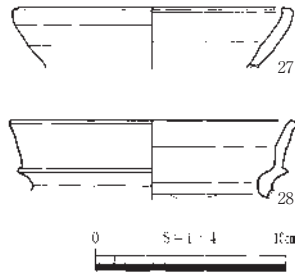
第37図 溝9(新)、杭列・構造物群(新)平面図



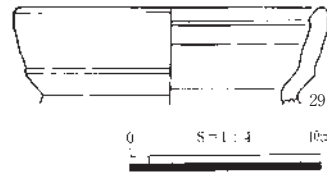


※黒で示したものは溝9(新)最終段階まで機能したと考えられる杭。  
 赤で示したものは溝9(古)に対して打ち込まれた可能性がある杭。

第38図 杭列・構造物群(新)断面図・立面図



第39図 溝9(新)出土土器



第40図 構造物1出土土器

## 構造物2

構造物1の北西、溝8の東肩のXⅢ層上に構築されている。南西 - 北東方向に向いた10枚程度の板材が密集して出土した(第29図参照)。そのうち、原位置を留める可能性が高いものを残して取り上げたところ、基盤層XⅢ層上面で、径50cm程度の亜角礫と、板を留めるように打たれた杭を検出した。本来は、板が箱状に組み合わせられて、その側面を杭で留める構造になっていたと考えられる。こうした構造からは、導水などの機能を担った構造物であった可能性が考えられよう。

構造物2に用いられた板は建築材などの転用品である。そのうち1点を図示している(W49)。

### 杭列1

溝8と小溝の間のXⅢ層上に構築されている。溝8東肩側と小溝西肩側の、おおむね2列の杭・矢板が対になって、南西 - 北東方向に展開している。北端は構造物1に接続し、南端は調査区外に続いている。杭列を構成する杭は、大半が50cm前後の長さで、構造物1の杭に比べて短く、径も小さい。杭列の中には、杭で固定された南西 - 北東方向に向いた板も見られる。この杭列は、溝8東肩から小溝西肩にかけての地盤を補強する目的で打設された可能性が高い。あるいは、小溝を挟んで東に見られる高まり・杭列2のように、本来は杭列内に盛土が施されていた可能性も想定できるかもしれない。

杭列を構成する木製品のうち、2点を図示した(W42・W43)。W42は構造物1に接続する部分に杭で固定されていた板で、建築材を転用したものである。W43は樹皮の残る丸木杭で、垂木を転用したものの可能性が考えられる。

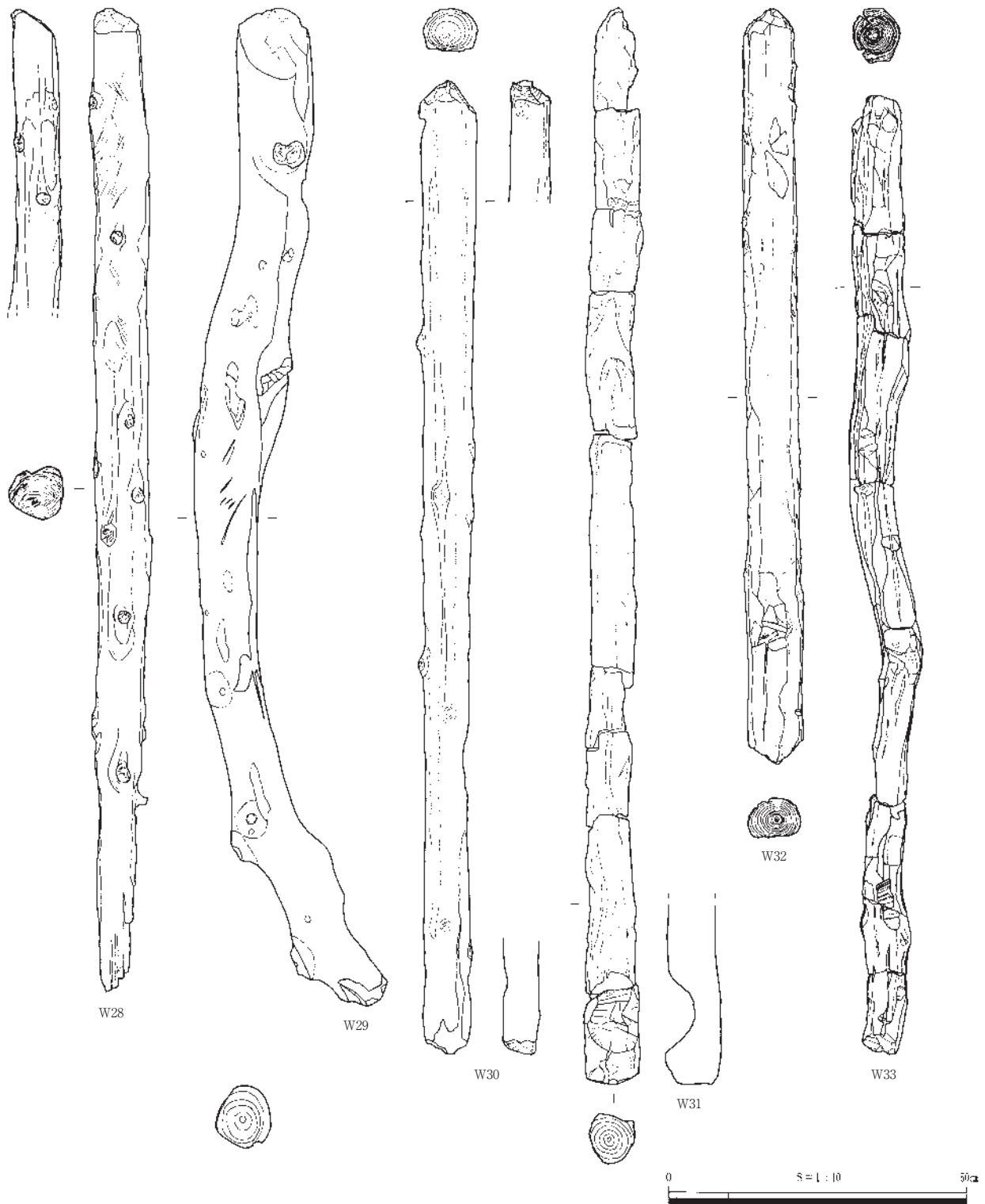
### 杭列2

高まりの上面に位置する。高まり上面の東肩、西肩沿いに、おおむね2列の杭・矢板が対になって南西 - 北東方向に展開している。北端は構造物1に接続し、南端は調査区外に続いている。杭列2を構成する杭は長さ60cm程度のもを中心としており、杭列1の杭と同等の大きさであるが、杭列1より密に杭が打たれている。ただし、これは遺存状態の違いによるものである可能性も考えられる。先述のように、杭列2は高まりの補強を目的としたものである可能性が考えられる。

W44～W48は杭列を構成する杭、矢板、板である。W48は構造物1に接続する部分に杭で固定されていた板で、建築材を転用したものである。なお、W44は放射性炭素年代測定を行っており、古墳時代前期～中期ごろの年代値が得られている(第4章第1節参照)。

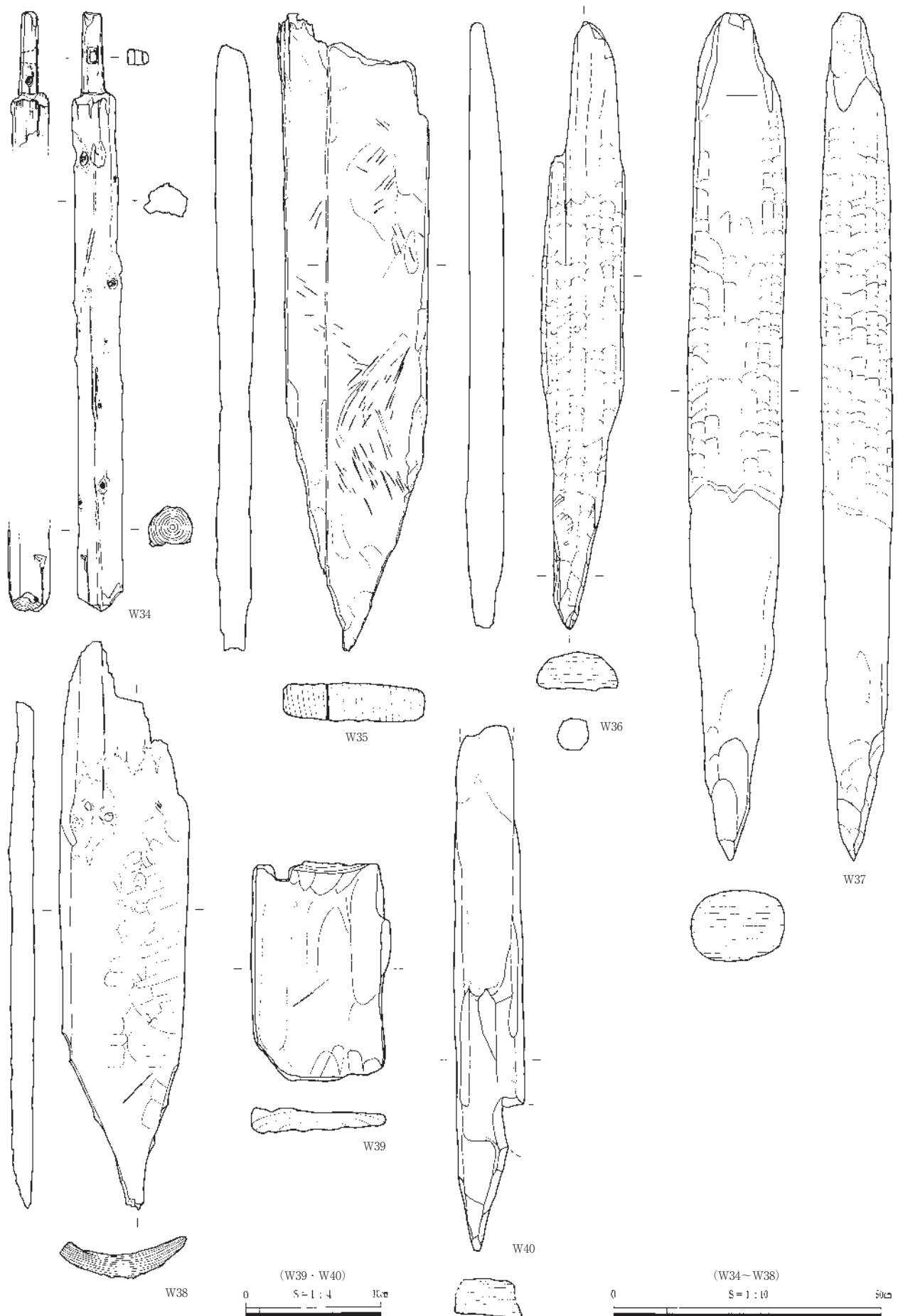
### 杭列3

構造物1の北端から、北東方向に展開する杭列である。先述のように、溝9(新)と斜交しており、溝9(新)が掘削された当初からほぼ埋没する段階まで、継続的に杭が打設されていた可能性がある。

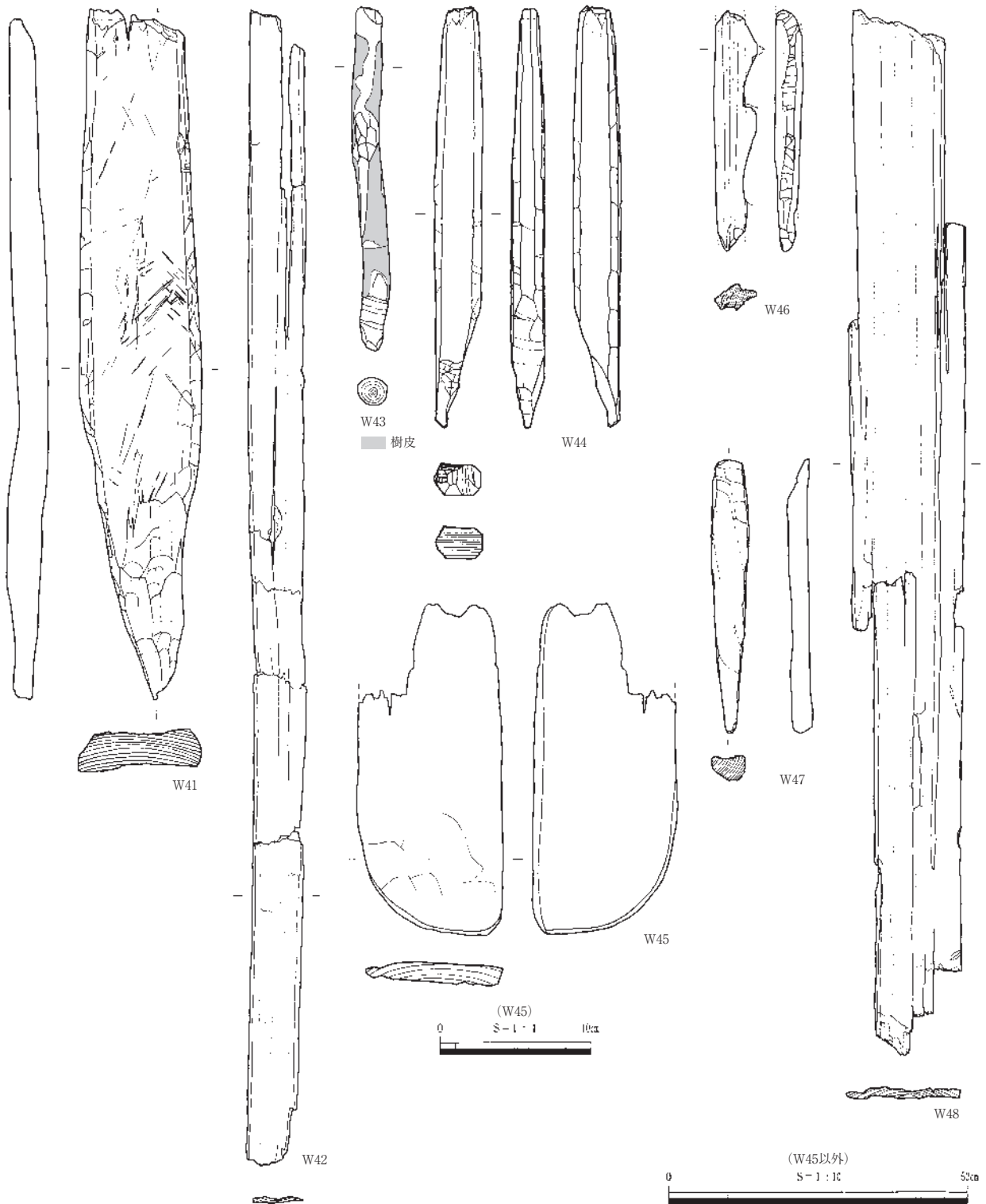


第41図 杭列・構造物群(新)構造物1木製品(1)

平面図・断面図(第37・38図)で示した杭のうち、黒色で示したものは、杭の頂部が溝9(新)埋土の上に出ていたもので、溝9(新)が埋没する最後の段階まで機能していた可能性がある。そのうちのいくつかは杭下端が溝9(新)の埋土中で収まっており、溝9(新)が埋没する過程、あるいはほとんど埋没しきった段階で打ち込まれたことが確実である。ただし、長大な杭については、溝9(新)掘削当初に打たれたか、埋没過程で打たれたか判断が付かない(立面図で溝9(新)埋土の部分が赤色になってい



第42図 杭列・構造物群(新)構造物1木製品(2)



第43図 杭列・構造物群(新)構造物1、杭列1・2木製品

る杭)。一方、平面図に赤色で示した杭は、溝9(新)の埋土内に杭頂部が埋まっているので、埋没前に打設されたものである。なお、これらに関しても、後述する溝9(古)の機能時に杭列5として打設されていた杭である可能性も考えられるため(普通は、溝を再掘削すれば古い杭は切られたり、抜けたりするだろうが、これらの杭はかなり太く長大であるため、これを避けて溝を掘削することも可能だろう)、構築の時期については不明確である。しかし、杭列5として打たれたものであっても、少

### 第3章 調査の成果

なくとも溝9(新)が掘削された当初や埋没が進んでいない段階では、杭列3の一部として機能していた可能性があると考えている。

この杭列の機能を推定するのは難しいが、可能性としては溝9(新)を堰き止めるものであったことなどが考えられる。このように捉えると、溝9(新)の埋没過程に従って、杭がその都度打たれたことも理解しやすいのではないかと考えている。

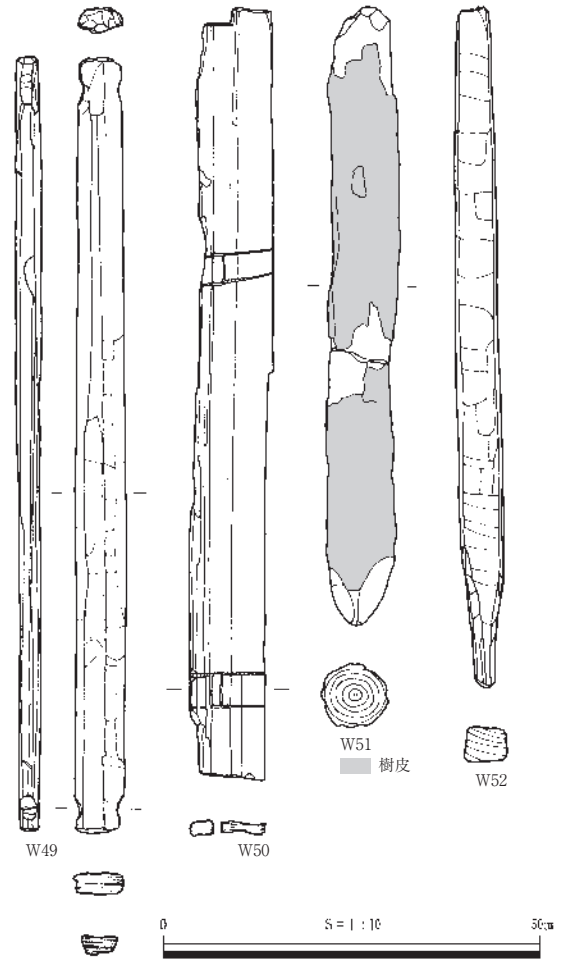
W50は杭列3の東端付近、溝9(新)の肩付近に打ち込まれていた板で、建築材を転用したものと考えられる。

#### 杭列4

杭列3の南に、溝9(新)と斜交して位置する。明確な列ではないが、おおむね南西 - 北東方向に杭が展開している。杭列4も、杭列3同様、溝9(新)が掘削された当初からほぼ埋没する段階まで、継続的に杭が打設されていた可能性がある。杭列4には、杭頂部が溝9(新)の埋土で埋まっていたものはないので、溝が埋没し終わるまで機能していたものと考えられる。また、杭列3と同じく、杭下端が溝9(新)の埋土中に収まっているものも見られる。杭列4の杭は、杭列3に比べて、短く径も小さく、打ち込まれた深度もかなり浅い。全般に、溝9(新)が埋没する過程、特にほとんど埋没した段階で打設されたものである可能性が高いだろう。

杭列4も、杭列3同様、溝9(新)を堰き止めるものであった可能性などが考えられる。

この杭列を構成する杭を2本図示した(W51・W52)。



第44図 杭列・構造物群(新)  
構造物2、杭列3・4木製品

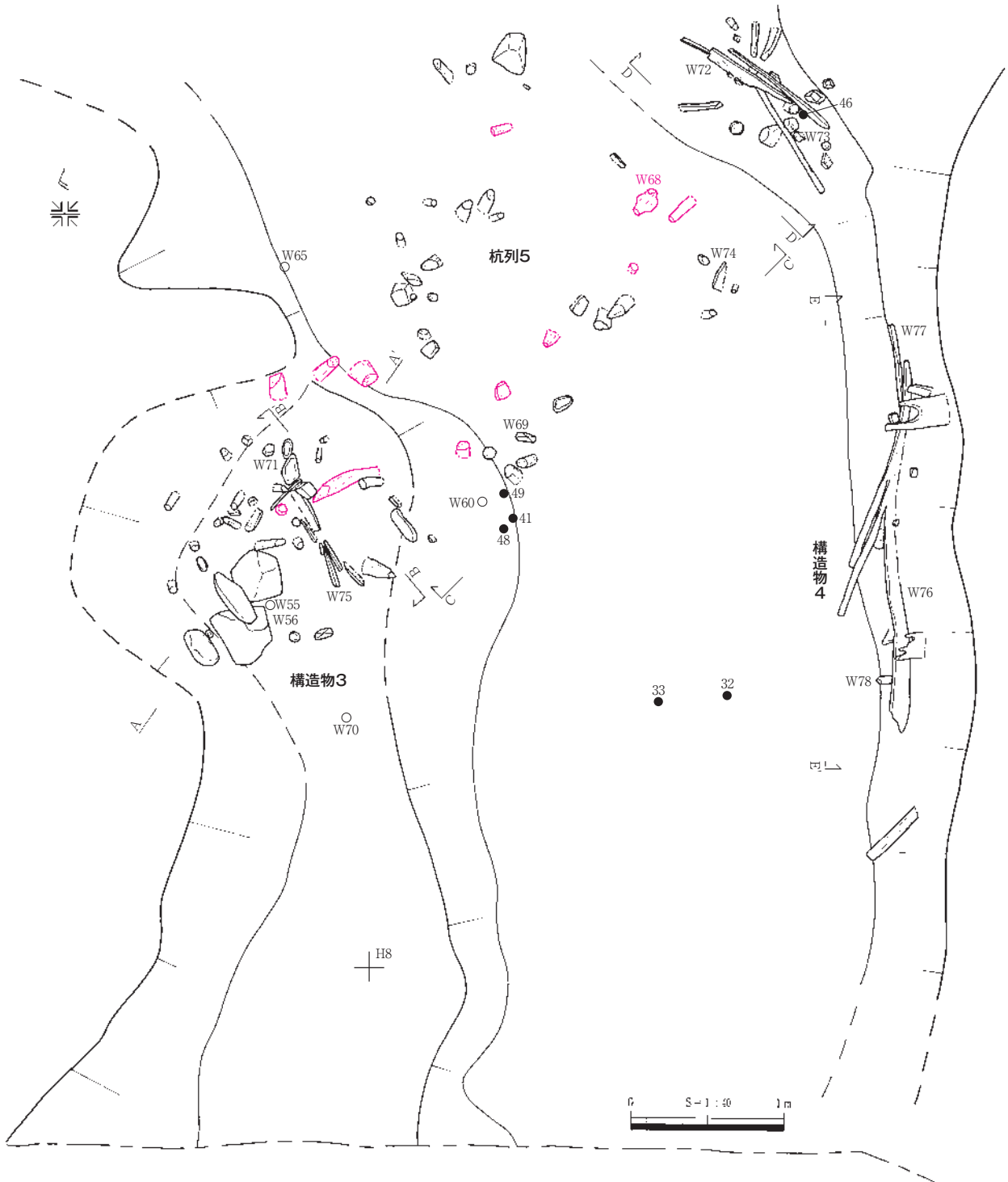
### エ 古段階遺構群(第27・28・45～52図、PL.17～19・24・31～36、表1・2・4・5)

#### 概要

溝9(新)完掘後、溝9(古)の埋土を掘り下げた。その過程で、新段階の構造物1周辺下部で礫や矢板からなる構造物(構造物3)を、新段階の杭列3の下部で溝9(古)を横切る杭列(杭列5)を、溝9(古)の東側壁面で護岸施設と見られる木造構造物(構造物4)をそれぞれ確認した。これらの杭列・構造物は溝9(古)の埋土内でその上部を検出し、いずれも基盤層に打ち込んで構築されているのを確認したことから、溝9(古)が溝として機能していた段階に構築されたものと考えた。したがって、溝9(古)とこれらの杭列・構造物は一体として機能していた可能性が高い。なお、溝9(古)に伴う杭列・構造物を一括して呼称する場合は「杭列・構造物群(古)」とする。

すでに示したとおり、溝9(古)は埋没した後、溝9(新)として再掘削されている。また、層位的には新段階と明確に分離できたものの、構造物3は新段階の構造物1と、杭列5は新段階の杭列3と平

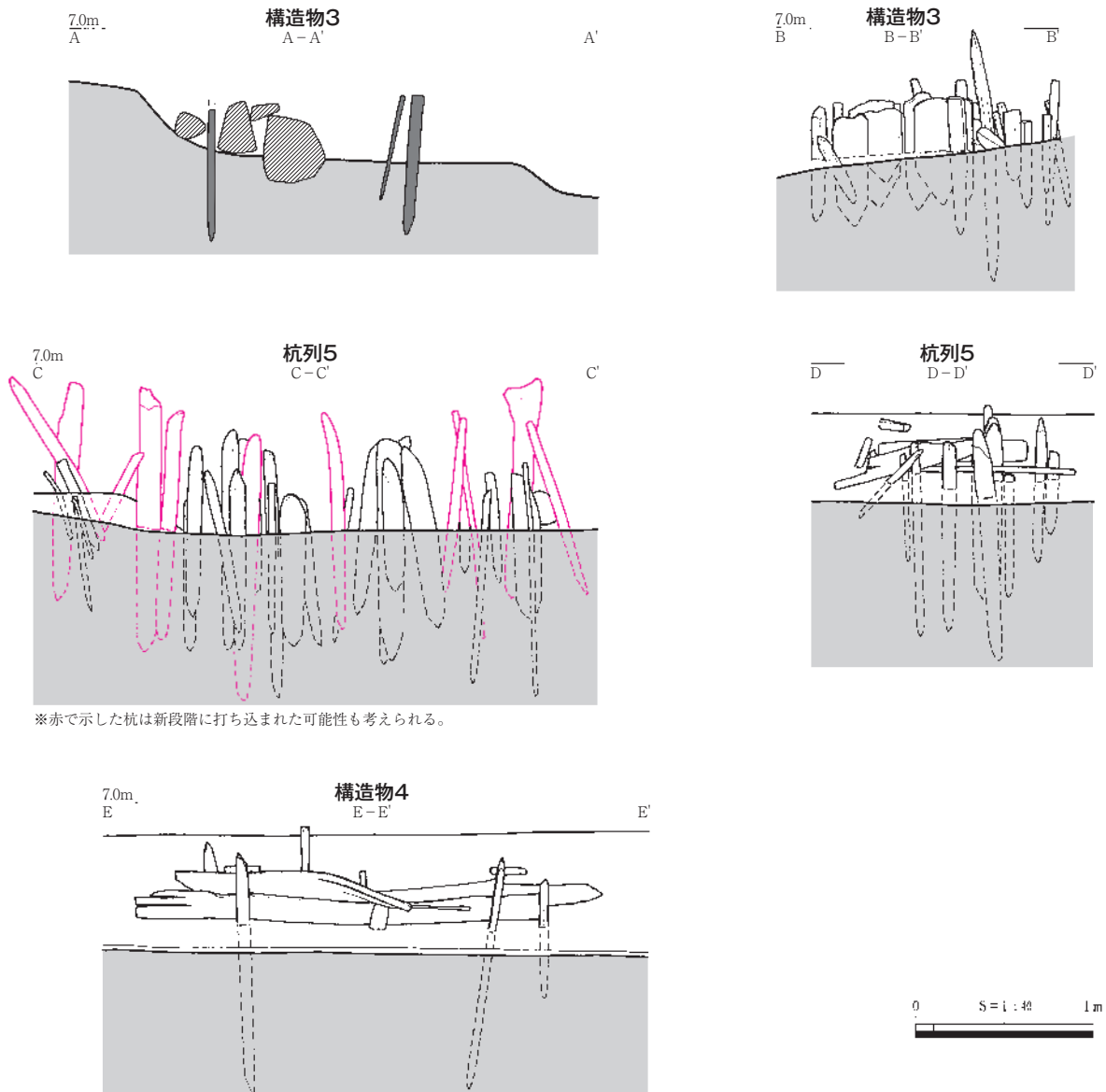




第45図 溝9(古)、杭列・構造物群(古)平面図

面的に重なっており、構造物の構造や杭の形態・配置が連続性ないしは関連性を強くうかがわせている。つまり、古段階の溝9(古)および杭列・構造物群(古)は、新段階の溝9(新)および杭列・構造物群(新)と同様の機能を持ち、時間的にも連続する遺構群であった可能性が考えられる。さらに言えば、新段階のものとした杭列・構造物のうち基盤層上に直接構築されたもの(あるいはそれを構成する杭の一部)や小溝、溝8なども、もともとは古段階に構築されて、新段階まで利用が継続していたものが含まれている可能性も考えられる。しかし、これについては層的には明らかにできる関係性にな

### 第3章 調査の成果



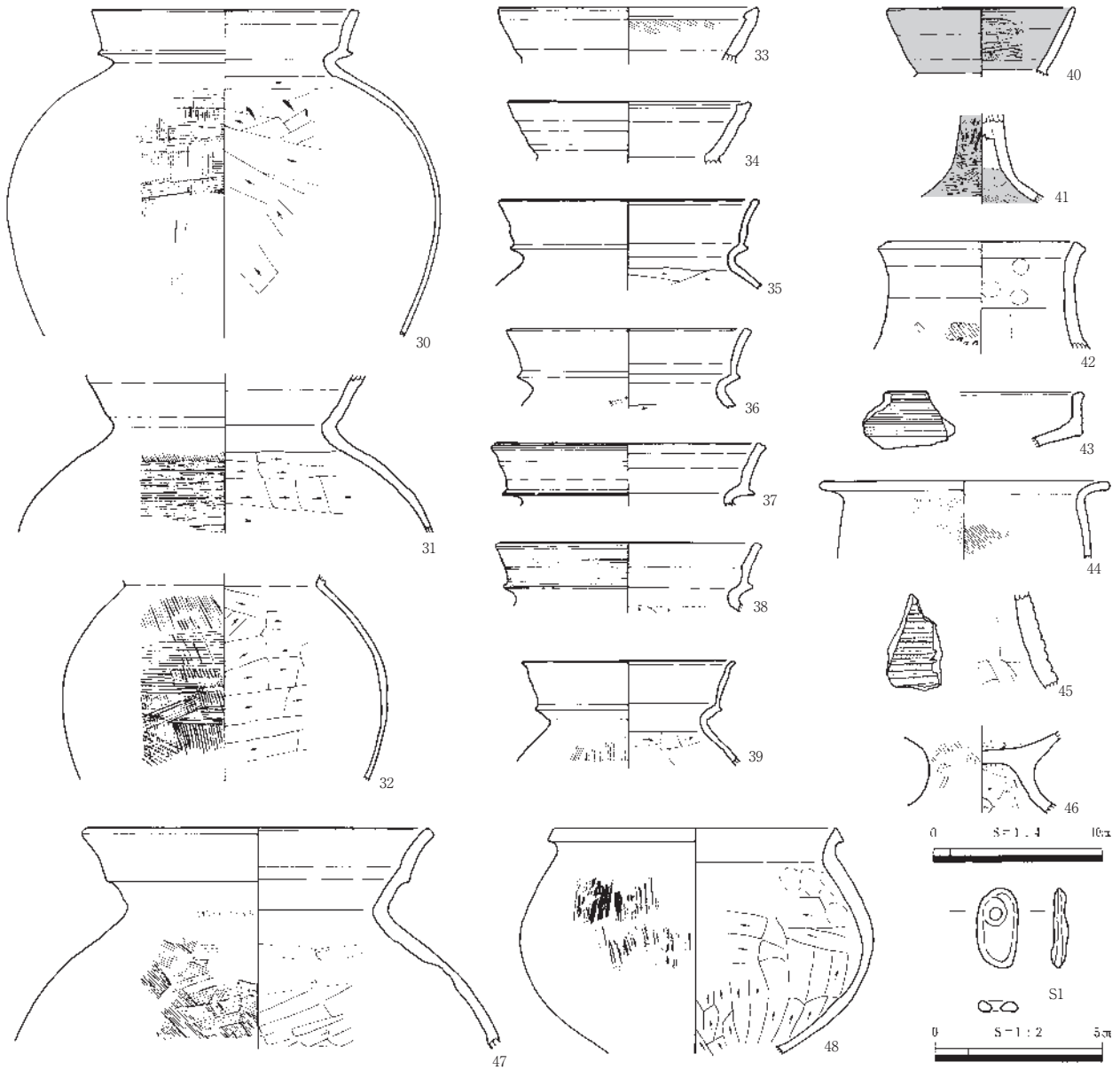
第46図 杭列・構造物群(古)断面図・立面図

いため、確実なことは不明である。

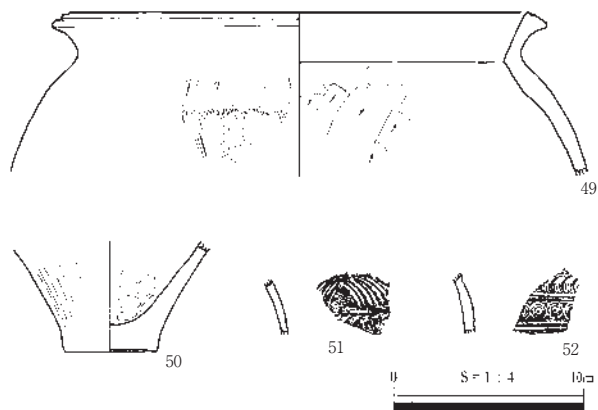
#### 溝9(古)

G7・G8・H7・H8グリッドのXⅢ層またはⅨ層上面で検出した。南北方向に延びる溝状遺構で、確認した溝の長さは7.0m、幅は4.5～5.8m、深さは0.9～1.1mで、調査区外に続いており、調査区北壁際で北西方向に大きく屈曲するようである。底面の標高は6.0m前後で、検出した範囲内では北側と南側の差はほとんどない。断面形は、緩やかなU字形で、立ち上がりの途中にテラス状の段が形成されている部分がある。断面形から見て、もともと自然流路であった可能性も考えられるが、検出部分がごく一部に限られるので、遺構全体が人工的に掘削された溝か、自然流路に手を加えたものかについては判断できない。埋土は、ラミナ堆積を見せる砂層などを交えながら、黒褐色の砂質シルトが主体となって堆積している。流水と滞水を繰り返していた可能性が考えられる(第4章第3節参照)。埋土中からは、弥生土器や古墳時代の土師器片、木製品、自然木などが多数出土している。

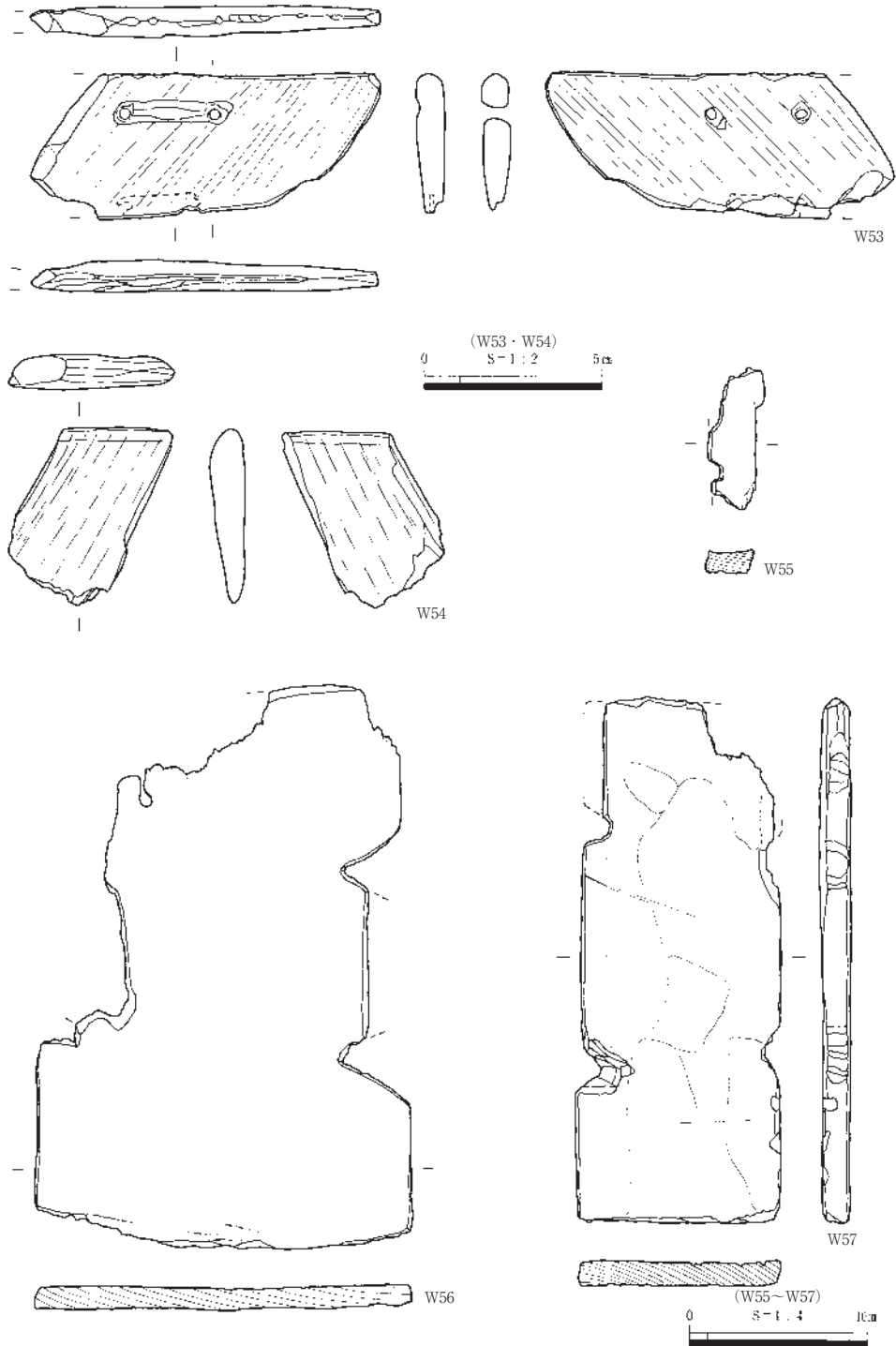
図示した30～48の弥生土器・土師器は埋土23～32層からの出土、49～52の弥生土器は埋土最下層の33層からの出土である。23～32層出土土器の主体は、図示していないものも含めて、古墳時代



第47図 溝9(古)出土土器

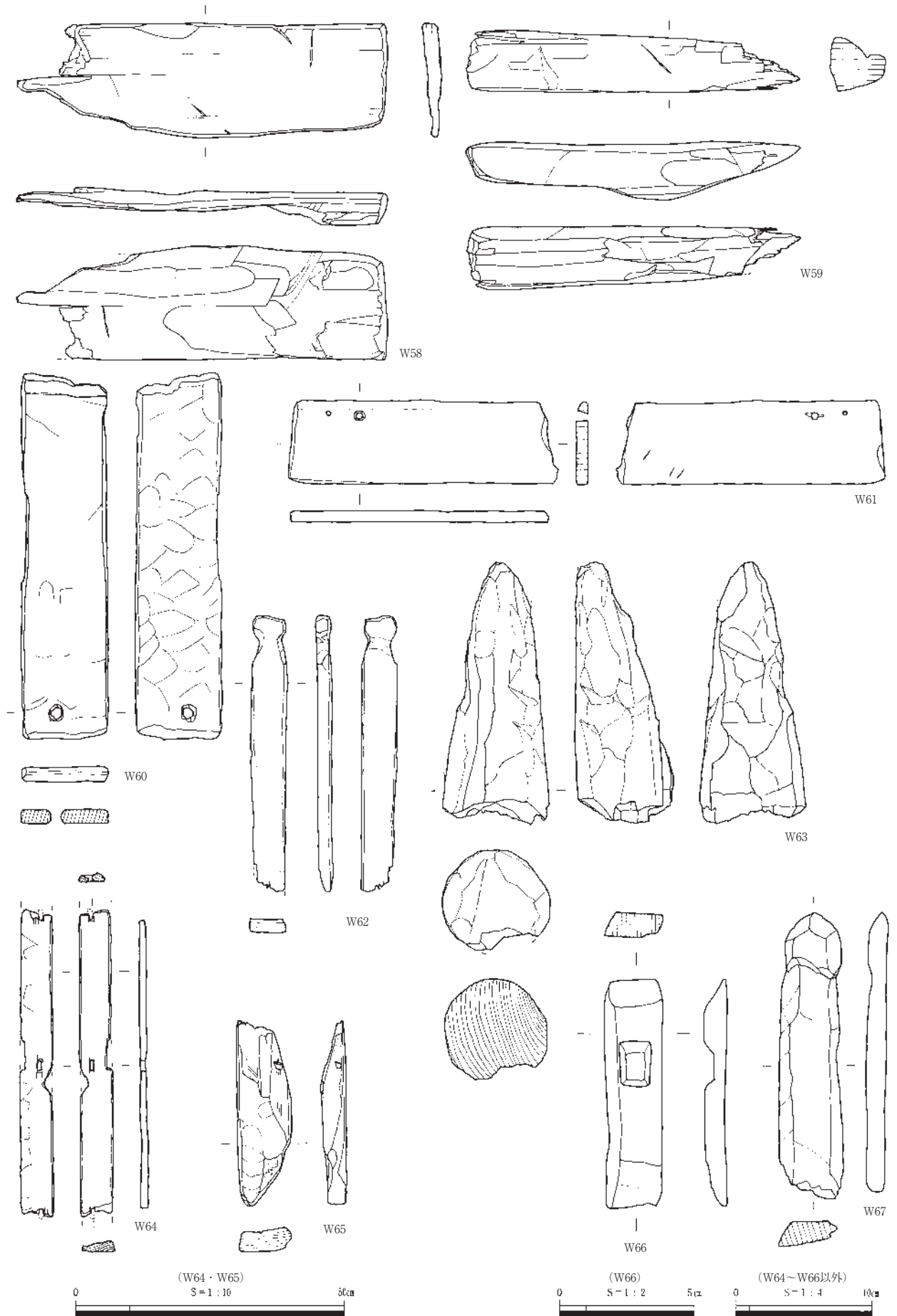


第48図 溝9(古)最下層出土土器



第49図 溝9(古)出土木製品(1)

前期の土師器である。弥生時代中期の土器が最も古く、古墳時代前期後葉の土師器が最も新しい。なお、単純口縁の甕33・34は中期に下る可能性もあるかもしれないが、小片のため時期が確定できない。複合口縁甕では中期に下るものは見られないので、33・34も前期に収まるものとしておきたい。23～32層出土の最新遺物から見て、溝9(古)の埋没時期は古墳時代前期後葉と考えられる。埋土最下層(33層)出土土器には、古墳時代の土師器は含まれず、弥生時代中期から後期にかけての土器のみが出土している。このことから、溝9(古)の機能開始時が弥生時代にさかのぼる可能性も考えられる。なお、溝9(古)に伴う構造物4の杭(W78)の放射性炭素年代も、弥生時代にさかのぼる年代値を示している



第50図 溝9(古)出土木製品(2)

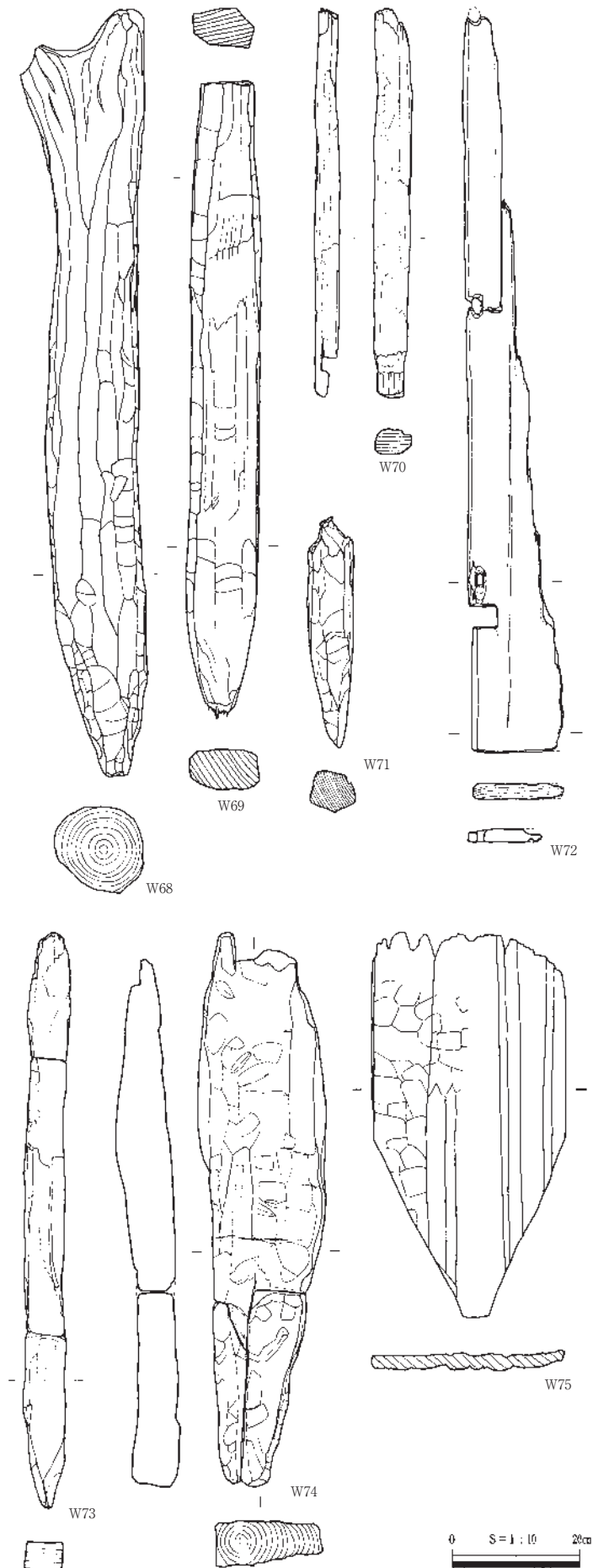
(第4章第1節参照)。

木製品は形態・器種がある程度分かるものを図示した(W53～W67)。W63・W64・W67が埋土最下層(33層)からの出土で、そのほかは埋土23～32層出土のものである。木製品も土器とおおむね同時期のものと考えられる。W53は、W10と同じく、木製の台部に鉄製の刃が装着された穂摘具である。木製台の下面に溝を彫って、鉄製刃先をはめ込んでいるが、鉄製刃先の残りは悪い。木製台の形態は平面平行四辺形で、紐孔は2つ空けられている。紐穴間は紐ずれが顕著である。木製台の樹種はヤマグワである。W54は鉄刃の付かない一般的な木製穂摘具である。平面形はW53と同じく平行四辺形になるものと考えられる。そのほか、田下駄などの農具、容器、指物などが出土している。

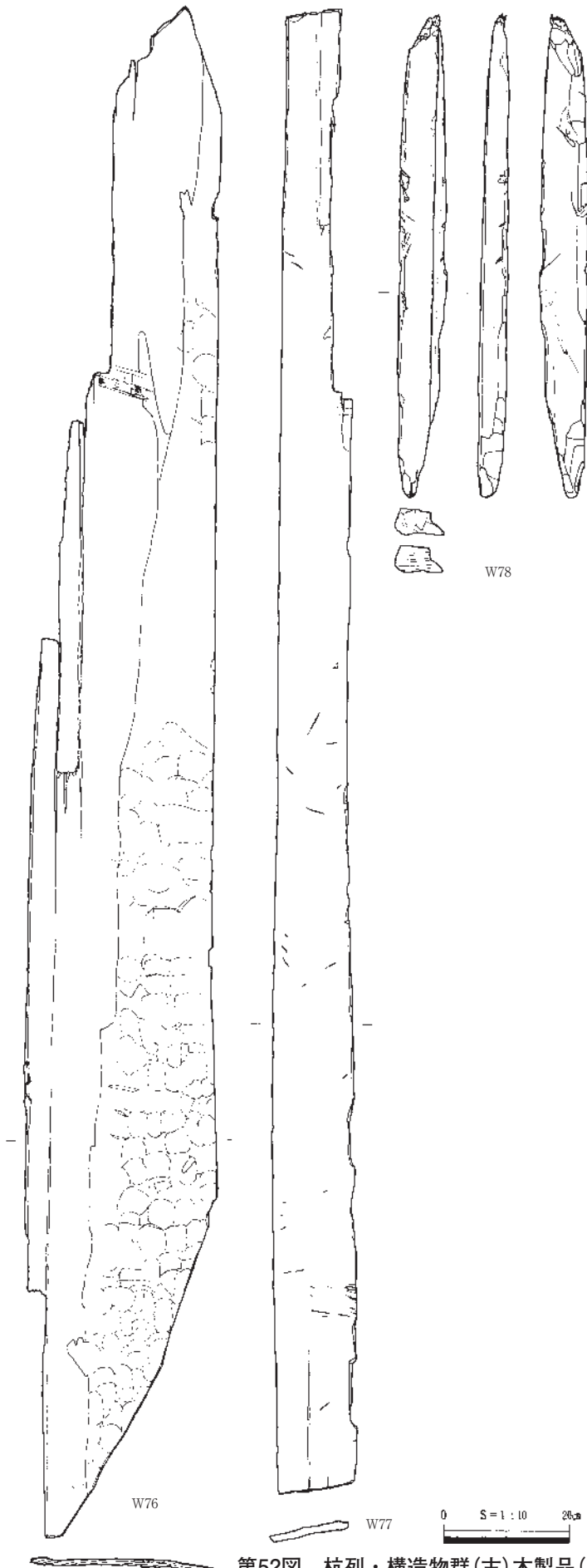
### 構造物3

溝9(古)西側の肩がえぐれて、テラス状の段を形成している部分に構築されており、溝9(古)の埋土に完全に埋まっていた。矢板列と杭、垂角礫からなる構造物である。矢板列は南東-北西方向に密に並んでいる。この矢板列とその周囲に打たれた杭で、礫と溝9(古)の肩部を保持・補強しているように見受けられる。構造物3に用いられた矢板のうち、1点を図示している(W75)。

前述のように、構造物3は構造物1と平面的に重なっている。構造物3の礫は、構造物1の礫と平面的にかなり近い位置にある。また、矢板列や杭も、構造物1の北東端の杭の真下に打たれている。本来は、構造物3も構造



第51図 杭列・構造物群(古)木製品(1)



第52図 杭列・構造物群(古)木製品(2)

物1のような構造をとって機能していた可能性があり、溝9(古)が埋没した後、再度構築し直されたのが構造物1であった可能性が考えられよう。なお、構造物1の礫や杭のなかで、直接基盤層に設置されているものは、構造物3構築時に築かれた可能性も考えられる。

#### 構造物4

溝9(古)東壁の中腹に構築された、杭と板で構成される木造構造物である。大形の板を横向きに2枚上下に並べ、その手前と奥側を杭で壁に固定している。溝東壁の崩落を防ぐための護岸施設であったと考えられる。

W76・W77の板材は、いずれも建築材の転用品で、W76は妻壁板の可能性はある。W78は板を留めていた杭で、これを放射性炭素年代測定を行ったところ、弥生時代中期～後期ごろの年代値が得られている(第4章第1節参照)。

#### 杭列5

杭列5は、構造物3から北東に延び、溝9(古)を横切っている。おおむね2列の杭が対になって、南西 - 北東方向に展開している。杭は大形のものが多く、溝9(古)の底部にしっかりと打ち込まれている。溝9(古)の東壁には、杭で固定された横木や板も見られる。なお、平面図・立面図(第45・46図)に示した杭のうち赤色のものは、新段階の杭列3として打設された可能性もあるもので、杭列3の図にも示している。これらについては、前述のように確実な構築時期を明らかにできない。ただし、杭の形状から見て、杭列5に伴うものが多いのではないかと考えている。W68～W74が、杭列5を構成

### 第3章 調査の成果

していた杭や板である。

杭列5も、新段階の杭列3や杭列4と同様に、溝9(古)を堰き止める機能を持っていた可能性などが考えられよう。

#### オ 溝8・9、杭列・構造物群の機能

以上に詳述したように、これらの遺構群は一体として機能している。大きく見て、古段階、新段階の2段階の変遷をたどっているが、その機能は大きくは変化していないものと推測される。換言すれば、古段階に構築された遺構群を、改修を繰り返しながら、継続して利用していたと言えるだろう。

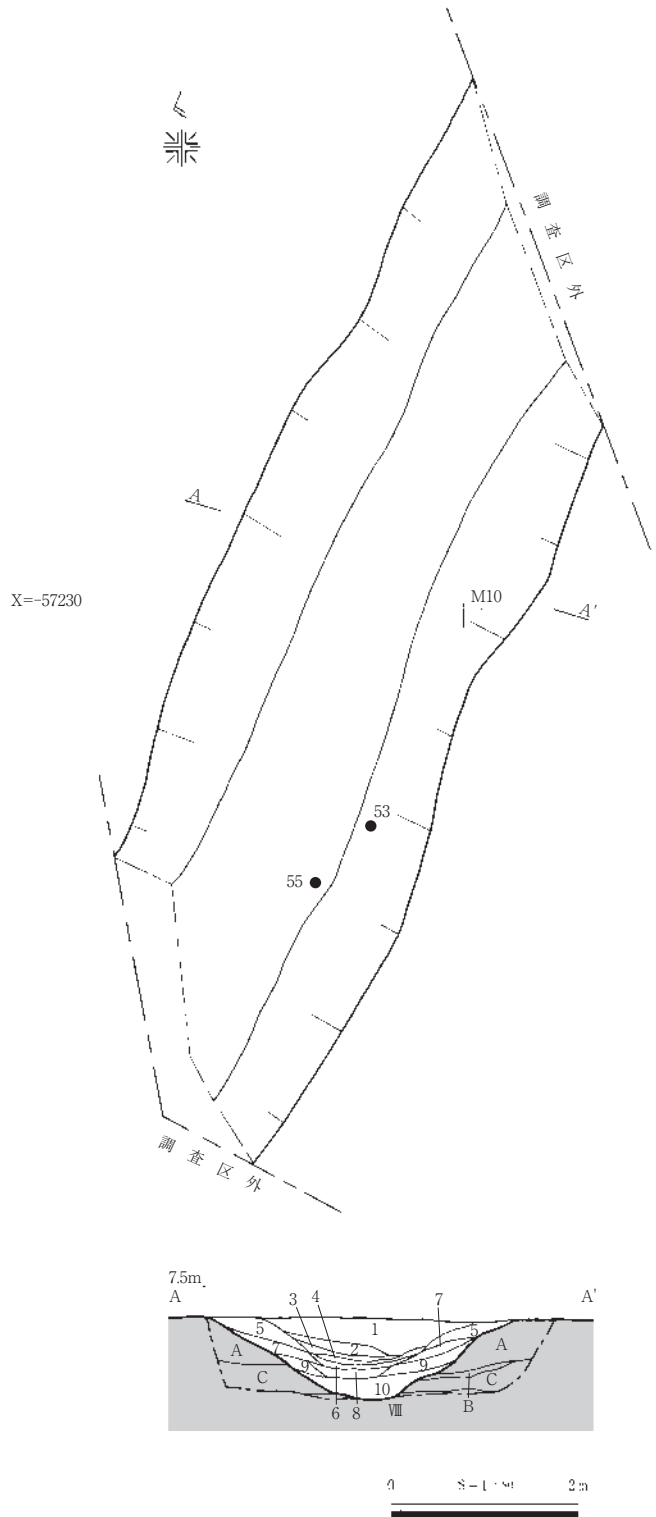
検出範囲が非常に狭いこともあり、具体的な機能を推測することは難しいが、現状では以下のように想定している。

##### ①水路と取水施設であった可能性

溝9は南から北に流れる流水を伴う水路であったと考えられる。これを横切るように、新段階では杭列3・4を、古段階では杭列5を構築しており、これらの杭列は溝9の水を堰き止めていたしがらみであった可能性がある。このしがらみによって溝9からあふれた水が、新段階では構造物1、古段階では構造物3の方向に流され、杭列1と高まりおよび杭列2によって護岸された小溝(いずれも新段階のものとは判断したが、古段階から継続している可能性がある)に流入していた可能性が考えられよう。以上のように、溝9は水路で、杭列・構造物群はこれらの遺構群の西側に水を送る導水施設であった可能性が考えられる。

##### ②水路と排水施設であった可能性

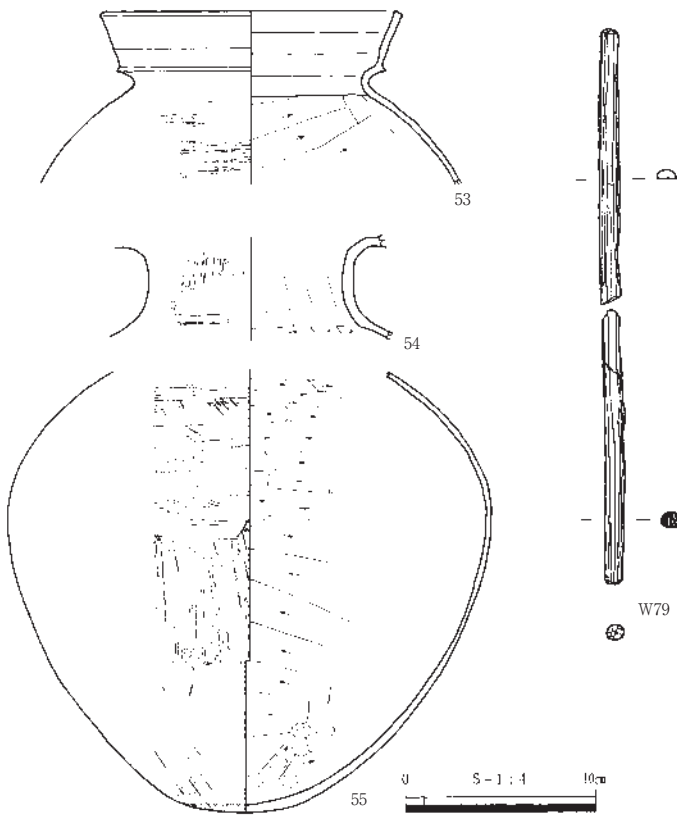
溝9は①の想定と同じく水路であるが、小溝や杭列・構造物群が①とは逆に、南西側から水を排水する施設であった可能性もある。ただし、この想定の場合には、新段階の杭列3・4、古段階の杭列5の機能が不明確であ



- 1 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト質粘土 しまり弱、粘性強。径5mm以下の炭化物を少量含む。
- 2 黒色 (2.5Y2/1) 粘土 しまり非常に弱、粘性強。
- 3 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘土 しまり非常に弱、粘性強。
- 4 黒色 (10YR1.7/1) 粘土 しまり非常に弱、粘性強。
- 5 オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘土 しまり弱、粘性強。径1～2mm程度の炭化物を含む。
- 6 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土 しまり非常に弱、粘性強。
- 7 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土 しまり非常に弱、粘性強。径1～2mm程度の炭化物を含む。
- 8 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土 しまり非常に弱、粘性強。
- 9 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト質粘土 しまり非常に弱、粘性強。8層より色調明るい。
- 10 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト質粘土 しまり非常に弱、粘性強。細砂ブロック含む。
- A 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト質粘土 しまり弱、粘性強。 基盤層
- B 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト質粘土 しまり非常に弱、粘性強。 基盤層
- C 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂 しまり・粘性非常に弱。ラミナ堆積。 基盤層

第53図 溝10





第54図 溝10出土遺物

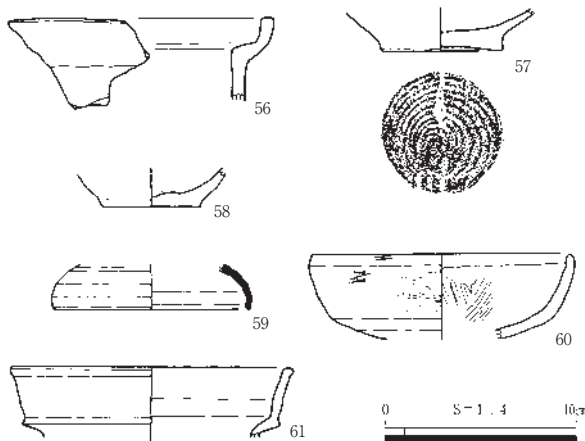
る。

また、①・②両方の機能を持っていた可能性を考えることもできるほか、さらに他の可能性を想定できるかもしれないが、現段階では①の可能性が高いと考えている。

(3) 溝10(第53・54図、PL.20・37・38)

調査区東端付近のL 9・10、M 9・10グリッドのXⅢ層上面で検出した溝状遺構である。確認した溝の長さは9.5mで、南西から北東方向に直線的に延び、調査区外に続いている。幅は3.2m、深さ0.8mで、断面形は逆台形を呈する。底面レベルは、標高約6.25mでほぼ一定の高さである。遺構内には黒褐色系の粘土が堆積する。

埋土中からは少量の遺物が出土している。そのうち図示した土師器(53～55)は埋土上層から破片がまとまって出土した。53は古墳時代前期の土師器甕、54と55はおそらく同一個体で、古墳時代前期の土師器壺である。出土遺物から見て、この溝は古墳時代前期に埋没したものと考えられる。



第55図 3区包含層出土土器

4 3区包含層出土遺物(第55・56図、PL.37・39)

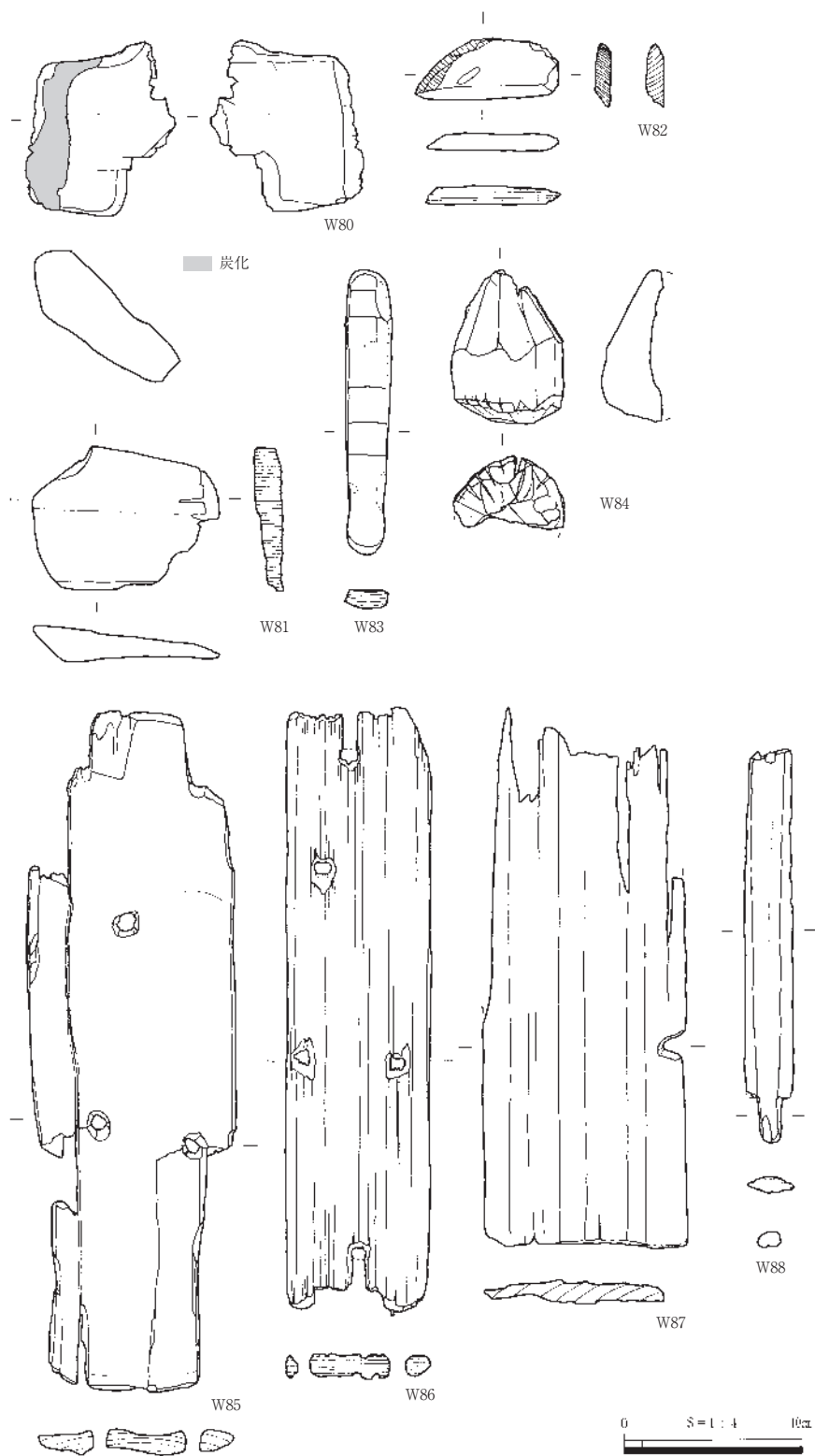
3区Ⅵ～Ⅷ層が遺物包含層である。包含層からは、土器、木製品が出土している。

土器は小片が多く、時期が確定できるものが少ないが、3区遺構内出土土器と同時期の古墳時代前期～中期を主体に、弥生時代から中世にかけてのものが見られる。56～58は中世の鍋、坏である。59は古墳時代後期後葉の須恵器坏蓋、60は古墳時代中期の土師器脚付碗、61は古墳時代前期の土師器甕である。

木製品は、器種・形態が分かるものを図示している。W79・W82は桶、W80・W81は槽、W84は木錘、W85～W87は田下駄、

第3章 調査の成果

W88は武器形である。



第56図 3区包含層出土木製品

表1 出土土器観察表(1)

遺物番号	取上番号	地区・遺構層位	挿図PL	種類器種	法量(cm)	部位残存率	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
1	1	1区 包含層	第8図 PL.21	須恵器 坏身	※11.4 ※14.0 △4.1	口縁～底部	外面：口縁部回転ココナデ、体部中位回転ヘラケズリ後ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ココナデ	密 2mm大の砂を含む	良好	外面：灰色 内面：灰色	
2	87	1区 包含層	第8図 PL.21	須恵器 坏身	10.8 14.0 △2.5	口縁～底部 ほぼ完形	外面：口縁部～体部回転ココナデ、底部ヘラオコシ後ナデ 内面：回転ココナデ	密	良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
3	5	1区 包含層	第8図 PL.21	土師器 脚付埴	※11.6 △4.1	坏部 ほぼ完形	外面：口縁端部ココナデ、不定方向のナデ 内面：縦方向のミガキ、ナデ	密 2mm大の砂を含む	良好	外面：浅黄褐色 内面：にぶい褐色	
4	227	2区 溝3 埋土中	第14図 PL.22	須恵器 坏身	※10.6 ※12.0 △4.0	口縁～体部	外面：口縁部回転ココナデ、体部中位～底部回転ヘラケズリ 内面：回転ココナデ	密 1mm大の砂を含む	良好	外面：灰色 内面：灰色	
5	227	2区 溝3 埋土中	第14図 PL.22	須恵器 坏身	※10.2 ※12.2 △3.4	口縁～体部 1/8以下	外面：口縁部～体部回転ココナデ 内面：回転ココナデ	密 3mm以下の砂礫を含む	良好	外面：灰色 内面：灰色	
6	539	2区 溝3 埋土中	第14図 PL.22	須恵器 坏身	10.0 11.8 3.8	口縁～底部 2/3	外面：口縁部～体部回転ココナデ、底部ヘラケズリ後ナデ 内面：回転ココナデ	密 3mm以下の砂礫を含む	良好	外面：灰白色 内面：灰色	外面に付着物有
7	227	2区 溝3 埋土中	第14図 PL.22	土師器 脚付埴	※13.2 — △4.2	口縁～底部	外面：ナデ 内面：ナデ	密 1mm以下の砂を含む	良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
8	535	2区 溝4 埋土中	第17図 PL.22	須恵器 坏蓋	※12.0 3.55	天井～口縁部 2/3	外面：天井部回転ヘラケズリ後回転ココナデ、体部回転ココナデ 内面：回転ココナデ	密 1mm大の砂を含む	良好	外面：灰白色 内面：灰色	
9	555	2区 溝4 埋土中	第17図 PL.22	須恵器 坏身	9.6 12.0 4.4	口縁～底部 2/3	外面：口縁部～体部回転ココナデ、体部下半回転ヘラケズリ後回転ココナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ココナデ	密 1mm大の砂を含む	良好	外面：黄灰色 内面：暗黄灰色	
10	547	2区 溝4 埋土中	第17図 PL.22	土師器 坏	※10.2 ※5.1 △2.5	口縁～底部 2/3	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外面：にぶい黄褐色～橙色 内面：にぶい黄褐色～橙色	赤色塗彩痕跡
11	512	2区 溝4 埋土中	第17図 PL.22	土師器 甕	※19.6 △6.3	口縁～頸部 1/8以下	外面：口縁部ココナデ、頸部タテ方向のハケメ 内面：口縁部ココナデ、口縁部ハケメ、頸部上半ナデ、頸部下半横方向のケズリ	密 3mm以下の砂礫を多く含む	良好	外面：浅黄色 内面：浅黄色	
12	512	2区 溝4 埋土中	第17図 PL.22	土師器 器台	※19.0 — △4.1	口縁部 1/8以下	外面：回転ココナデ 内面：回転ココナデ	密 1mm以下の砂を含む	良好	外面：灰オリーブ色 内面：褐色	
13	512	2区 溝4 埋土中	第17図 PL.22	弥生土器 甕または壺	※9.0 △2.7	底部 1/8以下	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外面：にぶい黄色～褐色 内面：にぶい黄色～褐色	
14	518	2区 包含層	第20図 PL.22	弥生土器 壺	— △3.8	頸部？ 1/8以下	外面：貼付突帯、キザミ 内面：ナデ	密	良好	外面：にぶい黄褐色 内面：黒色	
15	142	3区 溝7 埋土中	第26図 PL.22	突帯文土器 鉢	※20.2 △4.2	口縁部 1/8以下	外面：口縁部貼付突帯に刻み目を入れる 内面：風化により調整不明	密 2mm以下の砂を含む	良好	外面：浅黄色～明黄褐色 内面：黒色	内外面煤付着
16	123.216.276. 287.290.1073	3区 溝8・9、 杭列・構造物群 最上層	第30図 PL.24	土師器 甕	※15.7 △3.0	口縁～胴部 1/4	外面：口縁～胴部ココナデ、胴部上半部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ハケ後ナデ、頸部ナデおよび指オサエ、胴部縦方向のケズリ	密 3mm以下の砂礫を多く含む	良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい褐色～褐灰色	
17	122.319.320	3区 溝8・9、 杭列・構造物群 最上層	第30図 PL.25	土師器 甕	※13.8 △14.0	口縁～胴部 1/3	外面：口縁～頸部ココナデ、胴部ハケメ 内面：口縁～頸部ナデ、胴部ココ方向のケズリ	密 2mm以下の砂を含む	良好	外面：にぶい黄褐色～橙色 内面：にぶい褐色～明赤褐色	外面黒斑有
18	7.122	3区 溝8・9、 杭列・構造物群 最上層	第30図 PL.25	土師器 甕	※17.6 △11.1	口縁～胴部 1/8	外面：口縁～胴部ココナデ、胴部ハケメ 内面：口縁部ハケ後ナデ、頸部ナデ、胴部横方向のケズリ	密	良好	外面：浅黄色 内面：浅黄色	
19	271.272.281 284.291.292 296.586.872 1295.1073 1095	3区 溝8・9、 杭列・構造物群 最上層	第30図 PL.25	土師器 甕	※15.8 △21.0	口縁～胴部 1/2	外面：口縁～頸部ココナデ、胴部ハケメ 内面：口縁～頸部ココナデ、胴部横方向のケズリ	密	良好	外面：褐灰色 内面：褐灰色～黄褐色	
20	122.286	3区 溝8・9、 杭列・構造物群 最上層	第30図 PL.24	土師器 甕	※15.9 △4.4	口縁～頸部 1/6	外面：口縁～頸部ナデ 内面：口縁部ココナデ、頸部ケズリ	密 1mm以下の砂を含む	良好	外面：にぶい黄褐色 内面：灰黄褐色	外面煤付着
21	273	3区 溝8・9、 杭列・構造物群 最上層	第30図 PL.24	土師器 甕	— △3.7	口縁部 1/8	外面：口縁部ココナデ 内面：口縁部ココナデ	密 3mm以下の砂礫を多く含む	良好	外面：黒色 内面：明黄褐色	
22	21. 81 123. 552	3区 溝8・9、 杭列・構造物群 最上層	第30図 PL.24	土師器 高坏	※16.6 △4.7	坏部 1/8以下	外面：坏部ハケメ後ミガキ 内面：ハケメ	密	良好	外面：灰白色 内面：淡黄色	内・外面赤色塗彩
23	280	3区 溝8・9、 杭列・構造物群 最上層	第30図 PL.24	土師器 高坏	— △5.7	筒部 1/3	外面：縦方向のミガキ 内面：紋り目、ナデ	密 2mm以下の砂を含む	良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面赤色塗彩
24	122.123.279 278.285.630 631.636	3区 溝8・9、 杭列・構造物群 最上層	第30図 PL.25	土師器 小型丸底壺	※9.2 ※10.0	口縁～底部 1/4	外面：口縁ココナデ、胴部ハケ後ナデ 内面：口縁ミガキ、胴部ケズリ後指オサエ	密 3mm以下の砂礫を多く含む	良好	外面：にぶい黄褐色～橙色 内面：黒褐色	外面煤付着
25	566. 587	3区 溝8・9、 杭列・構造物群 最上層	第30図 PL.24	土師器 小型丸底壺	※8.8 △5.8	口縁～底部 1/2	外面：口縁～胴部ナデ 内面：口縁ココナデ、胴部ケズリ	密 2mm以下の砂を含む	良好	外面：淡黄色 内面：淡黄色	
26	635	3区 溝8 埋土中	第34図 PL.24	土師器 甕	※16.0 △6.2	口縁部 1/6	外面：ココナデ 内面：口縁部ココナデ、胴部ケズリ	密 2mm以下の砂を含む	良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
27	631	3区 溝9(新) 埋土中	第39図 PL.24	土師器 甕	※14.0 △3.2	口縁部 1/8以下	外面：ココナデ 内面：ココナデ	密	良好	外面：黒褐色 内面：浅黄色	
28	732. 797	3区 溝9(新) 埋土中	第39図 PL.24	土師器 甕	※14.4 △4.15	口縁～頸部 1/8以下	外面：口縁～頸部ココナデ 内面：口縁～頸部ココナデ、頸部下半よりケズリ	密	良好	外面：灰黄色～黒色 内面：灰黄色	
29	508.611.629	3区 杭列・構造物群(新)	第40図 PL.24	土師器 甕	※16.0 △5.1	口縁～頸部 1/3	外面：口縁～頸部ココナデ 内面：口縁～頸部ココナデ	密 1mm以下の砂を多く含む	良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	内・外面煤付着
30	1069. 1071	3区 溝9(古) 埋土中	第47図 PL.33	土師器 甕	※15.8 △19.5	口縁～胴部 1/2	外面：口縁～頸部ナデ、胴部ハケメ 内面：口縁～頸部ナデ、胴部不定方向のケズリ	密	良好	外面：灰白色 内面：にぶい黄褐色	
31	794. 1069	3区 溝9(古) 埋土中	第47図 PL.32	土師器 甕	— △9.3	口縁～胴部 1/6	外面：口縁～胴部ココナデ、胴部ハケメ 内面：口縁部～頸部ナデおよび指オサエ、胴部ココ方向のケズリ	密 4mm以下の砂礫を含む	良好	外面：浅黄色 内面：浅黄色	
32	736	3区 溝9(古) 埋土中	第47図 PL.32	土師器 甕？	— △12.3	胴部 2/3	外面：不定方向のハケメ 内面：横方向のケズリ	密 2mm以下の砂を多く含む	良好	外面：灰黄色 内面：灰黄色	外面煤付着
33	734	3区 溝9(古) 埋土中	第47図 PL.24	土師器 甕	※15.4 △3.3	口縁部 1/8	外面：ココナデ 内面：ハケメ後ココナデ	密 4mm以下の砂礫を含む	良好	外面：黒色 内面：灰オリーブ	

第3章 調査の成果

表2 出土土器観察表(2)

遺物番号	取上番号	地区・遺構層位	挿図PL	種類器種	法量(cm)	部位残存率	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
34	542	3区 溝9(古)埋土中	第47図 PL.24	土師器 甕	— △3.8	口縁部 1/8	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密 2mm以下の砂を含む	良好	外面：浅黄色 内面：浅黄色	
35	795, 1073	3区 溝9(古)埋土中	第47図 PL.24	土師器 甕	※15.2 △5.3	口縁～肩部 1/4	外面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ケズリ	密	良好	外面：灰白色 内面：灰白色	内・外面：スス付着
36	1069	3区 溝9(古)埋土中	第47図 PL.24	土師器 甕	※13.7 △4.7	口縁～頸部 1/8以下	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁～頸部上半ヨコナデ、頸部下半横方向のケズリ	密 3mm以下の砂を多く含む	良好	外面：黒色～褐色 内面：褐色	
37	973	3区 溝9(古)埋土中	第47図 PL.24	土師器 甕	※15.7 △3.7	口縁～頸部 1/8以下	外面：口縁～頸部ヨコナデ 内面：口縁～頸部ヨコナデ	密 3mm以下の砂を多く含む	良好	外面：浅黄色～橙色 内面：浅黄色	
38	1071	3区 溝9(古)埋土中	第47図 PL.24	土師器 甕	※15.0 △4.2	口縁～頸部 1/8以下	外面：口縁部ヨコ方向のハケメ後、ヨコナデ 内面：口縁～頸部上半ヨコナデ、頸部下半横方向のケズリ	密 1mm以下の砂を多く含む	良好	外面：黒色 内面：にぶい黄橙色	外面：スス付着
39	1057	3区 溝9(古)埋土中	第47図 PL.24	土師器 甕	※12.6 △6.3	口縁～肩部 1/8以下	外面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ケズリ	密	良好	外面：淡黄色 内面：にぶい黄橙色	
40	797	3区 溝9(古)埋土中	第47図 PL.24	土師器 壺	※11.0 △4.1	口縁部 1/8以下	外面：ヨコナデ 内面：横方向のミガキ	密	良好	外面：にぶい橙色 内面：灰褐色	内・外面赤色塗彩
41	886	3区 溝9(古)埋土中	第47図 PL.31	土師器 高坏	— △5.2	筒～脚部 1/2	外面：筒部ハケ後縦方向のミガキ、脚部不定方向のミガキ 内面：筒部ナデ、脚部ハケメ	密 1mm以下の砂を含む	良好	外面：灰黄色 内面：浅黄色	内外面赤色塗彩
42	1068	3区 溝9(古)埋土中	第47図 PL.24	弥生土器 直口壺	※11.0 △6.4	口縁部 1/8以下	外面：ヨコナデ、下半ミガキ 内面：ヨコナデ	密 3mm以下の砂を多く含む	良好	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	弥生時代か？
43	1094	3区 溝9(古)埋土中	第47図 PL.24	弥生土器 壺	— △3.3	口縁部 1/8以下	外面：7条の平行沈線、ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	外面：灰黄色 内面：浅黄色	吉備系土器か？
44	973	3区 溝9(古)埋土中	第47図 PL.24	弥生土器 甕	※16.8 △4.6	口縁～胴部 1/8以下	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	密	良好	外面：灰黄色 内面：灰黄色	弥生時代
45	973	3区 溝9(古)埋土中	第47図 PL.24	弥生土器 壺	— △5.8	頸部 1/8以下	外面：ハケメ後に凹線 内面：ヨコナデ	密 3mm以下の砂を多く含む	良好	外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	吉備系土器か？
46	1270	3区 溝9(古)埋土中	第47図 PL.33	土師器 低脚坏	— △4.9	坏部～筒部 1/4	外面：ミガキ 内面：坏部ミガキ、筒部ケズリ、ナデ	密 1mm以下の砂を含む	良好	外面：にぶい黄褐色～橙色 内面：灰褐色～橙色	
47	1071, 1072	3区 溝9(古)埋土中	第47図 PL.32	土師器 壺	※20.4 △13.1	口縁～胴部 1/2	外面：口縁～頸部ヨコナデ、胴部ハケメ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、胴部斜め方向のケズリ	密	良好	外面：灰黄色 内面：灰黄色	
48	880,1069,1203	3区 溝9(古)埋土中	第47図 PL.32	弥生土器 甕	※16.6 △13.5	口縁～胴部 1/4	外面：口縁～頸部ヨコナデ、胴部ハケメ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、胴部縦方向のケズリ	密	良好	外面：赤褐色 内面：灰黄色～灰白色	
49	896	3区 溝9(古)最下層	第48図 PL.32	弥生土器 甕	※24.2 △8.6	口縁～胴部 1/8以下	外面：口縁部2条の凹線、口縁～頸部ヨコナデ、胴部タテ方向のハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ後ナデ、胴部ケズリ	密 3mm以下の砂を多く含む	良好	外面：にぶい黄褐色 内面：灰黄色	
50	638	3区 溝9(古)最下層	第48図 PL.32	弥生土器 甕	— △5.8	胴～底部 2/3	外面：胴部タテ方向のミガキ、底部ナデ 内面：胴部ナデ、一部ケズリ、底部指オサエ	密	良好	外面：灰オリーブ色 内面：オリーブ黒色	
51	1073	3区 溝9(古)最下層	第48図 PL.32	弥生土器 小型壺？	— △3.0	胴部 1/8以下	外面：半裁竹管文と貝殻刺突文、2条の沈線 内面：ナデ	密 3mm以下の砂を多く含む	良好	外面：黒褐色～にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
52	1073	3区 溝9(古)最下層	第48図 PL.32	弥生土器 小型壺？	— △3.3	胴部 1/8以下	外面：3重圏同心円文と半裁竹管文、3条の沈線 内面：ナデ	密 3mm以下の砂を多く含む	良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面赤色塗彩
53	111, 113	3区 溝10埋土中	第54図 PL.37	土師器 甕	※15.4 △9.2	口縁～肩部 1/2	外面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ヨコハケ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ケズリ	密 3mm以下の砂を多く含む	良好	外面：淡黄色 内面：淡黄色	
54	111	3区 溝10埋土中	第54図 PL.37	土師器 壺	— △5.4	頸部～肩部 1/2	外面：頸部タテ方向のハケメ、肩部ヨコ方向のハケメ 内面：頸部タテ方向のナデ、肩部ヨコ方向のケズリ	密 0.5mm以下の砂を多く含む	良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	55と同一個体の可能性が強い。
55	110, 111	3区 溝10埋土中	第54図 PL.37	土師器 壺	— △23.3	肩～底部 完形	外面：肩～底部ハケメ 内面：肩～胴部ケズリ、底部指オサエ	密 0.5mm以下の砂を多く含む	良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	54と同一個体の可能性が強い。
56	102	3区 包含層	第55図 PL.38	瓦質土器 鍋	— △9.3	口縁部 1/8以下	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密	良好	外面：黒色 内面：灰黄色	
57	90	3区 包含層	第55図 PL.38	土師器 坏	※6.2 △2.2	底部 ほぼ完存	外面：坏部ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密	良好	外面：浅黄色 内面：浅黄色	
58	97	3区 包含層	第55図 PL.38	土師器 坏？	※5.0 △2.1	底部 1/4	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外面：にぶい黄褐色～橙色 内面：にぶい黄褐色	
59	81	3区 包含層	第55図 PL.38	須恵器 坏蓋	※5.8 △2.0	口縁部 1/8以下	外面：天井部回転ヘラケズリ後回転ナデ、口縁部回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ	密 1mm以下の砂を多く含む	良好	外面：明青灰色 内面：明青灰色	
60	97	3区 包含層	第55図 PL.38	土師器 脚付坏	※13.5 △4.5	坏部 1/3	外面：ミガキ 内面：ミガキ	密	良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	内外面赤色塗彩
61	158, 159	3区 包含層	第55図 PL.38	土師器 甕	※14.4 △3.9	口縁部 1/4	外面：口縁部横方向のナデ 内面：ヨコナデ	密 2mm以下の砂を多く含む	良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着

表3 出土木製品観察表(1)

番号	取上番号	地区・遺構層位名	挿固PL	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	木取り	樹種*	備考
W1	37	1区 包含層	第8区 PL.21	槽	21.0	11.5	4.7	芯去削出	スギ	
W2	43	1区 包含層	第9区 PL.21	田下駄	39.3	8.5	1.3	板目		
W3	41	1区 包含層	第9区 PL.21	田下駄	30.0	13.0	1.6	板目	スギ	
W4	40	1区 包含層	第9区 PL.21	田下駄	52.0	15.9	2.5	追紐目	スギ	
W5	42	1区 包含層	第9区 PL.21	田下駄	36.65	6.45	1.35	板目		
W6	39	1区 包含層	第9区 PL.21	田下駄	37.5	11.2	0.9	板目		
W7	4	1区 包含層	第9区 PL.21	田下駄	35.0	6.7	1.4	板目		
W8	534	2区 包含層	第21区 PL.23	田下駄	47.7	6.3	0.8	板目		
W9	117	3区 溝7 埋土中	第26区	斧柄	8.8	1.8	1.5	芯持削出		鉄斧柄か
W10	223	3区 溝8・9、杭列・構造物群 最上層	第31区 PL.25・26	穂摘具	5.0	10.4	0.8	芯去削出	コナラ属アカガシ亜属	木製台に鉄刃装着
W11	224	3区 溝8・9、杭列・構造物群 最上層	第31区 PL.26	一本平鋤	101.85	14.7	3.6	芯去削出	コナラ属アカガシ亜属	U字形鉄製鋤先を装着するタイプ
W12	360	3区 溝8・9、杭列・構造物群 最上層	第31区 PL.26	田下駄	37.2	11.8	1.7	板目		
W13	341	3区 溝8・9、杭列・構造物群 最上層	第31区 PL.26	田下駄	38.5	3.3	1.6	板目		
W14	308	3区 溝8・9、杭列・構造物群 最上層	第31区 PL.26	田下駄	55.8	7.5	1.5	板目	スギ	
W15	357	3区 溝8・9、杭列・構造物群 最上層	第32区 PL.27	容器	27.85	9.4	3.6	芯去削出		底部片
W16	178、191	3区 溝8・9、杭列・構造物群 最上層	第32区 PL.27	容器片?	15.5	4.7	4.3	芯去削出	クリ	
W17	262	3区 溝8・9、杭列・構造物群 最上層	第32区 PL.27	指物	19.9	5.8	1.5	板目		
W18	121	3区 溝8・9、杭列・構造物群 最上層	第32区 PL.27	馬形	18.0	3.1	1.0	板目		
W19	352	3区 溝8・9、杭列・構造物群 最上層	第32区 PL.27	馬形	15.9	4.1	0.8	紐目		
W20	391	3区 溝8・9、杭列・構造物群 最上層	第32区 PL.27	田下駄	14.8	4.1	3.0	紐目	スギ+スギ	大足枠の横棧。ほぞ穴に楔が貫入
W21	375	3区 溝8・9、杭列・構造物群 最上層	第33区 PL.27	杭	59.0	8.1	4.5	紐目	針葉樹	舟材の転用
W22	782	3区 溝8・9、杭列・構造物群 最上層	第33区 PL.27	舟材転用品	59.4	16.2	4.8	芯去削出	針葉樹	フナクイムシの食害あり。転用後用途不明。中央やや下に使用痕
W23	392	3区 溝8・9、杭列・構造物群 最上層	第33区 PL.27	用途不明	47.2	6.9	1.2	紐目		
W24	1052	3区 溝8 埋土中	第35区	田下駄	44.5	9.4	1.75	紐目	ヒノキ	
W25	187	3区 溝8 埋土中	第35区	栓	27.4	4.9	2.7	芯去削出		
W26	188	3区 溝8 埋土中	第35区 PL.39	用途不明	8.8	2.1	0.35	板目		
W27	1050	3区 溝8 埋土中	第35区	田下駄	31.7	5.8	1.4	板目	スギ	
W28	469	3区 構造物1	第41区 PL.28	建築材	163.7	9.5	8.3	芯持材	針葉樹	垂木
W29	472	3区 構造物1	第41区 PL.28	建築材	166.7	16.9	9.2	芯持材	広葉樹	
W30	474	3区 構造物1	第41区 PL.28	建築材	162.4	9.6	7.0	芯持材	針葉樹	垂木
W31	481	3区 構造物1	第41区 PL.28	建築材	180.0	90.0	7.3	芯持材	広葉樹	垂木
W32	475	3区 構造物1	第41区 PL.28	建築材	126.3	90.6	7.7	芯持材	針葉樹	
W33	482	3区 構造物1	第41区 PL.28	建築材	160.4	80.6	12.6	芯持材	広葉樹	
W34	477	3区 構造物1	第42区 PL.28	建築材	110.0	8.15	7.6	芯持材	広葉樹	垂木か
W35	890	3区 構造物1	第42区 PL.29	矢板	118.8	26.8	7.1	紐目	針葉樹	扉材の転用。表面に鉄製工具の傷痕があり、矢板転用以前に作業台としても使用。
W36	1296	3区 構造物1	第42区 PL.29	杭	112.8	15.3	7.0	芯去削出	針葉樹	柱材の転用
W37	1277	3区 構造物1	第42区 PL.29	杭	157.9	17.5	13.1	芯去削出	針葉樹	柱材の転用
W38	889	3区 構造物1	第42区 PL.29	矢板	105.5	24.0	4.4	紐目	針葉樹	舟材の転用
W39	961	3区 構造物1	第42区 PL.30	矢板	16.4	10.4	1.8	板目		田下駄の転用
W40	920	3区 構造物1	第42区 PL.29	杭	39.0	5.0	3.1	芯去削出	針葉樹	角垂木の転用。全体に炭化
W41	778	3区 構造物1	第43区 PL.29	矢板	115.2	20.45	6.3	板目	針葉樹	表面に鉄製工具の傷痕
W42	925	3区 杭列1	第43区	建築材	192.3	9.4	1.2	板目	針葉樹	板材
W43	775	3区 杭列1	第43区 PL.30	杭	57.5	5.0	4.8	芯持材	広葉樹	丸垂木の転用
W44	935	3区 杭列2	第43区 PL.30	杭	69.9	7.8	5.3	芯去削出	針葉樹	放射性炭素年代測定(試料No21)
W45	906	3区 杭列2	第43区 PL.30	桶底板?	21.9	9.7	1.55	板目		
W46	951	3区 杭列2	第43区 PL.30	杭	40	6.9	4.3	芯去削出	針葉樹	梯子の転用か

\* 樹種に、「針葉樹」・「広葉樹」と記したものは肉眼観察によっている。そのほかは樹種同定の結果(第4章第2節)を記した。なお、「針葉樹」はほとんどがスギである可能性が高い。

### 第3章 調査の成果

表4 出土木器観察表(2)

番号	取上番号	地区・遺構 層位名	挿図 PL	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	木取り	樹種*	備考
W47	965	3区 杭列2	第43図 PL.30	杭	45.7	6.3	4.2	芯去削出	針葉樹	
W48	462	3区 杭列2	第43図 PL.30	板	174.0	19.3	1.9	板目	針葉樹	
W49	338	3区 構造物2	第44図 PL.31	用途不明	102.5	6.5	30.0	板目	スギ	
W50	947	3区 杭列3	第44図 PL.31	板	102.3	10.0	2.0	板目	針葉樹	建築材
W51	653	3区 杭列4	第44図 PL.31	杭	81.6	8.9	8.3	芯持材	広葉樹(環孔材)	
W52	1305	3区 杭列4	第44図 PL.31	杭	90.3	50.8	4.6	芯去削出	針葉樹	
W53	1300	3区 溝9(古) 埋土中	第49図 PL.33	徳摘具	4.1	8.15	0.9	芯去削出	ヤマグワ	鉄刃装着。紐穴間の紐ずれ痕顕著
W54	1090	3区 溝9(古) 埋土中	第49図 PL.33	徳摘具	5.0	3.5	1.0	芯去削出		
W55	911	3区 溝9(古) 埋土中	第49図 PL.34	田下駄	8.0	2.6	1.2	追柁目	針葉樹	スギか
W56	911	3区 溝9(古) 埋土中	第49図 PL.34	田下駄	31.6	21.3	1.4	追柁目	スギ	
W57	1042	3区 溝9(古) 埋土中	第49図 PL.34	田下駄	29.6	11.4	1.5	追柁目	スギ	
W58	821	3区 溝9(古) 埋土中	第50図 PL.34	脚付槽	27.5	8.5	2.5	芯去削出		
W59	1093	3区 溝9(古) 埋土中	第50図 PL.34	容器底部	24.7	4.6	4.1	芯去削出		
W60	769	3区 溝9(古) 埋土中	第50図 PL.34	指物	27.2	6.5	1.1	柁目		
W61	1096	3区 溝9(古) 埋土中	第50図 PL.34	指物	19.9	6.2	0.8	柁目		
W62	1096	3区 溝9(古) 埋土中	第50図 PL.34	用途不明	20.5	2.7	9.05	板目	スギ	
W63	798	3区 溝9(古) 最下層	第50図 PL.34	竖杵	19.4	12.9	7.5	柁目		先端部炭化
W64	990	3区 溝9(古) 最下層	第50図 PL.34	用途不明	57.4	6.1	2.1	追柁目	コナラ属アカガシ亜属	
W65	981	3区 溝9(古) 埋土中	第50図 PL.34	杭	34.5	10.3	4.2	芯去削出	針葉樹	舟材の転用
W66	798	3区 溝9(古) 埋土中	第50図 PL.34	用途不明	8.5	2.2	0.9	柁目		
W67	798	3区 溝9(古) 最下層	第50図 PL.34	用途不明	21.2	4.7	1.9	芯去削出		垂木を分割したもの
W68	1181	3区 杭列5	第51図 PL.35	杭	120.3	19.5	13.55	芯持材	広葉樹	
W69	1204	3区 杭列5	第51図 PL.35	杭	10.0	11.1	6.3	芯去削出	針葉樹	
W70	813	3区 杭列5	第51図 PL.35	杭	61.0	5.7	4.0	芯去削出	針葉樹	建築材転用
W71	1238	3区 杭列5	第51図 PL.35	杭	37.0	7.5	6.4	芯去削出	針葉樹	
W72	726	3区 杭列5	第51図 PL.35	板	110.5	14.3	2.4	板目	針葉樹	
W73	1257	3区 杭列5	第51図 PL.35	杭	80.2	6.6	4.4	芯去削出	広葉樹	全体が炭化
W74	1164	3区 杭列5	第51図 PL.35	杭	87.0	20.1	8.7	芯持材	広葉樹(環孔材)	
W75	1234	3区 構造物群3	第51図 PL.35	矢板	60.6	30.5	2.9	追柁目	針葉樹	
W76	1194	3区 構造物群4	第52図 PL.36	板	243.1	30.2	1.3	板目	針葉樹	妻壁板か
W77	1195	3区 構造物群4	第52図 PL.36	板	235.6	13.0	1.6	板目	針葉樹	建築材
W78	1191	3区 構造物群4	第52図 PL.35	杭	76.95	7.7	4.2	芯去削出	針葉樹	放射性炭素年代測定(試料No.22)
W79	106	3区 溝10 埋土中	第54図 PL.38	棒	36.3	2.6	2.1	芯去削出		丁寧な加工。紡織具部品の可能性
W80	10	3区 包含層	第56図 PL.39	槽	9.9	8.5	7.5	-		一部炭化
W81	11	3区 包含層	第56図 PL.39	槽・盤類	10.7	8.3	2.2	柁目		底部片
W82	101	3区 包含層	第56図 PL.39	桶底板	3.5	8.1	1.2	柁目		
W83	84	3区 包含層	第56図	農具	16.1	2.2	1.0	板目		
W84	8	3区 包含層	第56図 PL.39	木錘	8.6	6.3	3.1	芯持材		紡織具。「ツチノコ」
W85	496	3区 包含層	第56図 PL.39	田下駄	38.4	11.7	1.4	板目		
W86	171	3区 包含層	第56図 PL.39	田下駄	34.0	8.1	1.35	板目		
W87	510	3区 包含層	第56図 PL.39	田下駄	30.4	11.6	1.4	追柁目		
W88	80	3区 包含層	第56図 PL.39	武器形	22.2	2.8	0.9	板目	スギ	剣形

\* 樹種に、「針葉樹」「広葉樹」と記したものは肉眼観察によっている。そのほかは樹種同定の結果(第4章第2節)を記した。なお、「針葉樹」はほとんどがスギである可能性が高い。

表5 出土玉類観察表

遺物 番号	挿図 PL	地区・遺構 層位	器種	石材	法量(cm)			
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)
S1	第47図 PL.31	3区 溝9(古) 砂層	石製玉	堆積岩 (泥岩?)	2.4	1.2	0.35	1.5